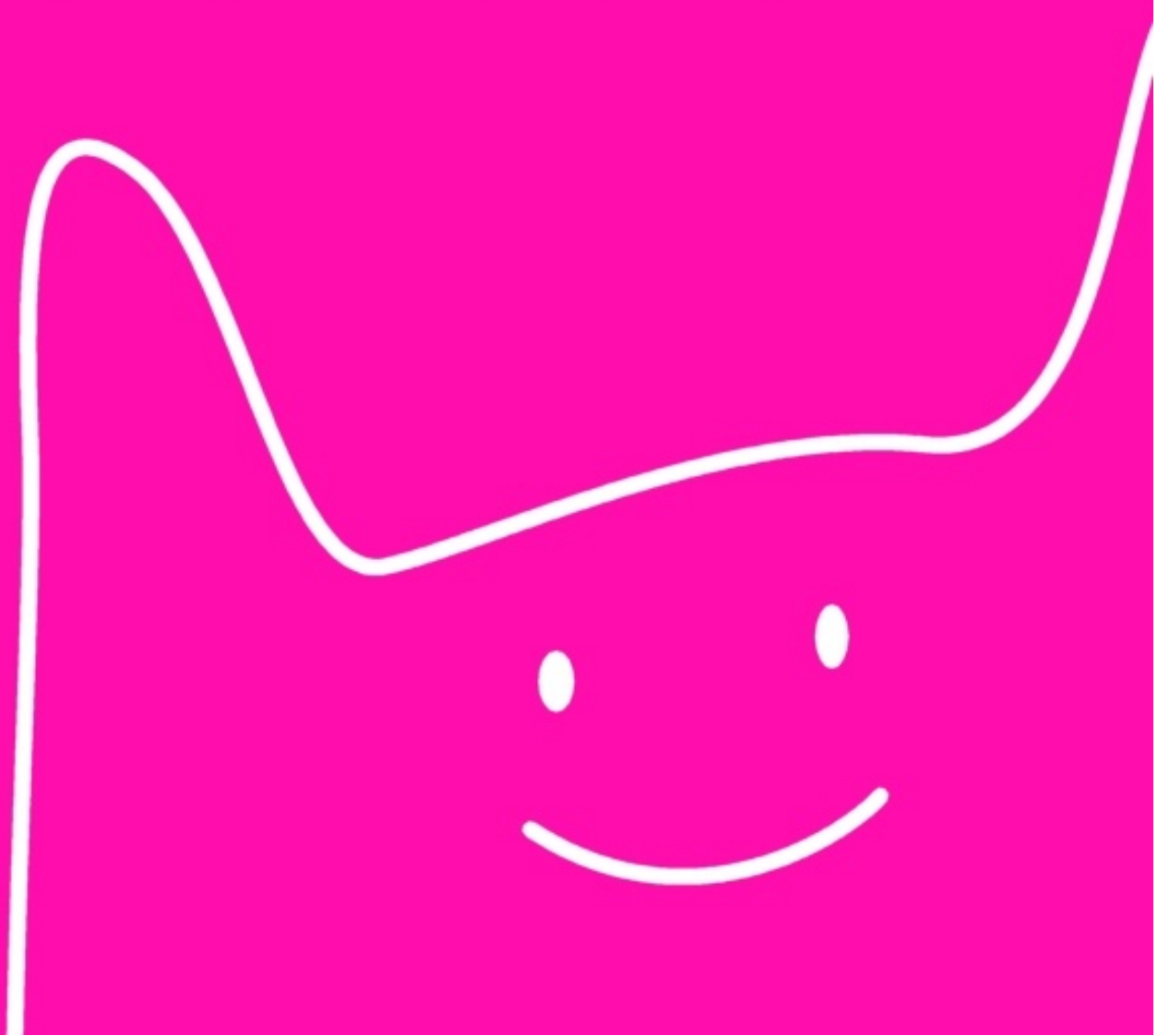


女子高生

ギャンブル

プリンセス



プロローグ

それは、蛇のような生き物だった。縦横無尽に動き回るそれは、人間によって作り出されているながら、決してその意に従って動くことはない。

否、確かにその生き物を動かしているのは人間であった。しかし、あまりに多くの人間から影響を受けるために、一人の人間はその生き物を操るにはあまりにもちっぽけな存在であったに過ぎない。

整然と並べられた四台のディスプレイを前に、その蛇をじっと見つめる一人の少女の姿があった。

美乃原(みのはら) 未来(みらい)。日本はもとより、世界に名だたる巨大な複合企業体「美乃原財閥」総裁の愛娘だ。

未来は来る日も来る日も、飽きることなく画面に映し出される蛇を眺めていた。蛇の番　それが、彼女の毎日の楽しみであった。

未来のいる部屋に、一人の少女が入ってきた。未来の一つ年上の姉、綾優(あゆ)だ。静まりかえったこの部屋におよそ物音と言うべきものが生じたのは、実に数時間ぶりのことであった。

「コーヒー淹れたわよ」

綾優は未来のテーブルにコーヒーカップを置くと、後ろから未来の見つめているディスプレイをのぞき込んだ。

「やってるわね。儲かってる？」

未来は画面から目をそらすことなく、

「まあまあ」

抑揚のない、無感動な声で言った。

ディスプレイには、青と赤の線で構成されるグラフや毎瞬変化する数値がいくつも表示されているが、それが何を意味するのか綾優には理解することができなかった。上下に変動する赤青のグラフは彼女にとって、野原にいる奇怪な蛇のようなものとしてしか映っていなかった。

「どれくらい？」

「今のところ、六十万円ほど」

「ふ～ん」

六十万円は、綾優が一ヵ月にもらう小遣いのちょうど六十倍に相当する。それは彼女がどんなに家の手伝いをして、母親に小遣いの値上げを要求しても決して手に入らない額だ。

未来と綾優が学校から帰宅してまだ数時間。その間にそれだけの金額を稼ぐことのできる未来に綾優は感服していた。

「いいなあ。私の小遣いも運用してよ」

未来はコーヒーを一口飲んでから、

「姉さんの金まで運用する自信はないわ」

「まあまあそう言わずに。私は利益の半分だけもらえればいいし、万一損失が出ても怒らないから」

未来は首を横に振った。

「私は国外のFX業者を使っているから、日本のレバレッジ規制の適用を受けないの。証拠金なら足りてるから、どうしてもやりたいなら姉さんが自分でやりなさいよ」

FXにおいて、実際の証拠金以上の金額を取引できる仕組みをレバレッジという。日本ではFXの射倖性を抑えるため、二〇一一年以降はレバレッジの最大が二十五倍に制限されている。

「ればれっじ？ ...よくわからないけど、未成年だと口座開くの大変でしょ？」

「法人の名義なら問題ないわ。父上に頼んで、財閥傘下の休眠会社を譲ってもらえばいい。その方が税金の面でも都合がいいから」

「はうあ」

溜息をつく綾優。

綾優と未来は、姉妹でありながら血縁はない。綾優は、未来の父親の再婚相手の連れ子である。二人が初めて出会ったのは、綾優の父と未来の母が結婚をした一年前のことだった。

綾優は未来と始めて会ったときのことをよく覚えていた。整った目鼻立ちに、驚くほどか細い手足。艶やかな長い黒髪に、透き通るほど白い肌を持つその少女は、ところどころほころびたみすばらしい服装をしていた。髪を茶色に染め、化粧をし、ヒールを履いて出かける綾優とは違い、驚くほど質素な外見だった。綾優は母親から再婚相手は世界的にも有名な企業のCEOであると聞かされていただけに、その娘として紹介された少女を見たときの驚きは今でも忘れられなかった。

未来の実の母親は、ある国の元首だった。美乃原財閥の総裁が彼女と結婚したのは、その国での事業展開を狙っての閨閥結婚だったとされている。未来という名前はあくまで日本での名前であり、本国では別の名前があった。ユリアという名の後に、国の名前であるディズラエリをつけたユリア・ディズラエリが未来の本名だった。

母親の国で幼少から英才教育を受けた未来は、若くして士官学校を卒業すると、海外の大学を飛び回り、帰国後は政府の要職に就いた。だが、今から二年前、母親が政変によって暗殺され、祖国を追われた未来は父親のいる日本に逃れたのだった。

ところで、今でも未来は十億円近い個人資産があるそうなのに、服装にはほとんど金をかけていない。家では着古した洋服を着ているし、学校には指定の制服ではなく、どこからか調達してきた制服のような服で通っている。いや、彼女は服装どころか、ありとあらゆるものに金をかけていなかった。稼いだ金のすべてを貯めておくだけの生活のどこが面白いのかと、綾優はいつも疑問に思っていた。

現在、未来と綾優の小遣いは月五千円と決められているが、これは今の未来と綾優の母親が「中学生には中学生らしい小遣いの額を」と決めたことによるものであり、結婚前の未来はそれ以上の額をもらっていた。これが、現在未来と綾優の資産に著しい差がある理由となっており、そのことが両親の結婚後はしばしば未来と綾優の間での対立の火種となった。このため、譲歩した未来が三十万円を綾優に渡し、晴れて二人は互いを姉妹と認め合うことになった。しかし、実際は未来が綾優に渡したのは自分の貯蓄の割にも満たない額であったため、現在でも二人の貯蓄は大幅に異なっていたが、綾優は今ではもうそのことはどうにもならないと諦めていた。

そんな昔のことを思い出した綾優は、再び大きなため息をつくと、

「未来はお金がいっぱいあっていいわね。でも、そんなに稼いでどうするのよ？ 老後はルクセンブルクで悠々暮らすつもり？」

未来はディスプレイから視線を動かすことなく、

「人間がお金を求めることに理由は要らないでしょう。人間は地球上に存在する動物の中で唯一、理性を持たない動物だから」

「理性を持たない？」

「そう。人間の欲望には際限がないの。欲望が無限の一方、資源は有限。それが人間が決して幸せになれる理由よ」

淡々と話す未来の声には、およそ感情というものが感じられない。未来はディスプレイの前にあるキーボードを操作しながら、

「古代の快樂主義者は欲望を押し殺すことによって幸福を得ようとしたそうよ。それは正しい解決だけど、

人間の本性には反しているわ」

「だから未来も金を求めるの？」

「そうかもしれない」

未来が言い終わった瞬間、ディスプレイの隣に置かれていたスピーカーから電子音が鳴り響いた。綾優が目をやると、ディスプレイの一つに表示されていた表の一行が点滅していた。慌ててキーボードを叩く未来。点滅する行の数値の一つが徐々に小さくなっていき、やがてマイナスに変わった。そして、行全体の色が変わり、「STOP LOSS」の文字が表示された。

未来が言った。

「まったく。姉さんが邪魔するから、下落の兆候を察知できなかったじゃないの」

「ご、ごめんなさい...」

「どうしてくれるの？ 今日の利益が一五万になってしまったじゃない」

合計で儲かってても怒るのかよ、と思った綾優。

頬を膨らませながら、キーボードを叩く未来。しばらくすると、ディスプレイの一つが切り替わり、ニュースと思われる画面が表示された。金髪のアナウンサーが話しているのは、おそらく英語だろうと綾優は思った。ニュースに耳を傾け、通貨が暴落した理由を調べている未来に、綾優が言った。

「何て言ってるの？」

「アメリカの財務長官が日本国政府による度重なる為替介入に不快感を表明。ドルが急落したのは、多分このせいね」

と未来。

「ふ～ん。何でもわかるのね、未来は」

今年で高校二年生になったばかりの綾優は、まったく英語が理解できない。にもかかわらず、ニュースの内容を瞬時に把握した妹の未来を見て、同じ姉妹でありながらどうしてこうも違うのだろう。私も最初から両家の子女に生まれたかったと思った。

だが、そんな綾優の未来への感心を裏切るかのように、未来はもう一つのディスプレイに表示された文章を差して、

「いや。そう日本語訳に書いてあるのよ」

冷淡な口調で言った。

九条との出逢い

私の通う紗倉学院高校には、レストロン・カツェという高級な食堂が入っている。価格は安くはないが、おいしいと評判で、休み時間には生徒たちの憩いの場所となっている。

昼休み、食堂に入った私は、券売機でカツェ一番の人気メニューであるカルボナーラとコーヒーの食券を買い、カウンターで商品を受け取った。どこに座ろうかと座席を見渡してみると、奥のテーブルに未来の姿を発見した。

いくつものテーブルの間を縫って、未来の隣に座った私。未来はというと、テーブルに置かれたスマートフォンの画面をじっと見つめており、私が来たことに気づいていない様子だった。

画面を覗いてみると、そこには刻一刻と変化する数値と、青と赤でできたグラフが表示されていた。

私がコーヒーを飲んでいると、その香りで気づいたのか、不意に未来がこちらに目をやった。

「姉さん」

「珍しいね。いつも昼は食べないのに」

未来は混雑しているからという理由で、昼間の食堂に近づくことが滅多にない。その代わりに、いつもは食堂の外の自動販売機で売られている一杯七十円のココアで満足しているのだった。

「今日はちょっと空(す)いていたから」

スマートフォンの画面から目を離さない未来。そういえば、今日の食堂はいつもよりすいているようだった。

私はカルボナーラを食べながら、

「どうなの？ 儲かってる？」

未来は何度か画面にタッチしてから、

「評価損益が十七万」

「評価損益？」

聞き慣れない言葉だ。

「今決済すればそれだけ儲かるという値。言うなれば、想像上の利益よ」

なるほど。

「毎日どれくらい稼いでるの？」

「日利およそ一パーセント」

日利一パーセント？ 私の郵便局の定期預金の年利が〇〇・二パーセントだから、少なくともそれよりは高いはずだ。

「それって、年利にするとどれくらい？」

「およそ278パーセント」

うわ。国内の銀行に預けていては到底得られない利率だ。

私が言った。

「いいなあ。私もFXやろうかな...」

未来は何も言わず、スマートフォンを操作していた。

「聞いている？」

未来は画面から目をそらすことなく、

「聞いている」

「ねえ、取引のコツを教えてよ。そうしたら私もお父さんに口座を用意してもらって、自分で稼げるで

しょ？ ...ねえ、いいでしょ？」

未来はしばらく黙ってスマートフォンを操作していたが、私が執拗に話しかけるのに屈したのか、やがて口を開いた。

「いいわ。重要だからよく聞いて」

おっ、教えてくれるのか。よかった。これで近いうちに私も億万長者。いやあ、未来のような天才FX少女が妹でよかったよ。

未来の口に耳を近づけ、耳を澄ます私。

未来が言った。

「大切なのは、金は金のあるところにしか集まらないということ」

はい？ それってFX取引のコツじゃないよね。というか、何でそんな夢のないことを...

啞然とする私に、未来が言った。

「要するに、金のない人は市場に参入しない方が合理的よ」

「で、でも、レバレッジとかいうのを使えば、証拠金の何倍も取引できるんでしょ？」

だったら問題ないじゃないと思う私。

「レバレッジによって取引できる金額を増やしても、現実を持っているお金が増えるわけじゃないでしょ？」

質料を有する物体が引力を持つように、金もまた引力を持っているのよ。同じ宝くじでも、貧乏人が買うのと金持ちが買うのとでは当たる確率が違う。非科学的と思うかもしれないけれど、現実はそうよ。つまり、値上がり値下がり二通りの結果しか持たない相場にありながら、資産の少ない姉さんは他のプレイヤーの食べ物にしかならないわ」

だったらだめじゃない。私のような貧乏人がはい上がることはできないのか...

未来が続けた。

「もっとも、この世には明らかに参入するのが合理的でない賭博が存在するわ。宝くじでは五割、パチンコでは二割を胴元が取る。食べ物になることがお望みというなら止めないわ」

「わかったわよ...」

肩を落とす私。

未来は何事もなかったかのように、淡々とスマートフォンの画面をタッチし続けている。

突然、見知らぬ声が聞こえたのはその時だった。振り返ってみると、隣の席に一人の男子生徒が座っていた。学院の制服を着ているところからして、学院の生徒であることは間違いなさそうだが、初めて見た顔だ。

「面白い話をしているね」

ニコニコと屈託のない笑みを浮かべる男子生徒。いつから聞いていたんだろう？

未来は彼を一瞥しただけで、すぐにスマートフォンに目を落とした。興味が無いらしい。

「いえ、まあ...」

苦笑いする私。

「FXに興味があるの？ 僕はFXの部活に入ってるんだけど、よかったら見学に来ないかな？」

えっ、FXの部活？ そんなのうちの学校にあっただろうか？

不思議がる私に、男子生徒が言った。

「表向きはコンピューター研究部ってことになってるけど、実際にはFXと株をしているんだ。通称『投資部』。FXと株の取引について学べるとともに、収益を上げることができる理想の部活だよ。初心者でも大歓迎。特に君のような美少女はね」

び、美少女？ そんな言葉、面と向かって言われたことはない。顔を赤らめる私。

とはいえ、ちょうどFXを始めようと思っていたときに声をかけてくれるなんてありがたい。未来は私がFXをやるのに賛成でないみたいだし、この人に教えてもらうのも悪くないか。とりあえず見学だけでもしてみよう。

「では、ぜひ見学させてください」

「じゃあ今日の放課後、部室棟三階のコンピューター部で待ってるね。僕は部長の九条(くじょう)大勝(まさかつ)。よろしくね」

「美乃原綾優です。よろしくお願いします」

続いて、九条は未来に声をかけた。

「そこのお嬢さん」

未来は何も言わずに、九条の方を見た。

「よかったら君も見学に来ないかな？ 見たところ、すでにFXをしているみたいだけど、うちの部ならもっと活躍できるかもしれないよ。証拠金なら大量に用意してあるから」

私は未来がこの提案を断ると思った。なぜなら、未来は常に独りで行動するタイプだ。他人の言うことを聞くような人間ではない。

だが、未来は無言でうなずいた。そして、スマートフォンに視線を落とした。

あらら。これは意外。

未来にしては珍しいこともあるものだ。まさかこの九条とやらと協力してさらに稼ぐつもりなのか。かわいい顔して、未来の欲深さは計り知れないな。

「投資部」入部

六限目の授業が終わり、放課後になった。私は「食堂で一緒に夕ご飯を食べよう」などという女子たちの誘いを断り、真っ先にコンピューター研究部に向かっていった。

中庭を抜け、キャンパスの端にある部室棟の三階に行くと、コンピューター研究部というプレートのついた部室の前には、独り未来がたたずんでいた。床に置かれた鞆の脇に立ち、部員がやって来るのを待っているようだった。

「あれ、まだ誰も来てないの？」

コンピューター研究部をはじめとする多くの部室が軒を連ねるここ部室棟は、授業の行われる建物からはかなり遠かった。授業が終わってからすぐにここに向かった私はともかく、他の生徒たちがまだ到着していないのは不思議ではなかった。

未来は首を振ると、

「人はいるわ。私は姉さんを待っていただけ」

「何だ。中で待っててもよかったのに」

「誘われたのは主に姉さんだから」

そうかい。

投資部のドアをノックする私。中から「どうぞ」のこをが聞こえたのを確認し、ドアを開けた。

次の瞬間、ひんやりとした冷房の空気が頬に触れた。そこは十畳ほどの部屋だった。中央には口の字型に並べられたデスクがあり、その上にはいくつものディスプレイが所狭しと並べられていた。

デスクには九条と一人の女子生徒が座っていたが、入ってきた私たちの方を見たのは、九条だけだった。

「いらっしゃい。待ってたよ」

九条はもう一人の部員に、「ちょっと僕のポジションを見ててくれ」と言って、立ち上がった。六限を終えてすぐここに向かった私や未来より先に来ていたということは、ひとつ前の時間は休講だったのだろうか。

私が言った。

「お早いお着きですね。六限目は休講だったんですか？」

「いや、取引中は相場から目が離せないからね。授業中でも交代で誰かがここに残ることになっているんだ」

授業を休んでまでやっているとは驚きだ。そこまで徹底しているとは。

九条は、壁に立てかけられていた折りたたみ式の椅子を二つ、自分のデスクの前に並べた。

「まあ座ってよ。今、お茶を淹れるから」

勧められた椅子に座る私と未来。九条のデスクにある三つのディスプレイには、いくつものグラフが表示されていた。いち、にい、さん...。全部で六つだった。為替の取引をするには、これだけのグラフを同時に読み取る能力が必要とされるのか。私にできるかな？

不安になる私。未来はというと、無表情な顔で同じくディスプレイの表示を眺めていた。

紅茶の注がれたカップの乗った盆を持ってやってきた九条は、私と未来の前にカップを置くと、私の隣に座った。

「よく来てくれたね。まずは部活の説明をしよう。ここコンピューター研究部、通称『投資部』の部員は部長の僕を含め三名。ここでは部員が持ち寄ったお金や、生徒から集めたお金をFXや株で運用しているんだ」

生徒からも出資を募っているのか。

「活動時間は原則、朝の八時からその日の完全下校時刻まで。朝と放課後に部員全員がここに集まることになっていて、授業中は交代で一部が残る。部員は毎月、部長である僕の采配により、運用益の一部を受け取れることになっているんだ」

お金が受け取れるのか。これは面白い。

「基本的な説明はこれくらいだね。何か質問はあるかい？」

私は勢いよく手を上げた。

「はいっ。毎月どれくらい稼げるんですか？」

九条は笑みを浮かべると、

「いい質問だね。どれくらい稼げるかは、努力と運次第だ。だが、そうだね」

九条は向かいでディスプレイを見つめている女子生徒を指さした。

「彼女はこの部活の稼ぎ頭、歌舞谷(かぶや) 紮富(ぶんふ)。株式投資が専門の彼女の先月の配当は三十五万円だ」

「ええっ、すごい！」

目を輝かせる私。私もそんなにお金が稼げたらいいな。そうすれば、いつも莫大な金を稼いでいる未来を見返してやることができるのだから。

心を躍らせる私とは対照的に、九条は落ち着いた口調で、

「うちでは特別なことじゃないさ。万単位の配当をもらってる部員は少なくない。他にもすさまじい利益を上げているやつは」

そう言いかけたとき、ドアが開き、一人の女子生徒が入ってきた。金色に染めた髪に、露出狂もびっくりの超ミニスカート。日焼けした小麦色の肌と、濃い化粧の彼女は、

「すみませんっ。遅れました～」

私たちに目をくれることなく、部室の隅にある学校机に荷物を放り投げると、すぐに机に着席した。

九条が言った。

「噂をすれば影か。彼女は高金利通貨の女王、篠崎(しのぎ) 奈々(なな)だ。彼女は長期投資により、スワップポイントの高い通貨で利益を上げることを得意としている。彼女の先月の配当は二十七万円だ」

二十七万円だって？ 月一万円の小遣いの私から見れば目がくらみそうな金額だ。

ところで、スワップポイントって何だろう？ 家電量販店とかでよくある、商品を買うともらえるポイントかな？

「あの、スワップポイントって何ですか？」

「ああ、ごめんね。スワップポイントとは、金利の高い通貨を保有することによって得られる利息のこと。我が国では実質的にゼロ金利政策がとられているから、基本的に外国の通貨を購入するとスワップポイントがもらえるね」

ふむ。何だかよくわかならいいけど、とにかく金になるものらしい。

「どうだい？ 投資部の魅力はわかってもらえたかな？」

「は、はい」

「よかったら君たちも投資部に入らないかな？ もちろん、取引の方法は僕が一から教えてあげるよ」

ぜひお願いしますと言おうとした私。だがそれよりも早く、未来が口を開いていた。

「いくつか訊きたいのですが…」

おっ。未来が興味を持ったようだ。

「どうぞ」

「口座の名義はどうなっているのですか？」

「学院の許可を受けて設立した投資部の株式会社さ。登記上の住所はここ。学生がおおっぴらに為替の取引をやるわけにもいかないから、表向きは学内フリーペーパーの広告収入で利益を上げているってことになってるよ」

ちなみに、うちの学校は学生の起業を促進することを売りにしていて、学内の一室を会社の所在地として登記することを認めている。

「証拠金の額は？」

「二千万円くらいかな。うち一千万は僕の出資で、あとは部員と他の生徒から募ったもの」

矢継ぎ早に質問していく未来。十個ほど質問をした未来は納得したのか、それきり口を閉ざした。

私が言った。

「私、投資部に入りたいです。ぜひ入れて下さい！」

九条は頷くと、未来に向かって、

「君はどうする？」

「入ります」

「じゃあ手続きをするから、ちょっと待ってて」

九条は机の引き出しから、部員の氏名、学年、学籍番号が書かれた一枚の紙を取り出した。そして、懐から取り出したペンとともに私に渡した。ボールペンだと思ってペンの上の部分を押してみると、出てきたのは万年筆の先だった。

ノック式の万年筆なんて洒落たものを持っているじゃないか。私もこれくらい買えるようになりたいな。

必要事項を記入した私は、用紙を未来に渡した。そして、未来が記入を終え、用紙を九条に返した。

内容を確認した九条が言った。

「よし。これで今日から君たちは投資部の部員だ」

紙をしまった九条は、私と未来に向き直った。

「お昼のお二人の会話から察するに、綾優さんはまだFXの取引をしたことがなくて、未来さんはすでにしているんだよね？」

「そうです」

「じゃあ、未来さんには申し訳ないけど、最初に綾優さんにFXの基礎知識を説明するね」

「お願いします」と言う私。未来は無言で頷いた。

「今、デモ口座を作るからちょっと待ってて」

「デモ口座？」

ゲームのデモみたいに、勝手に動く口座のことかな？

九条が言った。

「取引の練習に使うヴァーチャルな口座のことだよ。FXの会社なら、大抵はどこでも無料で作らせてくれるんだ」

まずは練習なのね。だけど、ある程度お金を賭けないと熱くならないような気がする。架空の取引なら、損失が出てても気にならないし、利益が出てても嬉しくないし...

「あの、いきなり本物の取引じゃだめですか？　なんか、架空のお金だと真剣になれないような気がするのですが...」

言うなれば、子ども銀行発行の紙幣でお店屋さんごっこをするような感じだ。

その言葉を聞いた九条は少し笑って、

「君がその気なら構わないよ。だけど、FXの取引では一瞬のうちに計り知れない損失が生じることもある。この人間世界において、金は命と同じかそれ以上に重要なものだろう？　そんなに重要なものを練習

もなしに賭けてしまっていていいのかい？」

うう…。確かにそれは一理ある。困って未来の顔を見る私。

「練習しなさい」

と未来。

そうか。やっぱりそうだよ。というか、なぜ命令口調？ 私は姉だからね、一応。

私が言った。

「じゃあ、デモで練習します」

「わかった」

ディスプレイに向かい、マウスを動かす九条。二分ほどして、九条はディスプレイを私の側に向けた。

「できたよ。これが取引画面だ」

画面には、めくるめく変化する数値の並んだ表と、グラフのようなものが表示されていた。

「項目が多いから初めのうちは戸惑うかもしれないけれど、そのうち慣れてくるよ」

画面の複数のウィンドウに目がくらんでいる私。それでもわかりやすい方なのか？

九条は画面の端にある、目盛りのような部分を指さして言った。

「ここが証拠金の残額を示すメーターだ。今はまだ入金していないから、ゼロを指しているね。これから入金してみるよ」

九条はマウスを動かし、メニューのボタンをクリックした。すると、入金金額を指定する画面が出てきた。九条は百万 JPY と入力し、確定ボタンを押した。

「本来、入出金にはクレジットカードや銀行口座を使うんだけど、今回はデモ口座だからこれで完了だ」

メーターの指し示す金額が増加しており、その下には百万 JPY と表示されていた。

ところで、JPY って何だろう？

「あの、JPY って何ですか？」

「日本円のことだよ。通貨を示す略号は他にもあるから、この機会に覚えておくといい」

九条は表のアルファベットを順に指さして、

「USD はアメリカドル。EUR はユーロ。GBP はイギリスポンド。AUD はオーストラリアドル。他にも色々あるんだけど、今のところ覚えておいてほしいのはこれくらいかな」

むむっ。一度にこんなにたくさん覚えられないよ。険しい顔で画面を見つめる私に、九条が言った。

「じゃあ、とりあえず USD は覚えておいて。うちで FX をやる部員はみな自分が得意な通貨ペアを持っているんだけど、僕は USD / JPY なんだ。僕は基本、これしか取引しないんだ」

えっ、いくつも通貨ペアがあるのに一つしか扱わないの？ 不思議がる私に未来が言った。

「分散投資は必ずしもリスクの分散にならないから」

「そういうこと」

と九条。

どういうこと？ あくまで一般には、分散投資ってリスクを減らす手段とされているような気がするんだけど…？

九条が言った。

「リスクを下げるとは、すなわち期待利益を上げるということだ。なら計算上、複数の投資先に金をつぎ込むよりも、最も期待利益の高い特定の投資先に全額をつぎ込んだ方が、投資額全体に対する期待収益は上がるじゃないか。それに現実的にも、いたずらに複数の投資先に投資しようとする、その分手数料や調査の手間がかかったり、何かとコストがかかってしまうからね」

ふ～ん。そうなんだ。

未来が言った。

「だけどこの考えには、完全に合理的ではない人間がそこまで確実に期待利益を求められるかという反論が成り立ちうるわ」

「そうだね。だからこそ、この部活ではそれぞれの部員に担当の通貨が割り当てられ、基本的に各人はその通貨の取引に専念することになっているんだ。僕がUSD/JPY、篠崎が高金利通貨全般というようにね。まあ、君の担当通貨は今後決めるとして、とりあえずUSD/JPYを例に説明を続けるよ」

「はい」

「FXの取引は現実の物の売買と同じく、安く買って高く売ることと、高く売って安く買うことによって利益を上げる」

「えっ、どういうことですか？ 今持ってないものを売る...？ そんなことできるんですか？」

「もちろん。現実においても、後でその所有権を取得する予定で、他人の所有物を第三者に売却する契約をすることは可能だよな？ それと同じことさ。...とはいえ、売りには売りの代償がある。それがスワップポイントだ。スワップポイントは金利の高い通貨を買ったときにはもらえるけど、逆に売ったときには支払わなければならないんだ。USD/JPYの場合はこここのところ一万通貨につき数円程度だからあまり気を遣う必要はないけど、豪ドルや南アフリカランドの場合はもっと高いから、売る場合は気をつけないとね」

九条は私にマウスを渡した。

「じゃあ、実際に取引をしてみよう。注文するには、気配値ウィンドウで注文したい通貨の名前をクリックし、出てきたウィンドウで数量を入れ、買いか売りを押す。やってみて」

私は表のUSD/JPYと書かれたところをクリックした。すると、数量を入れる欄と「売り」と「買い」のボタンのあるポップアップウィンドウが出てきた。

「FXの取引は基本的に一万通貨単位で行うから、一万ドルを取引したいときは『1』と入力すればいいんだ」

私は数量に「100」と入力し、買いボタンを押した。どうせ架空の口座だし、思い切って多めに注文してみよう。

私が確定ボタンを押すと、苦笑いの九条が言った。

「思い切ったことをしたね」

「ええ、まあ...」

微笑み返す私。

「見てごらん。ポジションが取れたよ。FXでは保有する通貨のことをポジションと言うんだ」

九条は今取引を行った隣のディスプレイを指さした。「ポジション情報」と書かれたウィンドウには、今購入した通貨のものと思われる情報が表示されていた。項目は通貨名、数量、売りが買いか、約定価格、評価損益となっている。

よく見てみると、おかしなことに気がついた。買ったばかりなのに、評価損益の値が赤字でマイナス四千元となっていた。

「あれ？ これはもしかして、もう損失が出てるってことですか？」

一回目の取引から失敗か。幸先悪すぎるよ、私...

九条が言った。

「いや、これはスプレッドなんだ」

すぶれっど？ また訳のわからない言葉が...

「スプレッドとは、FXにおける手数料のこと。この業者の場合、USD/JPYだと、一万通貨あたり通常四十円かかるんだ。時間によっては高くなる場合があるから、注文の時は気配値ウィンドウのASKと

B I Dの値を確認しようね。この二つの差であるスプレッドに、取引数量を掛けた値が手数料なんだ」

A S KとB I Dの値を見る私。それぞれの値は数秒ごとに変化しており、差を確認するのは容易ではない。

「み、見にくい...」

強いてい言うならば、縦横無尽に動き回る無数の動物の数を数えようとする感じか。

「はは。はじめから差額を表示してくれればもっと便利なんだけど、あいにく今のところは目視で確認するほかないんだ。困ったものだよな」

私は未来に言った。

「あんたも取引の時はいつもこうやって差を見てるわけ？」

そうだとすれば大変だ。一日に何度も行う取引の度に、こうやって差額を確認し手数料を求めるなんて。

「まあこれは慣れだから。それに、実際にはスリッページとって、手数料が表示されている値とかけ離れることもあるから、確認しても当てにならない場合が少なくないわ」

紅茶に口をつける未来。

ふ～ん。そういうものか。

画面を眺めていると、評価損益の値がみるみる上昇してきた。最初はマイナス四千元だった値が、ゼロになり、やがてはプラス五千元になった。

おおっ、これはすごい。ものの数秒で五千元を稼いでしまうなんて、才能あるじゃないか、私。五千元といえば、学院の食堂で売られているケーキのすべてを食べられる額だ。

九条が言った。

「決済の時は、同じように発注したウィンドウで反対に売りのボタンを押せばいいんだ」

表示された評価損益の値は一万円に達しようとしていた。とりあえず、一万円になったところで決済しようと、マウスのポインタをウィンドウの売りボタンに持って行こうとした私。そのとき、突然評価損益が赤字に染まった。マイナス一千二百円。それが新たな値だった。

えっ？ 頭の中が真っ白になる。順調に上昇してきていたのに、いきなりこんな損失が出るとは、どうなっているんだろう？

九条が笑みを浮かべ、

「短期のトレードはある意味、反射神経が要求されるフットワークの勝負なんだ。ある程度利益が出たところですぐに反対売買をして決済しないと、いずれ損失に変わってしまう」

今や評価損益の値はマイナス二万円に達しようとしていた。ここで決済したらこの損失を認めることになる。いくらデモ口座とはいえ、そんなことはしたくない。ここはプラスに転じるのを待った方がいいのだろうか？

「ど、どうすればいいですか？ このままもう少し待てば、回復しますか？」

「さあどうかな。あいにく為替の世界に正解はなくてね。何が正解だったかは、終わってみないとわからないんだ」

むむっ。困った。

九条は未来を見て、

「君はどう思う？」

「あくまで経験論ですが、一度損失を出す方向に取ったポジションは、その後も損失を拡大させる傾向があると思います」

九条は笑って、

「はは。面白いことを言うね。確かに実際はそうなることが多いんだよね。皮肉なことに」

ということは、すぐに決済した方がいいのだろうか。ディスプレイの評価損益とにらめっこしながら、考える私。すると、評価損益はさらに下がっていき、やがてマイナス十万円を下回ってしまった。

やばい。と、ボタンをクリックして決済した私。利益はマイナス十萬三千円で確定していた。

うわっ。やってしまった。十万円なんて私の小遣いのほぼ二年分じゃない。やっぱり私って才能ないのかな。未来は最初からやめておけて言っていたし、どうしよう…。

すると、私の肩を九条がぼんと叩いた。

「まあ、最初はこんなものさ。気にすることはないよ。僕を始め、この部のトレーダーたちも最初はみんな失敗ばかりだったんだ」

なんだ、そうなのか。実際に十万円を超える損失が生じたわけじゃないし、まあいいか。

そう思ったものもつかの間、向かいの机でキーボードを叩いていた女子生徒が突如、声を上げた。

「ちょっとお。私と一緒にしないでくださいよう」

見ると、後から部室にやってきた高金利通貨の女王とかいう生徒が不満そうな顔でこちらを見ていた。

九条が言った。

「そうだったね。君はこの部活に来たときから利益を上げていた異色のトレーダーだった」

「そうですよお。私の開発したコスト平均法を使えば、理論上負けなしなんですから」

負けなしだって？ そのコスト平均法とかいうのを教えてほしいな。

私が訊こうとした瞬間、九条が言った。

「取引方法には他にも色々あるんだけど、今日はとりあえずここまでにしておこう。新入部員の歓迎をしなければならぬからね。君たちはこの後、時間があるかな？」

腕時計に目をやった私。時刻は五時ちょうどだった。

「ええ、十時くらいまでなら大丈夫ですけど…」

未来を見ると、未来は無言で頷いてくれた。

九条が篠崎に向かって、

「新入部員の歓迎会、十時までつきあえるか？」

「いいですよ。先輩のおごりなら」

と篠崎。

九条はため息をついて、

「あのな、篠崎。後輩のお前はむしろ新入部員におごる側じゃないのか？ 普通は」

「まあいいじゃないですか。この部活で一番の金持ちは九条先輩じゃないですか」ディスプレイから目を離さずに言う篠崎。「九条銀行頭取のご子息なんですから、たかだか数万円くらいいいじゃないですかあ」

その言葉に、私は思わず耳を疑った。九条銀行といえば、日本を代表するメガバンクのひとつで、傘下に複数の企業を抱える一大企業群だ。その頭取の息子が、今私の目の前にいる九条だということか？

まじまじと九条を見つめる私に、九条が言った。

「ん、どうしたの？」

「九条さんって、あの九条銀行の…？」

九条は少し照れくさそうな顔をして、

「はは。篠崎のおしゃべりには困るね。その通りさ」

へえ、これはすごい。上流階級のご子息とお近づきになれるとは、さすが未来の父の勧めで名門と言われる高校に入学した価値があったというものだ。

「羨富も行けるか？」

ディスプレイの向こう側に向かって九条が言った。

「ええ。九条さんのおごりなら」

と声。

「おいおい。よしてくれよ。君は十分に稼いでるだろう」

「冗談ですよ」

九条たちは部室のパソコンをすべてシャットダウンさせ、部屋の電気を消した。全員で部室を出ると、九条は部室の鍵を篠崎に差し出した。

「はい、これ」

部室の鍵を管理している警備室まで返却に行ってほしいという意味だろう。

篠崎は見るからに嫌そうな顔で、

「はっわ。私ですか」

「しょうがないだろ。僕は新入部員を案内しないと行けないから。駐車場で待ってるよ」

鍵を受け取った篠崎は肩を落として、廊下を歩いて行った。篠崎とは反対側の方向に歩き出す私たち。

「駐車場ってことは、車で行くんですか？」

てっきり学校の食堂に向かうのだと思っていた私。

九条は歩きながら、

「食堂は貧乏人のたまり場になっているからね。もう少し静かなところに案内するよ」

うわっ。私が高級だと思っていたうちの学食を貧乏人のたまり場と表現するとは、恐るべし九条銀頭取の息子。

廊下の窓からは、校庭を走る野球部員と思われる複数の人影が見えていた。校舎の端まで来た私たちは、駐車場に最も近い階段から地上に降りた。

メイドさんと一緒

駐車場の中を進んでいく私たち。電車通学の私が駐車場に足を踏み入れたのは初めてのことだった。この地域では最も学費が高く、名門の高校と言われるだけあってか、駐車場に並ぶ車はほとんどが高級車だった。何台もの車を通り抜けてたどり着いた先には、普通の車の三倍くらいの長さのある黒塗りの乗用車が止まっていた。

うわ。これがリムジンとかいうやつか。初めて見た。

九条が車に近づくと、後ろのドアが開き、メイド服に身を包んだ少女が降りてきた。整った目鼻立ちと、透き通るように白い肌。細身でありながら、長い手足のその少女は九条に一礼し、

「お疲れ様でした」

と言った。

その華麗なる容姿と、厳かな立ち居振る舞いに目を奪われていた私は、九条の言葉で我に返った。

「さあ、どうぞ」

開けられたドアを指さす九条。

そこは、車の中と言うよりも、むしろ高級ホテルの一室に近い雰囲気だった。床には赤絨毯が敷かれ、天井にはシャンデリアを模した照明がつり下げられていた。電車のように向かい合うように並べられた左右の座席は、ベッドのようにふかふかだった。

座席に座ったまま、豪華絢爛な内装に見とれていた私。私の隣に未来が座り、その隣に紬富が座った。

全員が乗り込むと、座席の端に座った九条がメイドらしき人に言った。

「いつものところに客人を連れて行く。もう一人来るから、それまで待つて」

「かしこまりました」

私はメイドに視線をやりながら、九条に耳打ちした。

「あの方は誰なんですか？」

「ああ、うちの女中だよ。もともとは屋敷の炊事洗濯係だったんだけど、僕が気に入ってしまってね。自分つきの女中にしたんだ。この車で移動するときにはいつも連れて行くよ。ああみえて空手の有段者だから、ボディガードにもなるだろうし」

女中とやらを見つめる私。車窓から差し入る夕日が、彼女の白い肌を赤く染めていた。その華奢な体つきからは、とても武芸に通じているとは思ってもよらなかった。

やがて車のドアがロックされ、篠崎が入ってきた。九条の横に座るなり、

「まったく。九条さんは人遣いが荒いですよ。駐車場と警備室ってキャンパスの端と端じゃないですか」

息を切らしながら言う篠崎。

どういうわけか、うちの高校はキャンパスがやたらと長い。この点については、敷地がもともとベルトコンベアーによる家電製品の組み立て工場だったという説や、創立者が土地の買収に失敗したという説が提起されているが、真相は定かでない。

「まあまあ。何か飲むか？」

と九条。

ん？ 何か飲むかと言うことは、飲み物があるのだろうか。

「じゃあ、ビールを」

と篠崎。

「おいおい。せめてオレンジジュースにしてくれ」

篠崎は頬を膨らませてから、

「じゃあそれで」

すると、女中が車内の端にあった箱を開けた。すると、それは冷蔵庫だったらしく、中には液体の入ったボトルがいくつか並んでいた。彼女はグラスにオレンジ色の液体を注ぐと、篠崎に渡した。そして、私は紅茶、未来と素富はコーヒーを受け取った。

九条が女中に言った。

「それでは発車してくれ」

「かしこまりました」

女中は壁に備え付けられていたマイクに何か言うと、しばらくしてゆっくりと外の景色が動き始めた。この部屋とは仕切られた前方の空間に、運転手がいるようだ。駐車場を出た車は、やがて大通りに出た。

私はさっき篠崎が言っていた、負けなしという「コスト平均法」とは何か、篠崎に訊いてみた。

「ああ。あれね」

オレンジジュースのグラスを傾けながら、篠崎が話し始めた。

「私のコスト平均法は、株におけるドルコスト平均法の応用よ。株のドルコスト平均法は、特定の会社の株式を毎月一定金額ずつ買い続ける方法のこと。一定数量ではなく、一定金額ずつ買うから、株価が高いときも安いときも金額的に同じ量を購入することになる。だから、長期的に見ると、株の取得に費やした費用が均(なら)され、インフレや経済成長の恩恵を受けることができるというわけ」

ふむ。何を言っているかさっぱりわからない。

未来の方を見ると、未来が私に言った。

「ドルコスト平均法は、株価の長期的な上昇を前提としているのよ。長期的に株価が上昇することがわかっていれば、ある時点で予算のすべてを費やしてその株を買っておけばいいと思うかもしれないけど、それでは短期的な高値を掴んでしまう可能性があるわ。だけど、一度にすべての株式を購入せず、毎月一定金額ずつ購入すれば、金融危機のような株価が安いときも、好景気の株価が高いときも株を買うことになるから、高値だけを掴んでしまう可能性が下がる。こうして長期的なコストを平均化しながら買っていけば、後はその企業の成長や貨幣のインフレによって、やがて取得した株が値上がりしてくるというわけ」

なるほど。じゃあその手法を使って株を買っていけば必ず儲かるのね。

未来が続けた。

「だけど、日本ではバブル崩壊以来デフレが続いている上、経済成長にも陰りが見えていることから、日本の株に対するドルコスト平均法の適用は意味をなさないと考えられるわ」

篠崎が言った。

「そういうこと。そこで私の考えたのが、高金利通貨でのコスト平均法。高金利通貨は長期的に下落することが知られているから、ドルコスト平均法と同じ要領で継続的に高金利通貨を売っていけば、利益が出るってわけ」

ほう。面白そうじゃないか。私もその方法を使ってみよう。

すると、黙って話を聞いていた素富がふと口を開いた。

「どうして高金利通貨が長期的に下落すると言えるのですか？ 株派の私にはには理解できません。株では通常、配当が高い方が株価が高くなる傾向があるように思いますが…」

篠崎は頭をかきながら、

「えーと、それは……ある経済学者の本に書いてあったのよね。結論を覚えているだけで、そうなる詳しい理由は知らないわ」

「そうですか」

と察富。

私は未来を見て言った。

「未来は分かる？」

未来は無言で頷いてから、

「貨幣の価値が減少することを『減価』と言うけれど、金利とは本来、運用益ではなく貨幣供給量の増加による貨幣の減価の補償として与えられるもの。つまり、インフレ補償よ。だから、スワップ金利が高いということは、貨幣の価値が時々刻々と失われているということになるけれど、貨幣の減価率よりも利率を低くするのが通常だから、スワップ金利を考慮しても高金利通貨は長期的に減価すると考えられるわ」

篠崎が言った。

「ああ～。確かにそんなこと書いてあったわね。あんたもユリア・ディズラエリ著の『貨幣論』を読んだの？」

その名前に聞き覚えのあった私。

未来は首を横に振った。

「読んだというか、私が書きました」

目を丸くする篠崎。そういえば、未来はアメリカ留学時代にいくつか論文を発表し、その一部は今でも世界中の研究機関で経済学の教科書として利用されているという話を聞いたことがある。

篠崎が言った。

「えっ、じゃああんた、あの経済学者のユリア・ディズラエリなわけ？」

無言でうなづく未来。

篠崎はまじまじと未来を見つめながら、

「へえ～、そうなんだ。お目にかかれて光荣ね。確かに先生は日本人とのハーフで、まだ若いって聞いてたけど、まさか同じ学校とは驚いたわ。でも、どうして未来って名前を名乗ってるの？ それに、先生は確かディズラエリ王国の貴族か何かじゃなかった？ どうして日本にいるの？」

立て続けに質問をする篠崎。あこがれのユリア先生に出会えて興奮しているようだ。

「未来は日本での名前。今は政変のせいで国に帰れないから、日本にいます」

「政変って、二年くらい前に起こったクーデターのこと？」

「そう」

「あれってどういう事件だったの？ ディズラエリと関わりの薄い日本じゃあまり報じられていないのよね」

「簡単に言えば、私の兄が私の母親と妹を殺し、政権を奪取した事件です」

「えっ!? どうしてそんなことを？」

「ディズラエリは日本と違い、今も昔も世襲制をとっています。ディズラエリ女王の子供であった私と兄は幼少のころは仲がよく、将来はともに国を治めようと誓い合うほどでした。もっとも、当時の私に権力に対する興味はなく、どちらかと言えば貴族として政治を行うよりも、花屋になりたいと思っていました。しかし、敬愛する兄が政治に対する情熱を燃やしていたので、将来国王となった兄を側近として支えたいと考えた私は、士官学校卒業後、各国の大学で勉強をしていました」

「兄貴思いのいい妹じゃない」

「しかし、私が帰国すると、母親は私を兄より優秀であるという理由で政府の要職に任命しました。その職は次期国王となる人物が就任するポストであり、私は実質的に次の国王に任命されたも同然でした。私と兄は反対し、代わりに兄を任命するよう進言しました。しかし、女王の命令には逆らえませんでした。そこで、私は次期女王に就任したら、すぐ王の位を譲ると秘密裏に兄と約束し、その地位に就きました。しか

し、それからすぐに悲劇は起こりました。兄は私が信用できなかったのでしょうか。当時女王が行っていた政策に反対していた貴族たちを煽動し、私が外遊している間にクーデターを起こしました。騒ぎを聞きつけて国に戻った私が見たのは、頭から血を流し倒れていた母親の姿でした」

「うわっ。ひどい...」

「私は兄のところに行き、問い詰めました。すると、怒り狂っていた兄は私に銃を向け、引き金を引こうとしました。しかし、そばにいた妹が私を突き飛ばし、身代わりになってくれました。今私がこうして生きているのは、愛する妹が身を挺して守ってくれたからなんです」

未来は涙があふれそうだった。

篠崎が言った。

「そ、そうなんだ。なんか悪いこと聞いちゃったかな。 と、ところで、私はあなたの『貨幣論』だけじゃなく、『福祉国家は税収が少ない』や『這い寄り！ 共産主義』とかも持ってるわ。中でも『マネーの憂鬱』は最高だったわね」

「感想を聞かせてほしいです」

未来の著書の話で盛り上がる二人。話しについて行けない私は車窓から風景を眺めていると、梶富が話しかけてきた。

「妹さん、有名なようですね」

見れば、梶富の肌は雪のように白く、目鼻立ちはきわめて端正だった。その優雅な容姿と立ち居振る舞いは、彼女が上流階級の出自であることを感じさせた。

「えへへ。まあ、私と血のつながりはないんですけどね...。梶富さんも知ってました？」

「はい。名前くらいは」

そこまで有名人だったとは。

「ところで、梶富さんは株専門って言ってましたけど、為替はしないんですか？」

「ええ、為替と株の難易度は全然違いますから。私には為替はとても難しく思えます」

「どうしてですか？」

どちらも安く買って高く売れば利益が出るという、同じルールのように思えるけど。

「綾優さんはゼロサムゲームという言葉を知っていますか？」

ゼロさむげーむ？ 何それ。

「ゼロサムゲームとは、市場参加者の利益と損失の合計がゼロになるゲームのことです。いわば、参加者同士での利益の奪い合い。全参加者の利益と損失の和が常にゼロになるため、競馬やパチンコのように何の生産性もありません」

なるほど。純粋な賭博ってことね。

梶富が続けた。

「ですが、株は違います。未来さんのおっしゃっていたように、長期的に貨幣供給量が増加したり、経済成長が生じると考えるなら、株はゼロサムゲームにはなりません。優良企業の株を買って放置しておけば、自然と利益が出る場合も少なくありません」

へえ。じゃあ株の方が楽じゃない。

「それなら、どうして為替をやっている人がいるんですか？ 株の方が簡単なら、株だけでいいと思います」

「私もそう思います。特に近年の為替相場の動きは奇妙ですし、何者かによって意図的に操作されているような印象さえ受けます。ですが、為替をする人たちの主張も色々あると思います。まず、日経平均や輸出企業の株価が円ドル相場に左右されがちなこと。それならば、最初から為替相場に賭けた方が早いと考え

る人がいても不思議ではないでしょう。また、株は為替と違って売りに制約があります。さらに、ストップ安・ストップ高があるなど為替よりも少しルールが複雑なところも、初心者の参入を阻む原因になっているのだと思います」

そういうことか。為替も面白そうだけど、株も悪くなさそうだな。

「株と為替、どっちがいいと思いますか？」

紊富は少し考えてから、

「そうですね。どちらがより良いということはないと思います。どちらにも勝っている人と負けている人がいますから。ただ、私に言わせれば株は初心者向きではないかもしれません。単元株といって、まとまった一定の数量でしか購入できないですから。その点、ルールが単純で、レバレッジにより少額で売買できる為替はとっつきやすいかもしれないですね」

なるほど。じゃあやっぱり為替の方がいいのか。

「ただ綾優さん、株や為替をやるにしても、インサイダー取引をしている人には気をつけてくださいね」

イン・サイダー？ 中にサイダーを入れるということ？

「インサイダー取引とは、未公開の内部情報を利用した不正な取引のことです。このような行為は市場の公平性をゆがめるため許されませんが、残念なことに今の市場にはこのような取引がはびこっています。しかも、株にはインサイダー取引を規制する法律がありますが、為替にはないのでインサイダー取引の温床になり得ます」

それは困る。

私と紊富がさらに話を続けていると、やがて車のエンジンが止まった。外を見てみると、どこかの地下駐車場に着いたようだった。

カジノでの夕食

「到着しました」

女中がドアを開け、外に降りた。

九条に続き、車から降りた私たち。目に入ってきたのは、駐車場に所狭しと並ぶ高級車の数々。そのほとんどが、九条の乗っている車に負けず劣らぬ車だった。よほどの金持ちが来るところに来てしまったのだなと思った私。

呆然としながら九条たちの後についていった私は、エレベーターに乗った。周囲はガラス張りになっており、見下ろしてみると、地上の人や車が見るみる小さくなっていった。上昇がなかなか止まらないので、私は鼓膜が痛くなった。

階の表示は百に達しようとしていた。エレベーターは途中で止まることなく、最終的に最上階と思われる百二十階でドアが開いた。だが、そのフロアは真っ暗だった。エレベーターから漏れる光が数メートル先を照らしているだけで、それより先は暗闇に包まれていた。

停電なのか。あるいは、今日のこのフロアの営業はすでに終了してしまったのか。戸惑う私をよそに、九条は暗闇へと足を踏み出した。何事もないような顔で、その後についていく女中、篠崎、素富の三人。私は未来とともにその後を追った。

暗闇の中を歩くこと数メートル。後ろのエレベーターの扉が閉まり、フロアが完全に真っ暗になった。だが、それもしばらく前進していると、突然、頭上から光が降り注いだ。見上げてみると、天井の小さなライトが点灯していた。どうやら私たちの人影に反応して作動したらしかった。そして、前方には厚い鉄のドアがあった。

九条はドアの横に備え付けられていた、指紋認証システムのような装置に手を重ねた。すると、数秒後、ピーという電子音がしたかと思うと、ドアが自動で開いた。

その先にあったのは、

「えっ、カジノ？」

思わず声を上げた私。

見渡す限り広がる空間。そこには、賭博に使われるようないくつもの台や、その周りを取り囲む無数の人々の姿があった。さらに、部屋の端にはテーブルが並べられ、食事をしている人の姿もあった。

「そう。ここはカジノとレストランが融合した富裕層向けの遊興施設。綾優さんと未来さんの料金は僕が負担するから、思う存分楽しんで行ってよ」

しかし、カジノってまずくないの？ 賭博って禁止されてない？ 心配する私の気持ちを汲んだのか、九条が言った。

「大丈夫。ここは会員とその招待客しか入れないところだから、情報が外部に漏洩する可能性はほとんどないよ。それに何より、ここは正解との強力なコネクションを有する我が九条銀行の関連会社が経営しているところだから、そう簡単にガサが入ることはないはずさ」

本当に大丈夫なのか？ だが、心配する私をよそに、篠崎は「わーい。今日も稼ぐぞー」などと叫びながら、人だかりへと走って行ってしまった。

「あの、篠崎さんは常連なのですか？」

「そうさ。素富は二回目だったかな」

無言でうなずく素富。未来はというと、無言で賭博に興じる人たちを眺めていた。

「腹が減っては戦はできぬと言うからね。とりあえずは食事にしよう」

九条とともに、部屋の端っこにある食事用のテーブルに移動した私たち。私と未来が並んで座り、向かいに九条と紮富が座った。置いてあったメニューを開いた私は、その料金の高さに驚愕した。

「...ちょっとこれ、間違っていない？」

ワインのボトルが一本十万円単位なのとはもかく、フルーツ盛り合わせ二万円とか、いちごパフェ三万円とか言うのはもはや理解不能だ。横からメニューをのぞき込んでいた未来が言った。

「まあ九条さんの関連のお店なら、払ったお金の一部が売上として戻ってくるのでしょうか？」

九条が言った。

「そういうこと。だから、遠慮しないで食べていいよ」

そ、そうですか。おそろおそろメニューをめくりながら、私はカルボナーラとフルーツ盛り合わせを選んだ。卓上のボタンを押し、やってきたボーイに全員が注文を伝え終わると、ちょうど次のようなアナウンスが流れた。

「六番テーブルではチェスの対局者を受け付けています」

ん？ 対戦者の募集？

九条が言った。

「たぶん篠崎だね。あいつはここじゃチェスが専門だからね。ここでは全六十七種類の賭博ができ、中にはチェスや将棋のように客同士が対戦で戦うものもある。そういうのはテーブルに行っても相手が見つからなかった場合、募集するアナウンスをしてくれることになっているんだ」

へ～、そうなんだ。

しばらくすると、チェスの対局の受付を締め切ったというアナウンスが流れた。

「篠崎さん強いんですか？」

「どうかな。この前なかなか対戦相手が見つからず、しかたなく紮富とやったときはボコボコにされていたけどね」

見ると、紮富が苦笑いしていた。

「一度にどれくらい賭けるんですか？」

「チェスのように客同士が対戦で争うのは、基本的に互いの交渉次第だよ。金を賭けるのが普通だけど、それ以外でもかまわない。バカラのように対戦相手が複数の場合や、ルーレットのように相手がカジノの場合は、掛け金があらかじめ設定されている場合もあるけどね」

なるほど。私もやってみたいけれど、あいにくお金がない。こんなところで数百円を賭けさせてほしいと言ったら怒られそうだ。

すると、九条が女中に言った。

「ちょっと百万円を下ろしてきてくれ」

女中は「かしこまりました」と言うと、どこかへ行ってしまった。

九条が言った。

「他人の賭博を指をくわえて見ていることほど、つまらないことはないからね。お近づきのしるしとして、君たち二人には僕から特別に百万円を貸してあげよう。今日、帰るときまでに返してくれればいい。利息は要らないし、失った分は返さなくていい。もちろん利益はそっくりそのまま君たちの取り分だ。金は二人で分けて使ってもいいし、どちらか一人だけが使ってもかまわないよ」

未来と顔を見合わせる私。未来は何も言わなかった。

思うに、人並み外れた頭脳の未来がいるかぎり、そう簡単に負けることはないはずだ。それに、もし損失を出してもこちらの負担分はゼロ。こんなおいしい提案は滅多にない。そうと来れば借りないわけにはいかないだろう。

「ではお言葉に甘えて」

やがてどこからか戻ってきた女中は、鞆から帯封に包まれた真新しい一万円札の束を取り出した。それを受け取った九条は、私に渡した。

「ありがとうございます」

一連のやりとりを見ていた素富がくすりと笑って、九条に言った。

「よろしいのですか？ ここを出るときには、すべて私のポケットに入っているかもしれませんよ」

「はは。冗談がきついな、素富は」

面白いことを言うじゃない。暗に私たちと勝負をしたいと誘っているのか。ここに来る途中で未来が著名な研究者であることは聞いているはずなのに、それでもなお戦いを挑んでくるとはいい度胸じゃないか。見たところお金持ちそうだし、未来の力で返り討ちにしてもらおう。

それからしばらくして、注文した料理が運ばれてきた。食べながら歓談していると、向かいの賭博ゾーンから篠崎が歩いてくるのが見えた。

「ふーっ、危なかった」

私の隣に座るなり、篠崎は向かいに置いてあった素富のフルーツジュースに口をつけた。

「なっ、何ををするのですか」

と素富。

だが、篠崎はコップを片手に、

「まあまあ堅いこと言わないの。激戦で疲れたんだから。ここ、注文しても来るの遅いのよ」

不満そうな顔の素富をよそに、ジュースを飲み続ける篠崎。

九条が言った。

「勝ったのか？」

篠崎は飲み干したコップをテーブルに置き、首を横に振った。

「ううん。ステイルメイト」

ステイルメイト？ スチール製の友達？

私が勝手な妄想をしていると、未来が耳打ちしてきた。

「いや、とどめは刺せないのに相手のキングの動きを封じた状態のこと。引き分け」

ふ～ん。そうだったのか。将棋にはない概念だから知らなかった。というか、私の心の声を勝手に聞かないでくれ、未来よ。

「あ～あ、賭場代損しちゃったよお～」

料理を注文することもなく、延々と不満を述べ続ける篠崎。

やがて注文した料理を食べ終えた私が他の人に目をやると、素富もすでに食べ終わっていたが、未来はゆっくりとデザートのアイスを口に運んでいた。早く遊びに行きたい私は未来の背中をなでながら、

「早く早く」

それを見ていた篠崎が言った。

「あはは。そんなに急(せ)かさなくても、案内なら私がしてあげようか？ 私はもう何回も来ているから」

「そ、そう？」

未来のアイスはまだ八割ほど残っているし、未来のあまりに遅い食べる速度からは、完食にはまだ時間がかかると考えられた。ならば、とりあえず未来にやってもらいたいゲームに目星をつけておいて、後で未来を連れてくるとしよう。

「じゃあ、ちょっと行ってきますね」

そう言い残して、私と篠崎はテーブルを後にした。

初めての戦い

篠崎の金色の髪を追いながら、賭博の行われているゾーンに入った私。そこには様々な種類のゲームが私の到着を待っていた。

まず私の目を引いたのは、いくつもの玉が機械の中を移動するゲーム。「これは何？」と訊く私に、篠崎が言った。

「これはパチンコよ。現金と交換可能な玉を機械に入れ、レバーをひねると、一定の確立で入れた玉より多くの玉が出てくるスロットマシンのようなゲーム。海外のカジノでお目にかかることは滅多になく、日本特有のものと言っても過言じゃないわ。もっとも私はこういう頭を使わない、確率本位のゲームは好きじゃないけど」

ふーん。そうなのか。純粋な頭脳戦でなければ未来の強みが生かせないから、これはやめておこう。

続いて目についたのは、街のゲームセンターに置いてあるようなアーケード型のゲーム機。近づいてみると、家の近所にあるゲームセンターにあるのとまったく同じものだった。専用の銃型コントローラーを使い、正体を隠して健康保険に加入しようとするゾンビを撃ち倒していく「モラル・ハザード」というゲームだ。他にも、公共交通機関をキセル利用し、徴税官の追跡から逃れる「フリー・ライダー」などもあった。「あっ、これ知ってる」

「これはゲームセンターにもあるわね。唯一違うのは、向かいの人とお金を掛けて対戦するところ。こういう普通のカジノに置いていないものがあるところが、このカジノの面白いところなのよね」

これなら私にもできるかも。近所のゲームセンターで、これらのゲームのオンラインの全国大会の上位に君臨したことのある私の血がたぎる。だが、じっとゲーム機を見つめていた私に、篠崎が言った。

「やめておいた方がいいんじゃない？ ここでこういうゲームをするようなのは、相当腕に覚えのあるやつよ。私も以前やったことがあるけど、一勝もできなかったし。こういうゲームにもプロっているものなのよね」

「そ、そうなの？」

しかたがない。掛け金は手持ちの百万円が上限だから、無駄遣いはできない。とりあえずやめておこう。

しばらく歩いて行くと、サイコロを振って盤上のコマを動かしていくゲームをやっている人たちを発見した。

「すごろく？」

指さす私に、篠崎が言った。

「うん。バックギャモンというすごろくの種類。別名『西洋すごろく』よ。通常のスゴろくと違い、相手のコマの進行を妨害しながら、自分のコマを敵陣へと進めていくゲーム。その射倅性の高さから、江戸時代には禁止令が出されたほどらしいわ」

「へえ、面白そう」

さらに歩みを進めると、今度は将棋、チェス、囲碁などのテーブルを発見した。さっきはここで篠崎さんが戦っていたのだろうか。よく見てみると、どの盤も駒もとても高級そうな材質だった。

続いて発見したのは、今までのゲームとはかなり趣の違う、何の変哲もないコンピューターだった。賭博ゾーンの片隅に位置するそこには、机の上に計六台のコンピューターが並べられ、それぞれが中央の機器から出るケーブルで束ねられていた。そして、画面には緑色の文字が上から下に流れていくスクリーンセイバーが表示されていた。

「ん、これは何？」

もしかしてネットカフェかな？ 勝負に負けたりして、急な出金が必要になったときに利用するのだろうか。

不思議がる私に、篠崎が言った。

「触ってごらん」

私がマウスに触れてみると、画面には未来がいつも見ているようなチャートが表示された。

これってまさか。

驚く私に、篠崎が言った。

「そう。これはFXなの。他のプレイヤーたちと、一定時間でどれだけ利益を上げられるか競い合うゲーム。こんなのがプレイできるカジノなんて、私が知る限りここだけよ。本来オンラインでやるべきFXをこういうカジノに持ってくるなんて面白いアイデアだと思わない？ 部長の直々の指示で設置したんだって」心底感心している様子の篠崎。

だが、そんな篠崎の言葉など耳に入らないほどに、私の心はすでに燃えていた。このゲームこそ、まさにFX好きな未来にぴったりのゲームではないだろうか。これならば勝てると、札束の入った鞆を持った手に汗を滲ませる私。

しかし、問題は対戦相手だ。いくら勝算があると言っても、対戦相手がいなければ話にならない。私が振り返ってみると、ちょうどこちらに近づいてくる九条、素富、未来の三人を発見した。

これは飛んで火に入る夏の虫と言うべきか。素富はFXより株の方が好きだと言っていたけれど、先ほどの挑発的な発言から察するに、私から挑まれた勝負を断ったりはしないだろう。私は三人のところに行くと、素富に言った。

「ねえ素富さん、あれでこの未来と対戦してもらえませんか？」

FX対戦用のコンピューターを指さす私。

素富はコンピューターを一瞥し、「そうですね」と言ってから目を閉じた。どうすべきか考えているようだ。

だが、素富が返事をするよりも早く、篠崎が口を挟んだ。

「ちょ、ちょっと綾優。こうみえて素富の能力は伊達じゃないのよ。見た目はちょっとかわいいし物静かだから騙されやすいけど、こう見えて入学以来、学内の統一試験じゃ学年一位の座を譲ったことがないし、株じゃほぼ負けなしなんだから、いくら妹さんがすごいって言っても危ないわ。こいつは猫の皮をかぶったハイエナよ。巻き上げたお金で男と遊んでるセレビッチなのよ」

びしっと素富を指さす篠崎。

素富は篠崎に目をやると、

「ふふ。負け犬ほどよく吠えるというのは本当ですね。前回チェスで負けた私がそんなに恐ろしいですか？」

にこやかに頬笑みかける素富。だが、その笑顔がかえって怖いと感じたのは、私だけではないだろう。

二人がにらみ合っているのすきに、私は未来に耳打ちした。

「ねえ、素富さんに勝てそう？」

私は今まで莫大な利益をたたき出してきた未来ならば、きっと自信に充ちた返事をくれるだろうと期待していた。なぜなら、いくら相手が優れているとはいえ、素富は所詮株が専門。FXが専門の未来に同じ土俵で戦って勝てるはずがないと考えられたからだ。

だが、未来の答えは、私を失望させるものだった。

「未来のことは誰にもわからない。すべてが不確実なこの世界で唯一『未来のことは誰にもわからない』ということだけが正しい」

がーん。だめじゃない。

改めて篠崎と素富に目をやると、二人の会話は次のようになっていた。

「あなたこそFXで私と戦うつもりはないのですか？ 仮にも高金利通貨の女王を自称するのなら、それなりの自信はおありでしょう？」

「う、うるさいわね！ 私は長期投資専門なのよ。あんたみたいに日々の価格変動に一喜一憂しないんだからっ！」

「しかし、そんなあなたの武器であるコスト平均法は、未来さんの理論を元にしたドルコスト平均法の猿まね。人の牛蒡で法事と言われてもしかたないですね」

次第に赤くなっていく篠崎の顔。その後もしばらく素富の台詞を聞いていたが、ついに、

「わ、わかったわよ。そこまで言うならやってやろうじゃないの。後で泣いたって遅いんだから！」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、大股でコンピューターに向かっていく篠崎。その後を追おうとする素富に、九条が言った。

「おいおい。同い年とはいえ、篠崎はまだ子供だ。少しは手加減してやれよ」

だが、素富はすれ違いざま、満面の笑みを浮かべ、

「あら？ 全力で挑まなければ相手に失礼でしょう。それに、私の辞書に『容赦』の二文字はありませんから」

その台詞に、背筋が凍りついた私。

九条は苦笑いしながら、

「はは。これは見ものだね」

すると突如、未来が言った。

「では、私も」

二人の後を追うようにコンピューターに向かっていこうとする未来。

ちょ、ちょっとこの白熱した状況で参加を表明するってどういうことよ。彼女たちの死闘に巻き込まれたら、いくら未来とはいえ勝ち目はないじゃない。

未来の腕を掴んで止めようとした私に、未来が耳打ちした。

「FXは、もがけばもがくほど沈んでいく底なし沼のような死のゲーム。二人まとめて倒すなら、二人とも頭に血が上って冷静な判断ができない今しかない」

なるほど。そういうことか。 っ、って、あんたも容赦ないのね。

先に席に着いた二人に「私も参加します」と告げ、席に着いた未来。素富と篠崎が向かい合い、素富の隣に未来が座るという構図になった。

「これは面白い試合になりそうだね。こうなったら僕も参戦しないわけにはいかないかな。美乃原さんはどうする？」

と九条。

「い、いえ。私は結構ですから」

手を振る私。

私は観戦のため、九条と一緒にコンピューターのところに向かった。篠崎の横に着席する九条。私は隣のテーブルから使われていない椅子を持ってきて、未来の横に座った。

篠崎が素富に言った。

「賭け金は百万でいいわね？」

だが、素富が答える前に、九条が言った。

「おいおい。せいぜい十万円くらいにしておいたほうがいいんじゃないのか？」

「うるさいわねっ。紊富に訊いてるのよ！」

「ええ、私は構いませんが、みなさんはいかがでしょう？ 多人数の対戦ですから、そろえなければなりませんね」

と紊富。

「篠崎がそう言うのなら、僕は百万で構わないよ」と九条。同じく「構いません」と未来。

「よし。決まりね」

と篠崎。

百万円で同意したということは、九条から借りたお金のすべてを賭けることになる。負けたら終わりの一発勝負だ。がんばれ、未来。

コンピューターの画面には、「対戦の準備ができたなら、このボタンを押してください。係員が参ります」と書かれたボタンが表示されていた。ボタンを押した未来。

ほどなくして黒のスーツに身を包んだ係員らしき男が現れ、私たちに言った。

「お待たせいたしました。参加者は五名様でよろしいですね？」

うなづく私たち。

「ではまず、利用料の一万円を徴収させていただきます」

えっ、利用料がかかるの？ そういえば、チェスで引き分けだった篠崎さんも言っていたっけ...

私の方を見る未来に、私が言った。

「悪いけど払ってくれる？ 今財布に七百円しかなくて...」

「いいけど、勝った場合、私が賞金の八割をもらうわ」

うっ。八割をとられるのは残念だけど、賞金三百万円のうち、六十万円もらえるなら悪くないか。どうせ私は見てるだけだし。

全員から利用料を徴収し終えた係員が言った。

「賭け金はいくらになさいますか？」

「百万円です」

と九条。

「了解しました。それではルールの説明をさせていただきます」

係員は一度腕時計に目をやってから、

「試合時間は九時から十時までの一時間。その間に最も多くの利益を上げた方が勝ちとなります。利用できる通貨ペアは全百二十六種類。スプレッドはありません。ポジションは最大五ロットまでとることができます。賭け金は百万円の勝者総取り方式。立会人は私がつとめさせていただきます」

係員がそう言い終わるか終わらぬうちに、突如、何者かの声が聞こえてきた。試合まであと数分というこの緊張の時間に投げかけられたその声が、私たちをいらだたせることがなかったのは、それがまるで鈴の音のような響きを持っていたからだった。

思わず振り返った私の目に入ったのは、腰まである白金の髪に、今にも折れそうなほど細長い肢体。可憐な目鼻立ちに、透き通るように白い肌を持つその少女は、天空から地上に降り立った天使のようにさえ思われた。あまりの美しさに目を奪われた私は、その少女の鈴の音のような声でふと我に返った。

「あの、私も参加させていただきませんか...」

おそるおそる言う少女。見れば、少女の見を包んでいる衣服は、私が着ているのと同じ紗倉学院高校の制服だった。

「え？ あ。どうぞ」

恍惚とした様子の九条が言った。

「突然すみません。失礼します」

彼女は一礼してから、九条の隣に座った。

紗倉学院高校の制服を着ていることからして、彼女も九条の知り合いなのだろうか？ だが、それにしても九条の対応がぎこちなさすぎる。篠崎も私と同じ疑問を抱いていたらしく、

「知り合い？」

と九条に訊いたが、九条は首を横に振った。

彼女から利用料を徴収した係員が言った。

「では、改めて確認させていただきます。賭け金は百万円で、勝者総取り方式。試合時間は九時から十時までの一時間。立会人は私がつとめさせていただきます。試合開始の合図はこちらからいたしますので、フォームにお名前を入力してお待ちください。お名前はニックネームでも構いません」

立会人が携帯端末のようなものを操作すると、準備ができたらボタンを押してくださいという画面が消え、部室で見たような取引画面が現れた。唯一違っていたのは、画面の端に他の参加者の獲得損益と順位、保有中の通貨ペアとロット数、そして評価損益が表示されるウィンドウがあったことだ。未来がそのウィンドウに「未来」と名前を入力し、エンターキーを押すと、順次他の参加者の名前も表示された。その一覧から察するに、乱入してきた少女の名前は「瀬名」のようだった。

腕時計を見ると、長針はまもなく十二の文字を指そうとしていた。試合まであと一分。発注ウィンドウは無効化されているものの、チャートウィンドウは動くらしく、この静寂なカジノの一角には、すでに誰かがチャートの確認をしていると思われるマウスのクリック音が響いていた。未来もチャートを確認し、試合開始に備えていた。やがて時刻は六時半を迎え、係員の「はじめ」の声と同時に発注ウィンドウが有効化された。

直後、カタカタというキーボードの音。そして、すぐに篠崎の保有ポジションが表示された。通貨ペアはAUD/USD。これは確か、豪ドルと米ドルだったっけ？ 売りが買いかはわからないけれど、一ロットの注文をしているようだった。試合開始からまだ一分もたっていないのに、もうポジションを取るとは。だが、驚く私をよそに、未来は特段焦った様子もなく、冷静に複数のチャートを切り替えていた。

それから数分後、次にポジションを取ったのは素富だった。通貨ペアは篠崎と同じくAUD/USD。ロット数は三と表示された。だが、その瞬間、

「こらっ。真似するな！」

と篠崎が叫んだ。

「うるさいわね。たまたまよ」

と素富。

そうか。売りが買いかはわからなくても、相手の取ったポジションの通貨ペアがわかるということは、そこから戦略を立てることも可能なわけか。

ディスプレイに目を戻すと、篠崎の評価損益は350円。素富は30円になっていた。いずれの値もプラスであることから察するに、両者がポジションを取った方向は同一だったみたいだ。

次に動いたのは、またしても素富だった。二ロット分を決済したのか、ロット数が一に減っていた。そして、獲得損益の欄には2576円と表示され、参加者一覧の一番上に名前が移動した。さらに、新たにCHF/JPYを三ロット売買したようだった。JPYは日本円って教えてもらったけど、CHFは何だろう？

「ねえ、CHFって何なの？」

未来は画面から目をそらすことなく、

「スイスフラン」

とだけ言った。

すると、さらに参加者の取引状況に変化があった。今度は篠崎がポジションを決済したらしく、獲得損益の欄に1491円と表示された。そして、参加者一覧の上から二番目に名前が移動した。

未来はというと、我関せずといった様子で、何食わぬ面持ちのままオンラインのニュース記事を眺めていた。もともと少しのことで動揺したり、感情を表に出したりする性格ではないが、素富と篠崎の二人はすでに利益を獲得しているというのに、未来だけこんなに落ち着いていて大丈夫なのかと不安になる。百万円が懸かっているんだぞ。

すると、ふと未来が口を開いた。

「このゲームは、実際に通貨をやりとりする通常のFXと異なり、スプレッドが存在しない。すなわち、どの通貨をいくら注文し、決済してもコストはかからず、純粹に限られた時間内でいかに適切な通貨に資金を振り替えていくかが、このゲームの本質となる」

そうかい。冷静に分析するのはいいけど、ちゃんと取引してよね。

そして、次に動いたのは九条だった。USD/JPYを二ロット売買。やはり得意の通貨ペアできたかと思っていると、知らぬ間に篠崎の評価損益がマイナス949円になっていることに気がついた。しかも、損失は徐々に拡大し、1500円になったところでポジションが消え、獲得損益がマイナス9にまで減少した。一気に最下位に転落する篠崎の名前。

あらら。かわいそうに。

ここからでもディスプレイの向こう側の篠崎の悲しみが伝わってくるようだ。

その直後、548円の利益で素富がCHF/JPYを決済。獲得利益が3124円に増加した。獲得利益がゼロやマイナスである他の参加者に比べ、圧倒的な利益だ。

未来が言った。

「おそらく素富さんは、これで勝ち逃げするつもり。少なくとも、篠崎さんに負ける可能性は低い」

未来の予想通り、それから二十分間、素富は一切の取引を行わなかった。そして、損失を取り戻そうとした篠崎は損失を2094円まで拡大させ、圧倒的最下位。九条は935円の確定利益を得ていたが、素富には遠く及ばず次点。肝心の未来はというと、獲得損益ゼロ、評価損益2359円で三位だった。なお、瀬名はいまだ取引を行っておらず、獲得損益、評価損益ともにゼロで未来と同じく三位だった。

あら？ 瀬名は突然乱入してきた割にはたいしたことないのね。正直もう少しやるのかと思っていただけに、ちょっと拍子抜けだな。まあ、勝者の取り分が百万円増えるから、ありがたいといえばありがたいんだけど...

それからさらに数分が経過したが、順位にあまり変化はなかった。素富は一向に取引を行わず一位をキープ。九条は利益を1025円まで伸ばしたが、二位のまま。未来は1538円の評価損益と、977円の確定利益で三位。相変わらずポジションを取っていない瀬名は未来に抜かされ、四位に転落。篠崎はというと、

「はうあ~~~~!!」

などと叫びながら取引を続けており、評価損益はすでにマイナス一万円を超えようとしていた。

現在、ポジションを持っているのは九条、未来、篠崎の三人。そして、時刻が九時半を回ろうとしたころ、三人はちょうど同じタイミングで、すべての保有ポジションを決済した。

あれ？ 参加者の保有ポジションがすべてゼロになったのは、ゲーム開始直後に篠崎が最初の取引をして以来、初めてのことだ。まるで申し合わせたかのように、参加者の保有ポジション欄はすべてゼロになっていた。

私之不審に思っていると、突如、篠崎と未来がそれぞれUSD/JPYとGBP/JPYを五ロットずつ発注した。これまで一度に最も多く発注されたのが三ロットであることを考えると、上限である五ロット

の発注は、明らかに今までとは趣を異にしている。私はここで二人が勝負に出たと感じた。

がんばれ！ 心の中で未来に声援を送る私。

次の瞬間、一瞬にしてレートが大きく動き、篠崎と未来の評価損益の値が一気に跳ね上がった。そして、未来はすかさず決済ボタンをクリックし、利益を確定させた。すると、未来の確定損益の欄には3823円と表示され、未来の名前が順位の一番上に躍り出た。だが、それに遅れること数秒、篠崎の名前がさらにその上に表示された。篠崎の確定損益は3871円。未来とはわずか48円差だった。

ものの数秒で三位に転落した素富が言った。

「ふふ。やるじゃないですか。これでは私も本気を出さねばなりませんね」

そして、素富の保有ロットの欄に一が表示された。勝ち逃げするつもりでいながらも、いざというときのためにポジションを取る準備はしていたらしい。

ところで、どうして急にレートが大幅に動いたのだろうか？ 不思議がる私に、勝ち誇った様子の篠崎の声が聞こえてきた。

「雇用統計よ」

「何それ？」

と私。

「金利や統計、要人の発言等の重要情報は為替相場に影響を与えるの。とりわけ現在、最も市場への影響が大きいと考えられているのが、アメリカ労働省発表の雇用統計。これは『失業率』や『非農業部門雇用者数変化』などの全十項目からなっていて、世界経済の先行きを占うものとして注目されているの。近年の雇用統計が相場に与える影響は良くも悪くも破壊的ね」

へ～。そうなんだ。未来がこれまであまりトレードをしていなかったのは、最初からこの瞬間に賭けていたからか。

ん？ 待てよ。でもどうして雇用統計の結果、一定の方向に相場が動くと予想できたのだろうか？ もし事前に情報が漏れているのなら、発表前にレートが動いてしまって、儲からなさそうだけど...

「ねえ、どうしてドルが下がるって予想できたの？」

と私。

篠崎が言った。

「予想なんて必要ないもん。雇用統計の発表時刻は日本時間の九時半ちょうどだけど、実際にはそれより少し早く情報を入手している人たちがいるから、発表の直前に、発表後に動く方向に少しレートが動くことがあるの。私はその方向についていっただけよ」

なるほど。これが素富が用心しろと言っていたインサイダーというもののか。ものは使い用だな。

「これだからインサイダーは嫌い」

素富が吐き捨てるように言った。

「未来も同じように考えたの？」

と私。

未来は首を横に振った。

「そもそも雇用統計の結果、ドルが上がるか下がるかは、市場の予想と実際の結果の乖離次第よ。今回、『非農業部門雇用者数変化』の市場予想は十五万人だったけれど、ここ一カ月間の経済ニュースでアメリカ経済の好調を示すものはなく、実際の雇用者数はむしろマイナスになると考えられたわ。したがって、市場の予想が現実よりも高すぎる可能性が高く、ドルが下落すると私は考えていたの。結果は一万三千人の増加だったけれど、実際が予想よりも低いことになりなく、やはりドルの下落という結果が生じたわ」

未来がニュースサイトばかり見ていたのは、アメリカ経済の動向を掴み、雇用統計の値を予想するため

だったのか。雇用統計一つにしても、いろいろな戦略があるんだな。

ところで、同じく雇用統計を利用した未来と篠崎の取引した通貨が違ったのはどうしてだろう？ 雇用統計がアメリカの統計なら、未来のように米ドルを含むUSD/JPYを取引するのは理解できるけど、篠崎のようにGBP/JPYを取引するのは理解に苦しむ。

「どうして篠崎さんはGBP/JPYを取引したんですか？」

「ああ、それは逆転のためにやむを得なかったからよ。アメリカのGDPは世界全体の約三割を占めているせいもあってか、雇用統計の影響は対米ドル以外の通貨にも及ぶの。ドルは今72円だから、一パーセントの変化しても0.72円しか動かないけど、131円のポンドなら同じ一パーセントの変化でも1.31円も動く。一度に売買できるのが五ロットまでなら、より変動の大きい通貨ペアで取引した方が利益が大きくなるでしょ」

一度に保有できるロット数に制限があるというこのゲームのルールをうまく利用し、窮地からの逆転を成し遂げるだけでなく、さらには同じく雇用統計に注目していた未来にまで差をつけるとは、恐るべし篠崎。やはり高金利通貨の女王の異名は伊達ではなかったようだ。

二位の未来は、急落後に方向感を失ったチャートを前にいまだポジションを取れず、三位の素直は取得したポジションの評価損益がマイナスになっていた。

残り時間は約二十分。このまま篠崎が逃げ切って勝ちだと、参加者の誰もが思ったことだろう。だが、私が思わず目を見張ったのは、次の瞬間だった。

今まで取引を行っていなかった瀬名の保有ポジションの欄に、次々と計五つの通貨ペアが表示された。それぞれのロット数は一。試合終了までの残り二十分に、取り得る最大のロットを五つのペアに分散させたようだ。通貨ペアはUSD/RUB、USD/ILS、USD/CZK、USD/JOD、USD/AED。そのどれもが、私の知らない通貨ペアだった。

「これ、何なの？」

「上から順に、米ドル対ロシアルーブル、イスラエルシェケル、チェココルナ、ヨルダンディナール、アラブ首長国連邦ディルハム」

ふ～ん。ずいぶんと馴染みのない通貨を使うのね。

未来が言った。

「不思議ね。マイナー通貨は取引量が少ないため、動きを読むのが困難なのよ。要人発言等があったならまだしも、どうしてこのタイミングでこの通貨なのかしら」

「マイナー通貨のメリットって何かないの？」

「一般にマイナー通貨は国の政情や財政が不安定なことが多く、高金利であることが多いわ。ただ、金利分であるスワップポイントが付与されるのは、ニューヨーク市場が閉まる日本時間の午前六時。だから、彼女がスワップ目的でないのは確か」

未来の話聞きながら取引状況を眺めていると、瀬名のとったすべてのポジションの評価損益がプラスになっていた。瀬名はそのうち486円の利益でUSD/ILSを決済。続けて別の通貨を売買した。

「これは何？」

新たに画面に表示されたUSD/LTLを指さす私。

「リトニアリタス」

未来の表情には少し焦りが感じられた。なぜなら、瀬名の保有しているポジションの評価損益はすべてプラスになっており、その合計は三千円に達していたからだ。さらに驚くことに、いずれの通貨ペアも評価損を出していなかった。

続いて、瀬名はさらにUSD/AEDを577円で決済し、もう一度同じ通貨ペアを取引した。あれ、ま

た同じの？

未来がつぶやく。

「ドテンか」

「どてん？」

「決済と同時に、反対方向にポジションを取ること」

そして、USD/AEDは評価損益の欄にプラス139円と表示されたかと思うと、すぐに決済された。瀬奈の確定損益はすでに1202円。千円付近でうろうろしていた九条を抜き、颯爽と四位に躍り出た。

「おかしい……」

取引状況を示すウィンドウを見つめながら、未来が言った。

「どうして？」

「瀬名は一度も損失を出していない」

そういえば、彼女は取引を始めて以来、一度も評価損益の値をマイナスにしたことがなかった。指標の時しか取引しなかった未来を除き、その他の参加者はすべて何度か損失を確定させているというのに。上がるも下がるも二分の一の確率と考えるなら、瀬名の今の状況は驚異的な確率ではないだろうか。それほどまでの能力が、あの少女に備わっているというのか。

瀬名はいくつかのポジションを決済し、また同じ数のポジションを取得した。ポジションの決済から新たなポジションを取得するまで、実に三十秒とかかかっていない。まるで機械のように正確に、彼女は利益だけを的確に積み上げていった。そして、試合終了五分前を切ったところで、彼女は素富を抜き、三位に到達。この次点で、首位の篠崎との差は約350円にまで縮まっていた。

それから試合終了の数秒前、瀬名は保有するすべてのポジションを決済し、評価利益を確定させた。

「はい。終了です」

係員の声とともに、発注ウィンドウがロックされ、取引が不能になる。順位の最上位には「瀬名」の二文字が表示されていた。二位の篠崎とは21円の差だった。

啞然とした顔で画面を見つめている未来。隣を見ると、同じ表情の素富がいた。

係員が言う。

「勝者は瀬名様です。その他の皆様は賭け金のお支払いをお願いします」

素富が立ち上がり、向かいの瀬名のところに向かった。私と未来もその後について、瀬名のところに行った。

九条はすでに瀬名に話しかけており、

「悪いけど、銀行振り込みでいいかな？ 今日はずでに預金の引き出し上限に達してしまっていてね」

「ええ、構いませんよ」

瀬名は鞆から取り出したメモ帳に走り書きをすると、ページを破って九条に手渡した。メモを受け取った九条は女中からノートパソコンを受け取ると、キーボードを叩き始めた。

「……ええと、九条銀行新宿支店、普通口座アカサカセナ」

振込先を入力しているらしい。

「はい。送金したよ。確認してくれる？」

スマートフォンを操作する瀬名。しばらくして、

「はい。結構です」

素富が言った。

「私も銀行振り込みでよろしいですか？」

「いいですよ」

九条からメモを受け取った素富は、携帯電話のキーを叩き始めた。その間に、篠崎が九条に耳打ちしていた内容が聞こえてしまった。

「ねえ、今普通口座に三十万円ちょっとしかないんだけど、ちょっと貸してくれないかな？ 早めに返すから」

「はあ？ お前、持ってない金を賭けてたのか？」

九条が言った。

「だって素富相手なら負けると思ってなかったんだもん。あんな伏兵が飛び込んでくるなんて完全に想定外よ」

頬を膨らませる篠崎。

「しょうがないやつだな。あまりそういうことをすると出入り禁止になるから気をつけるよな」

「はいはい。わかってますう」

素富が支払いを終えたらしく、続いて私は鞆から取り出した現金百万円を瀬名に差し出した。

「あら、今時珍しいニコニコ現金払いですか。税金の関係で助かります。ありがとうございます」

うれしそうに受け取る瀬名。いや、私に礼を言われても、もともとは九条から借りてた金だし。

最後に篠崎が銀行振り込みで支払いを終えると、瀬名は私たちに一礼してそそくさと人混みに消えてしまった。まるで台風が通り過ぎていったかのような静けさだけが、私たちにのいる場所には残されていた。

反省会？

帰りのリムジンの中、篠崎は大荒れだった。

「あーっ、もう。紊富には勝ったのに、あんな小娘にやられるなんて！ 高金利通貨の女王の名が泣くわ。うちの学校の制服を着ていたことからしてうちの生徒なんだから、赤坂瀬名の名前で調べれば所在がつかめるはずよ。絶対に再戦を申し込んで復讐しないと」

足をじたばたさせる篠崎。

九条は篠崎の頭をなでながら、

「よしよし。落ち着けて。それはそうと、USD/AEDのAEDって何なんだ？ そんな通貨本当にあるのか？ 救命装置じゃないのか？」

「そうよ。どう見てもチートなんだからっ。絶対何かカラクリがあるに決まってるわ！」

未来が言った。

「AEDはアラブ首長国連邦のディルハム。現実に存在していることは確かです。奇しくも医療機器のAutomated External Defibrillator(自動体外式除細動器)と同じ略号ですが」

「何なのよ。アラブ首長国連邦って？」

「アラビア半島の七つの国からなる連邦国家。構成国のドバイが近年めざましい経済成長を遂げていることで有名です」

「EUみたいなもの？」

「似てはいますが、国教がイスラム教なのと構成国のすべてが統一の通貨を利用してる点は異なります」

紊富が言った。

「でも、どうして瀬名さんはマイナー通貨を好んで取引したのでしょうか？ 為替に疎い私にはよく分かりませんが、一般に株では時価総額が低い会社の株ほど仕手の対象になりやすいと言われていています。今回もそのようなものだったのでしょうか？」

「そうよ。きっと仕手よ。あいつが買ったあとに、仲間が大量に買い占めて価格をつり上げていたんだわ」と篠崎。

九条が言った。

「おいおい。株じゃあるまいし、FXでそんなことはできないだろ。ブルジュ・ドバイまで買い占めるつもりでやるならともかく、あそこで僕たちからたったの四百万を奪うためだけにそこまでやったら狂気の沙汰だ」

「何か突発的な事件でもあったのでしょうか？」

と紊富。

未来が首を振った。

「いいえ、私もあの時間のニュースは仔細に確認しましたが、特に瀬名さんが取引していた通貨に影響を及ぼすと考えられるものはありませんでした」

「では、出来高はどうでしたか？」

「過去の同じ時間帯のものと比較しても、特に異常はありませんでした」

「出来高って何？」

と私。

「一定時間に成立した売買の数量よ。高ければ高いほど、売買が活発に行われていると考えられるわ。もっとも、為替には株と違い統一の市場がないため、出来高は取引業者ごとにしか示されないけど」

素富は少し考えてから、

「ふ～ん。さしずめマイナー通貨の魔法使いといたところでしょうか。悔しいですが、実力の差を認めるほかないでしょうか」

魔法使いと言うよりも、彼女の端麗な容姿からはむしろ天使の名がふさわしい気がするけれど…。いや、もしかして本当に為替の天使だったりして。

しばらくの間、沈黙が続いた。車内には、道行く車のクラクションやエンジンの音だけが聞こえていた。私は窓の外を流れていく風景を見つめていた。

不意に篠崎が口を開いた。

「そうだ。もしかしてフラッシュオーダーじゃない？」

フラッシュオーダー？

助けを求めて未来の方を見た私に、未来が言った。

「フラッシュオーダーとは、取引所から他の顧客の注文情報を横流ししてもらい、その注文が約定するよりも早く自らの注文を割り込ませ、利ざやを獲得する手法のことよ。得られた利益の分だけ、本来の顧客が損失を被るわ」

「えっ、何それ!? 不正行為じゃないの？」

「そうね。トランプで言ったら常に相手の手札を盗み見ながら、自分が出す札を選ぶようなものよ。だけど、賭博にイカサマはつきものだから。現在では為替市場の取引のおよそ二～三割がフラッシュオーダーによるものとする説もあるわ」

と未来。

篠崎が言った。

「あいつはきっとそれを使ったのよ。フラッシュオーダーなら絶対に負けることがないから、あんなに自信满满だったのよ」

「それはないだろう。フラッシュオーダーは別名『高頻度取引』だ。本来は高速なコンピューターと光回線を使って行うものだ。仮にあいつが漏洩した顧客の注文情報を受け取っていたとしても、逐一マウスを操作して発注していたんじゃないよ」

と九条。

「え～？ じゃあ何だって言うのよ？」

「未来さん、マイナー通貨を取引するメリットは何かないのですか？」

と素富。

「一般に、インフレ率の高さが驚異的であるという点を除けば、特にないと思います。他に思いつく特徴と例えば、取引時間が限られていること、周辺の経済大国の通貨と連動して動きやすいこと、流通量が少ないために値動きが読みづらいことくらいでしょうか」

「それはかなりひどい通貨のように思えますね。普通なら手を出そうとは思わないはずですが…」

篠崎が言った。

「あいつは雇用統計さえ完全に無視して、あの通貨の取引に専念したのよ。絶対何かカラクリがあるはずよ。そうでなければあまりに奇妙なんだから」

その後も瀬名についての議論が続いたが、結論が出ることはなく、休み明けの部活であらためて話し合うことになった。

週明けの放課後、私と未来が部室に行くと、パソコンの前に九条と素富の姿があった。

「こんにちは」

私は隅の机に鞆を置いてから、二人の後ろから画面をのぞき込んだ。そこにはUSD/AEDと表示されたチャートがあり、その上にいくつかの矢印が表示されていた。

九条が言った。

「これは先週、瀬名が取引をした通貨のチャートに、瀬名が売買を行ったポイントを表示させたものだ。カジノからコンピューターに残っていたデータを取り寄せたんだ」

同じくディスプレイをのぞき込んでいる未来に、九条が言った。

「君はこの取引をどう見るかな？」

「できすぎていると思います。このような取引が可能なのは、完全な合理性を有する全知全能な人間か、未来予知の能力のある人間に限られるはずですよ。彼女には不確実性という概念がないのでしょうか」

そ、そこまですごいのか？ やはり彼女は為替の天使だったのだろうか。

九条が言った。

「瀬名が取引を始めたのは九時四十分。それから二十分間、瀬名は損失を一切出すことなく、USD/AEDの動きを的確に捉えている。つまり、常に底で買い天井で売っているんだ。最も取引回数が多かったのはUSD/AEDだが、それ以外の通貨でも基本的に同じように売買している」

さらに、素富が続けた。

「不思議なのは、何の売買サインも出ていないと思われるところでいきなり買って、上昇後に同じく何のサインもないところで売り抜けているところです。チャートから私たちには見えない何かを読み取っているのか、あるいはまったく別の情報を参照していたのか……」

「いずれにせよ、ここまで正確に値動きを予測するとはもはや神業としか言いようがないね。残念ではあるけれど、これじゃありベンジは諦めるしかないだろうね。振り返りに遭ってしまうよ」

と九条。

素富がくすりと笑い、

「ふふ。篠崎さんが怒りそうですね」

「そういえば、あいつはどうしたんだ？ いつもなら保有ポジションの含み益を確認してにんまりするのみに来ているはずなんだけど…」

向かいのデスクに目をやる九条。ちょうどそのとき、勢いよくドアが開いた。廊下にいたのは、額に汗を流し息を切らした篠崎だった。

「瀬名が勝負してるっ。コンピューター室まで来て！」

篠崎はそう言い終えるなり、九条の手を引いて部室を飛び出して行ってしまった。後に残された素富は、きょとんとして私たちの方を見た。

「えーと、私たちも行こうか？」

と私。

「そうですね」

と素富。

部室を出た私たちは、はるか前方の廊下を走る篠崎と九条の後ろ姿を追った。部室棟を出て中庭を走り、コンピューター室のある校舎にやってきた。階段を駆け上がり、コンピューター室に入ると、そこは異様

な熱気に充ち満ちていた。

普段はネットで動画を視聴したり、レポートを書いたりしている生徒がちらほら見られるだけのこの教室に、あろうことか二十人以上と思われる人影があった。その人混みの前には、コンピューターに向かっている二人の人物がいた。そして、そのうちの一人は、見まがうこともない、白金の長い髪に雪のような肌をした瀬名だった。

私たちは人混みをかき分け、一番前に移動した。瀬名の隣でマウスを握っていたもう一人は、私の知らない艶やかな緋色の髪の子供生徒だった。

すでに到着していた九条がゼイゼイ言いながら、篠崎に訊いていた。

「……ど、どういう状況なんだ？」

「瀬名があの子供に勝負を挑んだらしいの。瀬名は金地金を、相手は百万円を掛けてるんだって」

「金地金？ 何でまたそんなのを」

「知らないよ。さっきちょっと見えたけど、たぶん五百グラムのやつだった」

「五百グラム？ ここ最近の買い取り価格じゃ二百万円は下らないな」

「そうなのよ。変でしょ？」

「明らかにリスクとリワードが釣りあっていない。それほどまでに自信があるということかな」

「不正があるに決まってるわ。暴いてやろうじゃないの」

瀬名の後ろ姿を鋭い視線で見つめる篠崎。瀬名は後ろのギャラリーを気にとめる様子もなく、淡々とマウスをクリックしていた。

九条が言った。

「ところで、お相手は生徒会長のようなだね」

「へ？ そうなの」

と篠崎。

「花京院 (かきよういん) 玲子 (れいこ)。日本の政財界に絶大な影響力を持つという花京院グループ総裁と特捜エリート検事の娘。オーケストラの楽器で弾けないものはなく、海外留学経験が豊富で話せる言葉は実に四十カ国語以上。旧司法試験の最年少合格者でもある彼女は、われわれ一般人など足下にも及ばない、超上流階級の令嬢様だ」

「よく知ってるね。あっ、もしかして狙ってるの？ いや～、九条ったら抜け目ないんだから」

「いや、単に中学校が一緒だったただだよ。この学校にいるのは知っていたけど、生徒会選挙の候補者演説以外で目にしたのは初めてだね」

会長は名誉ある家柄の出身らしいけれど、勝負では今のところ劣勢に立たされていた。二人の画面を見比べてみると、瀬名の獲得損益が四千円を超えているのに対し、会長はまだ二千円。その上、絶大な力を見せつける瀬名に動揺したのか、会長の評価損益はどの通貨もマイナスになっていた。

「相変わらずやりますね。瀬名さんは」

素富が言った。

「まったく損失を出さないのが不思議でなりません」

と未来。

瀬名はコツコツと評価利益を確定させ、獲得利益を着実に積み上げていった。そして、今や利益が五千元に達しようとしたとき、瀬名の取引を眺めていた未来と素富が同時に驚きの声を漏らした。

「どうしたの？」

尋ねる私に、未来が言った。

「チャートを見ずに発注した」

「えっ？」

画面を見てみたが、確かにチャートは表示されていた。

「どうして？」

中央に大きく表示されているチャートが未来たちの目に入らないはずがない。不思議がる私に、梶富が言った。

「いま瀬名さんが発注したのはUSD/PLNですが、表示されているのはUSD/SEKのチャートです」

取得したUSD/PLNの評価損益がプラスになっていることからして、発注を誤ったわけではなさそうだ。だが、その通貨のチャートを見ずに値動きを予想するなんて可能なのだろうか。

「チャートを見ないで取引するなんて、できるの？」

「経済の基礎的データを頼りに長期的な値動きを予想するのならともかく、このようなごく短時間の取引でチャートを見ないことはあり得ないと思いますが…」

と梶富。

未来は口元に手を当て、少し考えてから、

「スイスフランとユーロのように交換レートが常に一定の値に固定されているもの同士なら、EUR/USDを見ながらUSD/CHFを取引してもチャートが上下反転していること以外に実質的な変わりはないから、一方のチャートを見ながらもう一方を取引することができるかもしれないわ。だけど、スウェーデンクローナとポーランドズロチはそのような場合に該当しないと思うんだけど…」

試合が終わったのは、それから十分後のことだった。獲得損益で会長を二千元以上も上回った瀬名の圧勝だった。

会長は立ち上がると、鞆から取り出したお札の束を瀬名に差し出した。瀬名はそれを受け取ると、一礼してすぐにいなくなってしまった。

振り返った会長は後ろにいた九条を発見すると、

「あら。九条君かしら？」

「お久しぶりです。またお目にかかれて光栄ですよ」

「その制服でこの場所にいるってことは、あなたもこの学校の生徒だったの？」

「ええ。そうですよ」

「そうだったの。度々留学してたから、全然知らなかったわ」

「どちらに行かれていたのですか？」

「一昨年はスイス。去年はオーストラリア。今年は中国よ」

「相変わらず留学がお好きですね」

「それもそうね。だけど、せっかく海外の提携校が多い高校に入ったんだから行かないと損でしょう？ それに私、創立者記念特待生だから、留学費用は全額学校負担なのよね」

創立者記念特待生とは、年二回行われる学年統一の試験の結果が上位三名の者に与えられる資格であり、資格者は授業料の他、留学費や食堂の利用料までもが免除されるらしい。そのため、成績上位者間では統一試験のたびに壮絶な争いが繰り広げられるという。もっとも、あまり成績の良くない私には関係のない話だけど。

「ところで、どうして瀬名さんと戦うことになったのですか？」

「ああ。教室で友達とFXの話をしていたら、よかったら今度勝負しませんかって誘われたの。負けたらこれを差し上げますって金塊を見せられたから、断れなくて」

「ということは、赤坂さんと同じクラスなんですか？」

「そうよ。一年の時からずっと。よく考えれば赤坂さんも私と同じ創立者記念特待生だから、それなりに頭

はいはいずなのよね。百万円以上する金塊を持ち出された時点で絶対に勝つ策があるって気づけばよかったわ。つくづく金の魅力には抗いがたいものよね」

「試合を決めたのは今日だったんですか？」

「ううん。先週よ。私はその日の昼休みにでもやろうと言ったんだけど、瀬名さんから練習してくるから少し待ってと言われて、今日にしたの」

「自分から誘っておいて練習したいって、おかしくないですか？ 最初からそのつもりなら、準備してから誘えばいいと思いますが」

「それもそうね。どうしてかしら。 あ。私、そろそろ生徒会の用事があるから行かないといけないわ」

会長は手帳のメモ欄に自分のメールアドレスを書くと、破って九条に手渡した。

「今度お茶でもしましょう」

「ええ。よろこんで」

会長は鞆を持って、いそいそとコンピューター室を出て行った。

一方、投資部の私たちは部室に引き返した。

「相変わらず、すごかったですね。瀬名さんの取引」

と素富。

九条が言った。

「さっぱり仕組みが分からないよ。やはりあれが彼女の真の実力なのか？ そもそもFXで不正を働くなんて、フラッシュオーダーとインサイダーを除けばできない気がするし」

「ですが、USD/SEKのチャートを見ながら、USD/PLNを発注したのは奇妙でした」

「何の相関性もない通貨同士だね。ただの偶然じゃないかな」

篠崎はスマートフォンのワイフォン (yPhone) を取り出すと、

「とりあえず、録画ならあるけど」

「おいおい。隠し撮りしてたのか？ まあ生で見て何のトリックも確認できなかったんだから、何度見ても同じだと思うけど」

とは言いながら、篠崎のワイフォンをのぞき込む九条。そこにはパソコンに向かって取引をする瀬名の横顔が映し出されていた。

「ほう。綺麗に映ってるじゃないか」篠崎の手からワイフォンを取り上げる素富。「信じられるか？ ほんの数年前まで、ビデオと言えば画質の悪いアナログのテープだった。それが今や、こんな小さな装置で精細な映像を記録できる。それも、劣化なく無限の複製が可能なものをだ。技術革新って恐ろしいよね」

画面を指でなぞり、瀬名の顔を拡大する九条。

「HD画質か。髪の毛の一本一本まで見えるじゃないか。なんて美しいんだろう。ひょっとすると、彼女は為替の女神だったりして」

「どこ見てるのよ。取引画面を見なさいって」

ワイフォンを奪い返す篠崎。拡大を元に戻そうとして画面に触れた篠崎は、ふと指を止め、目をこらした。

「どうしたの？」

と私。

「ここ」瀬名の耳のあたりを指さす篠崎。「これ、補聴器かな？」

目をこらしてみると、彼女の耳のあたりの髪から何らかの機器のようなものがわずかに飛び出しているのが見えた。白金の髪と色が似ているので、よく見ないと分からない。

私はワイフォンを未来に見せた。

「何だと思う？」

未来は画面を見つめると、

「ブルーティースのイヤホン」

と言った。

確か、ブルーティースは無線通信の規格だ。

続いて画面を見た素富も、

「そのようですね。これは携帯電話などにつないで、無線で音声を受信するためのもの。瀬名さんは何らかの情報を受信しながら取引していたのでしょうか？」

「きっと誰かから売買のポイントを教えてもらっていたのよ。なんてずるい女なの！」

と篠崎。

九条が言った。

「それはどうかな。もしそうなら、その誰かは通貨の値動きを完全に予想できるだけの能力を備えていたことになる。そんなことがあるとは思にくいし、もし仮にそうなら、瀬名ではなくそいつが自分で勝負をした方が早いじゃないか。瀬名は単に経済ニュースを聞いていただけという可能性も否定できないよ」

篠崎は首を横に振った。

「いや。きっと売買ポイントを教えている第三者は見るからに頭が良さそうで、自分で勝負を挑むと警戒されてしまうのよ。そこで、あまり頭がよくなさそうな瀬名に代わりに勝負をさせているんだって」

それはさすがに考えすぎじゃないだろうか。

「いやいや。むしろ創立者記念特待生の瀬名の方が警戒されるだろ」

と九条。

素富が言った。

「ですが、調べてみる価値はあるかもしれませんね。瀬名さんの取引は明らかに常軌を逸しています。結論を出すのは、瀬名さんが何を聞いているのか突き止めてからでも遅くはないでしょう」

おっ。珍しく篠崎と話が合っている。

「そうよね。でも、どうしたらいいのかな？」

「ブルーティースの通信が傍受できればいいのですが…。そうすれば、瀬名さんが誰かと勝負しているところに行って内容を聴くことができます」

「誰かブルーティースの暗号解ける人いない？」

部室を見回す篠崎。だが、名乗り出る者はいなかった。静まりかえった室内に、むなしく篠崎の言葉が響いた。

「この部活、コンピューター研究部といいながら、ITに強い人がいないのよね…」

九条が言った。

「生徒会長に頼めば何とかなるかもしれない。MIT留学時代には情報工学を学んでいたらしいし、そもそも彼女にはできないことがないからな。今度頼んでみるよ」

作戦

昼休みに投資部の部室に集まるよう九条から連絡があったのは、それから二日後のことだった。会長がブルーティースの通信傍受に関する技術的な問題の解決に成功したらしく、今後の対応についてみなで話し合うためだそうだ。

私と未来が部室に行くと、九条と会長の二人がいた。会長は普段九条が座っている席に座っており、デスクの上には会長の私物らしいピンク色のノートパソコンと複数のワイヤレスイヤホンが置かれていた。会長は九条が出した紅茶を飲みながら、九条と中学校時代の思い出話に花を咲かせていた。そして、ほどなくして瀬名と篠崎の二人が到着すると、九条が話を始めた。

「瀬名の取引の秘密を暴くことに関して、生徒会長からご協力いただくことになった。会長はブルーティースによるワイヤレス通信のハッキングに成功したらしく、今度瀬名の通信の傍受を行ってもらおう。ついては、瀬名が誰かと戦うとの情報を入手した場合、皆でその情報を共有し、現場に向かおう」

会長が言った。

「ここに、彼女が使用しているものと同じタイプと思われるイヤホンがあります。まずはこれを使い、傍受のシミュレーションをしてみましょう。どなたかブルーティースによる音声通話に対応した携帯端末を持っていますか？」

手を上げる篠崎。会長は篠崎にイヤホンのひとつを差し出し、リンクさせるよう言った。篠崎が操作を終えると、会長は机の上にあった残りのイヤホンを九条、未来、私の三人につけるように言った。さらに、会長もノートパソコンに接続された有線のイヤホンをつけた。そして、

「では篠崎さん。天気予報でも時報でも構いませんので、どこか好きなところに電話をかけてください。みなさんは、その音声イヤホンを通して聞こえるか、確認してください」

ダイヤルを開始する篠崎。その他の部員たちは、それぞれ耳につけたイヤホンに神経を集中させた。篠崎の電話がつながったらしく、耳の利く私は篠崎のイヤホンから漏れ出てくる天気予報の案内が聞こえてきた。同時に、キーボードを叩き始める会長。すると、私の耳につけられたイヤホンからも、篠崎が聞いているのと同じ音声の流れ始めた。そして、それと同じことが素富と未来にも起こっていることが、二人の驚いた表情からもうかがい知ることができた。

会長が言った。

「では篠崎さん。少し遠ざかってみてください。本番では私があまり近くにいと怪しまれますので」

「はい」

ワイフオンを持ったままドアのところまで遠ざかる篠崎。それでも音声は途切れることなく続いていた。

「みなさん。聞こえますか？」

と会長。

頷く私たち。

「では篠崎さん、電話を切って結構です」

電話を切り、戻ってくる篠崎。

会長が言った。

「皆さんにお渡ししたイヤホンは各自持っていて、瀬名さんが勝負をするときに持ってきてください。私からは以上です」

素富が言った。

「素晴らしいですね。一体どういう仕組みなのですか？」

「ブルーティースは通信開始時に暗号鍵の交換を行います、私はこのパソコンから正規の通信装置を装い、鍵を喪失したため再送信するよう傍受対象の機器に要求し、暗号鍵を送ってもらったのです。そして、複合した通信をこちらのパソコンで録音すると同時にみなさんのイヤホンに出力しました。技術的には傍受されている側がそのことに気がつく可能性はありませんので、みなさんは瀬名さんに自分のイヤホンを見られないようにしてください」

確かに、自分の後ろで自分と同じようなイヤホンをつけた生徒が複数見張っていたら、瀬名も不審に思うだろう。

その後、私たちは携帯電話の番号を交換し、瀬名が誰かと勝負を始めたときはいつでも連絡を取りあえるようにした。そして、会長は教室にいるときの瀬名を見張り、その他の面々は交代でコンピューター室に張り込むことにした。

瀬名が勝負をすることに私たちが気がついたのは、それから一ヶ月後のことだった。瀬名がクラスの男子に勝負を持ちかけたようだという連絡が昼休みに会長からあり、翌日の放課後にはコンピューター室を見張っていた篠崎から瀬名が来たとの連絡があった。

私がコンピューター室に駆けつけると、そこにはすでに噂を聞きつけたと思われるギャラリーが集まっており、その中には篠崎と素富の姿もあった。パソコンの前に座る瀬名の耳のあたりを見てみると、確かに髪からイヤホンのようなものがのぞいていた。そして、瀬名と見知らぬ男子生徒のいるパソコンデスクから二列離れたところに、自分のノートパソコンを広げている会長の姿があった。私はポケットに入れていたイヤホンを取り出し、耳につけた。

篠崎によると勝負はまだ始まっていないらしく、瀬名と男子生徒の二人は互いにチャートを確認したり、ニュースサイトを見たりしていた。そして、時刻が夕方十五時を迎えると、二人は合図をし、試合を開始した。

イヤホンからはまだ何の音声も聞こえてこなかった。ただ通信の傍受には成功しているらしく、通話相手の側の雑音のようなものが聞こえていた。驚いたことに瀬名の通話相手は同じ学校内にいるのか、うちの学校の野球部が校庭をランニングするときにかけるかけ声のようなものが聞こえていた。

それから遅れること五分、未来と九条が到着した。瀬名はまだ注文をしておらず、複数の通貨のチャートをゆっくりと眺めていた。対する男子生徒はすでにUSD/JPYとEUR/USDの二ペアを発注し、評価利益を出していた。

瀬名はなかなか仕掛けないな。私がそう思っていると、突然、イヤホンから声が聞こえてきた。

「USD/DKK買い」

短い声だったが、確かにそう聞こえた。そして、瀬名はチャートをUSD/DKKに切り替えると、ろくにチャートを見ることもなく、いきなりUSD/DKKを売った。

篠崎の言うとおり、やはり瀬名は誰かからの指示を受けていたんだ。だがおかしいのは、声は買いと言っているのに、瀬名が売ったことだ。

そしてさらに、声は次のように続けた。

「USD/HUF売り。USD/AEDも売り」

瀬名はそのチャートを表示させると、やはりチャートをあまり見ずにそれらの通貨を買った。やはり声とは逆に売買しているようだ。しかも、声を聞いてから注文までわずか数秒。瀬名は声と自分の発注にタイムラグを生じさせないように気を遣っているようだった。

声はその後決済やドテンなどのタイミングを的確に指示し、一時間後に試合が終わったときには、瀬

名の獲得利益は男子生徒をはるかに上回っていた。

私たちは瀬名に見つからないよう、イヤホンを外してポケットにしまった。男子生徒は鞆から瀬名に封筒のようなものを渡し、瀬名がその確認を終えると、肩を落としたままコンピューター室を出て行った。私たちも解散するギャラリーに紛れてその場を後にし、部室にやってきた。

部室のドアが閉まるなり、篠崎が言った。

「ほら、やっぱり私の言ったとおりでしょ。他人から指示を受けて売買するなんて完全な不正よ。これで証拠も手に入ったし、四百万円はきっちり利子つきで返してもらわないと。会長さん、訴訟の準備よ！」

会長が言った。

「それは難しいと思います。今回の録音では、瀬名さんが皆さんや私と戦ったときにも同じことをしていたと証明することができません。また、他人からの指示で売買をすることを禁止するルールも設けていませんでしたので、明らかな不正とは言えないでしょう。それに、そもそも賭博での不正を理由とした賭け金の返還請求を裁判所が認めるとも思えません」

「ええっ!? じゃあ、どうすればいいのよ。これだけのことをされて、黙ってるしかないわけ? はうあ~。今までの徒労は何だったのよ...」

うなだれる篠崎。

素富が言った。

「何を言っているのですか。もう一度瀬名さんと戦って勝てばいいだけではないですか」

「どうやって勝つのよ? 瀬名はあの声を聞いて売買している限り無敵じゃない」

「簡単なことです。私たちもあの声の通り売買すればいいのです」

「何言ってるのよ。そしたら損益がまったく同じ値になるだけ。いや、そうか。それで瀬名と同じ利益を獲得したら、あとは独自の取引で一元でも多く利益を獲得するだけ」

「そういうことです。今回の試合を見る限り、瀬名さんは自分の判断で売買することはないようですから、私たちがわずかでも利益を出せば勝てるはずですよ」

「そうね。そうと決まれば早速実行よ！」

話し合いの結果、前回のカジノでの試合で善戦していた篠崎が五百万円を賭けて瀬名に再戦を申し込むことになった。

話が一段落したところで、私が口を開いた。

「ところで、どうして瀬名さんの聞いていた声は、売買のタイミングを逆に指示していたんでしょうか？」

素朴な疑問である。

素富が言った。

「株でも為替でも同じですが、チャート分析に長けていない者がチャートを見ながら売買すると、必ずと言っていいほど損失を出してしまいます。行動経済学の立場はこれを、人間の心理による利益と損失のとらえ方の違いを主張するプロスペクト理論などによって説明しますが、詳しい理由は分かっていません。私はおそらくチャートが見る者を破滅に導く魔力を持っているのだと思います。おそらく瀬名さんはチャート分析の能力のない素人に取引をさせ、その逆をやっていたのだと思います。なお、途上国で集めた人に低賃金でトレードをさせ、その反対の売買を行う手法は、主にヘッジファンドが好むとされますが、まさか似たようなことを個人で実践している方がいたとは驚きですよ」

「しかし、一度も利益を出さずに損失だけ出すなんて、よほどの曲がり屋よね。そうそういるものじゃないわ」

と篠崎。

「そうですか? 素人のうちは大抵はそのようなものだと思いますが...。それに、あえて値動きの予想しに

くマイナー通貨を取引していたことも、そのような取引を可能にする理由だったのだと思います」
そうだったのか。だけど、そんな方法を使うなんて、それはそれで瀬名は頭がいいような気がする。
時刻はすでに完全下校時刻に近づいており、今日の部活はここでお開きとなった。

翌日の昼休み、私は篠崎とともに瀬名のいるクラスに向かった。瀬名は他の男子生徒たちから「かわいいね。一緒にお昼食べない？ おごってあげるよ」「モデルさんみたいだね。写真撮っていい？」などと言われている、迷惑そうにしていた。

瀬名と男子生徒の間に割って入った篠崎。

「悪いけど、ちょっと赤坂さん借りるよ」

「おい。俺たちが最初に話しかけたんだぞ」

「うるさいわね。昼ご飯くらい私がいくらでも一緒に食べてあげるって。お小遣いくれるなら」

篠崎は瀬名の手を引っ張って、廊下に出た。その後についていった私。

「ねえ赤坂さん、私と再戦してくれないかな？ 賭け金は五百万円でいいわ」

パーにした手を瀬名の顔に突き出す篠崎。

「あら。それは不思議ですね。私の強さは、あれから私の試合をさらに二回ご覧になったことで、よくご存じかと思っていましたが」

ぎくっとした篠崎。

「え？ し、知ってたの？」

「ええ。二回とも試合が終わったときに、後ろにいたのは気づいていました」

まさか。通信内容を傍受していたことまで気づかれていないよね？

「そ、そうだったの。だけど私はあなたに勝つために特訓したの。だからもう負けることはないわ」

「そうですか。どうしてもと言うなら拒みませんが、五百万円の賭け金は少々高くないでしょうか？ 特訓の成果を試すに足らずは、リスクをとりすぎているように思います」

うわ。痛いところを突いてくる。

「私の心配はしなくていいのよ。それとも私と戦うのが怖い？」

瀬名は口元に手を当て、少し考えてから、

「とりあえず、二百万円でどうでしょう？」

こちらの予定していた金額よりずいぶん低い提案だ。やはり突然のことで警戒しているみたい。

私が篠崎に耳打ちした。

「この辺で手を打ちましょうよ」

負けたお金の全額が回収できないのは残念だけど、あまり粘って瀬名が対戦を受けつけてくれなくなっ
ては元も子もない。

だが篠崎は、

「ふふふ。怖じ気づいたな。この子娘ビッチが」

なぜか挑発していた。

瀬名はあっさりと、

「はい。とても怖じ気づいています」

気丈な目線で篠崎を見返していた。

それが怖かった私は、再度篠崎に耳打ちした。

「まずいですよ。怒ってますよ。もう二百万円でいいですよ」

「そんなこと言たって、私は百万円取り返さないと、九条から借りてるお金を返せないのよ」

「そんなこと言ってる場合ですか」

篠崎は瀬名に向き直ると、

「しょうがないわね。じゃあ二百万円でいいわ。時間と場所は？」

「明日の放課後、コンピューター室でどうですか？」

「いいわ。待ってる」

踵を返し、立ち去る篠崎。瀬名から離れてしばらく進んだところで、教室の出入り口のところで待ち構えていた男子生徒に声をかけられた。

「ホテル行かない？ お小遣いあげるよ」

「いいよ」

と篠崎。

どっちがビッチか分からないんですけど...

私がそんなやりとりを見ていると、

「もし」

後ろから声をかけられた。

その鈴の音のような声は間違いなく瀬名のものだ。振り返ると、やはりそこには瀬名がいた。

「なぜ彼女はあんなにも自信があるのですか？」

と瀬名。

そんなこと言われたって「あなたがイヤホンで聞いている内容を傍受し、手口を見破りました」なんて、口が裂けても言えるはずがない。

「えっと...」

言いよどむ私の腕を、瀬名はそのか細い手でとると、ポケットから取り出した何かを私の手のひらに置いた。瀬名が手をどけると、そこには金色に光り輝く薄い物体があった。以前、未来が同じものを持っているのを見たことのあった私は、その五百円硬貨よりも一回り大きく、ずっしりとしたものがオーストリア造幣局発行のウィーン金貨であることが分かった。今だと七万円くらいの価値だと未来は言っていた。

私は瀬名からお金を回収できても、すべて九条に払うので手取りはゼロ。だけど、こんなもので仲間を売ることができるわけがない。

何も言わない私の手から、瀬名は金貨を回収しようとした。だが、私は思わずその手を押さえていた。

「金の魅力には抗いがたい」という会長の言葉が、脳裏に浮かんだ。

何か言わないと。

私の顔を見る瀬名。瀬名の澄んだ瞳としばし見つめあったあと、私が言った。

「...えっと、実はコンピューター室の向かい側から、カジノで一緒した私たちが手で彼女に売買のサインを送ることになっているんです」

それを聞いた彼女は納得したのか、金貨から手を離れた。私は手の中に残った金貨を持って、その場を後にした。瀬名が篠崎に試合の約束の取り消しを申し出なかったのは、その程度の策ならば自分が勝利できると思ったからだろう。

放課後の部活では、篠崎が瀬名と勝負の約束を取り付けたことを報告した。明日の戦いに向けて、私たちが立てた作戦は次の通り。

まず、会長と私たちは瀬名が来る前にコンピューター室に待機しておく。会長は瀬名から見えにくいところで通信傍受の準備をし、カジノで瀬名と戦った素富と未来と九条は、いつも瀬名が勝負に使っている座席の二列先に座り、瀬名に見せるためのフェイクの合図を篠崎に送れるようにしておく。

一方、篠崎はイヤホンをつけずにコンピューター室で瀬名と会い、瀬名の左側の座席に座る。そして、試合開始直後、左側のポケットに忍ばせていたイヤホンを取り出し、瀬名に気づかれないように左の耳につける。会長は傍受した瀬名の通信を篠崎に送信し、篠崎は素富たちの送る合図を見て取引をするふりをして、瀬名に送られる売買のタイミングの通り、その逆の売買を行う。

だが、このように取引する限り、篠崎は瀬名と同じ額の利益しか獲得できない。そこで、篠崎は自分の判断で、わずかながら確実に利益の取れそうな売買を一回だけ行い、瀬名より一歩リードする。

この作戦ならば、篠崎が自らの取引でわずかでも利益を上げられる限り、負けることはない。長期投資が専門とはいえ、カジノで善戦していた篠崎ならきっとやってくれるはずだ。

作戦を確認した私たちは翌日の戦いに備え、いつもより早めに解散した。

噛めるのはいつも窮鼠

翌日の放課後。私、篠崎奈々は意気揚々とコンピューター室に向かっていた。教室のある校舎から渡り廊下を通り、コンピューター室のある校舎に移動。

コンピューター室に入ると、そこには噂を聞きつけて瀬名を見に集まったと思われる男子生徒の群れと、その前の椅子に座る瀬名の姿があった。瀬名がどのような勝負を見せるのか期待に満ちた男子生徒たちの顔と、瀬名のすました表情が対照的だ。そして、その二列先のデスクに目をやると、投資部の面々が待機していて、そこからさらに離れたところにはノートパソコンに向かう会長の姿があった。

よし、ここまでは予定通りだ。

私は瀬名の左側の椅子に座った。ネットでニュースを見ていた瀬名はこちらを見ると、「五時から始めますか？」

と言った。

腕時計を見ると、時刻は五時まであと十分。コンピューター室の旧式パソコンの起動に恐ろしく時間がかかることを考えれば、ちょうどいい時間だろう。

私が言った。

「いいわ」

瀬名は自分の画面に目を戻した。自分の判断で取引しているように見せる手前、ニュースを読んでいるふりをしているが、実際には何もしていないのだろう。そう思うと瀬名の行動が滑稽に思えてならなかった。

私はコンピューターの電源ボタンを押し、起動するのを待った。しばらくして表示されたログイン画面に学籍番号とパスワードを入れ、取引の準備をした。

腕時計の指し示す時刻は、五時三分前。瀬名に目をやると、鞆から取り出したペットボトルの紅茶を悠々と飲んでいた。

ふっふっふ。今日がお前の敗北の日となることも知らず、のんきなやつだ。

私はニュースサイトを開き、今後一時間以内に発表される指標を確認した。すると、何もなかった。指標がないならば、純粋なチャート分析で勝負を決めるしかない。

私の考えでは、短期の取引であっても長期の趨勢に反するポジションを取るべきではない。私は各通貨ペアのスワップポイントを確認し、長期的な趨勢を確認した。

なぜスワップポイントで長期的な趨勢が分かるかって？ それは私が昨晚読み返したユリア・ディズラエリ先生著の『貨幣論』にヒントがあるの。この本によれば、長期では次の公式が成り立つらしいわ。

$$\begin{aligned} \text{マネタリーベース増加率} &= \text{マネーサプライ増加率} \\ &= \text{貨幣の減価率} = \text{インフレ率} = \text{利子率} \end{aligned}$$

まず、マネタリーベースとは、中央銀行が供給する通貨の合計であり、マネーサプライは経済主体が保有する通貨の合計なの。簡単に言えば、マネタリーベースがこの世に実在する現金の合計で、マネーサプライはそれが銀行による貸し出しによって増加（信用創造）したものよ。

そして、マネタリーベース増加率 = マネーサプライ増加率というのは、そもそもマネーサプライがマネタリーベースに貨幣乗数（私たちが現金のうち銀行に預ける割合と、それを銀行が貸し出してよい割合から算出した値）を掛けたものであることから、そのままの式なの。

さらに、貨幣の減価とは、貨幣の量が増えることによって、貨幣の価値が失われていくこと。また、イン

フレ率は物価の上昇率だけど、ユリア先生は技術革新による生産費用の減少や、原材料費の高騰などによる生産費用の増加を考慮していないから、マネーサプライの増加率がそのままインフレ率になるの。

さらに、ユリア先生の考えでは、利子とはインフレによって失われる貨幣の価値を補償するものなの。つまり、若いときに働いて老後の資金を貯めても、それがインフレによって目減りしたら大変でしょ？ だから、銀行に預けておくと目減りの分だけ利子をつけてくれる。その率が利子率なの。

このような理由から、先の公式が成り立つわ。そして、「利子率 = 貨幣の減価率」だから、利子率 (F X ではスワップ金利) の高いほど長期的に貨幣の価値が下がっていくと考えることができるの。

私が各通貨のスワップポイントを見たところ、南アフリカランド、オーストラリアドル、ニュージーランドドルの順で高かった。つまり、これらの通貨は売ってもよいが、買ってはならない。そして、その他の通貨はこの逆に考えることができる。

また、トレードをするに当たり、他にも見ておきたい資料があるの。それは、「全米先物取引委員会のトレーダー契約」(CFTC's Commitments of Traders) と「外国為替注文書」(Forex Order Book) よ。

まず、全米先物取引委員会のトレーダー契約とは、アメリカの先物市場のポジションを C F T C (全米先物取引委員会) が毎週火曜日に集計したレポートのこと。いわゆる投機筋に当たる Non-Commercial (非実需) の保有ポジションの内訳が、今後の値動きを占うものとして注目されているの。

この最新版を見てみたところ、豪ドルとユーロは売りポジションが買いポジションを大きく上回っており、これらの通貨の趨勢を投機筋が下落と判断していることが分かったわ。

また、外国為替注文書とは、プレイヤーの未決済ポジションの量と、それが売りと買いのいずれに該当するかを示したグラフよ。縦軸と横軸からなる十字線が全体を四つの象限に区分しているわ。縦軸が価格、横軸がポジションの数量を示していて、右側が買い、左側が売りであることを示しているわ。ポジションの集計方法には純額や累積などがあるけれど、純額で見るのが一般的よ。

ちょっと複雑そうに見えるけど、この表の読み方はいたって簡単よ。まず、右上の象限に該当するポジションは、現在価格よりも高いところで買われているから損失を出しているの。また、左下のポジションも同様に、現在価格よりも低いところで売られているから損失を出しているわ。一方、右下のポジションは現在価格よりも低いところで買われているから利益を出していて、同様に左上のポジションも現在価格よりも高いところで売られているから利益を出しているわ。

ところで、F X は長期的に市場参加者の九十九%が敗北する魔のゲーム。勝者よりも圧倒的に敗者の方が多いから、注目すべきは多数派であるが故に動向を把握しやすい敗者の方よ。純額で表示された外国為替注文書を見て、左側の現在価格付近に多くのポジションが集中していたら、その通貨は下落すると考えられるわ。なぜなら、左側に多くのポジションが集中しているということは、市場参加者の多くが買いのポジションを取っているということ。その多数派を敗北させるためには、必然的に価格は下がらなければならない。また、同様の理由から、左側の現在価格付近にポジションが集中していたら、その通貨は上昇すると考えられるわ。なお、単に縦軸の左右に存在するポジションの量を比較するのではなく、あくまで現在価格付近のポジションの量に注目するのは、現在価格からかけ離れたところで取得され、すでに忘れ去られているいわゆる塩漬けポジションを除外するためよ。

私が各通貨の外国為替注文書を見てみたところ、特に A U D / U S D と A U D / J P Y が買いポジションを現在地付近に集中させていることが分かった。

これらの資料から得られた情報を総合した結果、私はそれぞれの対米ドル通貨ペアについて、次のような売買戦略を立てた。

上昇トレンド：日本円、スイスフラン

下落トレンド：南アフリカランド、オーストラリアドル、ユーロ

明確なトレンドなし...ポンド

これで準備は整った。腕時計を見ると、五時十秒前。ちょうどいい時間だ。

私が瀬名を見ると、瀬名もこっちを見ていた。互いに時計に視線を落とし、試合開始の時刻が到来するのを待った。

やがて秒針は十二の文字を指し、勝負が始まった。私は右手をマウスに乗せたまま、左手で取り出したイヤホンで瀬名に気づかれないよう用心しながら左耳につけた。奥の机に目をやると、会長がノートパソコンのキーボードを叩いているようだった。二列先の机にいる投資部の部員たちは、すでにこちらに向けて売買のサインと思われる合図をしていた。

すぐにイヤホンから送信者の周囲の雑音と思われる音がしてきた。そして、しばらくすると、「USD/ILS 売り」という声が聞こえてきた。私は投資部の部員たちが送る合図を受け取っているふりをしながら、素早くUSD/ILSの買いポジションをとった。すると、瀬名のポジション情報の欄にも、ほぼ同時に同じ通貨ペアが表示された。

イヤホンから聞こえる声の通りに売買を続けること十分。瀬名もほぼ同じタイミングで同じ売買をしているので、私と瀬名の獲得利益はほぼ同じ値になっていた。

ここまでは順調だ。だが、ここで私は重大な事実気づいてしまった。この試合では自分の保有しているポジションの通貨ペアが相手に見えてしまう。だから、瀬名と同じタイミングで同じ通貨の売買を繰り返していけば、いずれは瀬名に怪しまれてしまう。もっとも、こちらは瀬名の通信を傍受できる以上、そのことに気づいたところで瀬名が何かできるわけではないと思うが、最後まで気づかれないことに越したことはない。

だが、私の不安は的中してしまった。突然、イヤホンからの音声がぷつりと途切れてしまったのだ。ウンともスンとも言わないイヤホンに耳を澄ませる私。それでもやはり音はしなかった。

バレたか!? おそろおそろ右側を向いてみると、そこには怨嗟のこもった瞳で私をにらみつける瀬名の姿があった。片手を胸ポケットに入れていたところからして、通話を切断したのだと思われる。瀬名の視線は鋭く、見つめられているだけでこちらの目に穴が空きそうだ。そして、その薄ピンク色の柔らかそうな唇から発せられた笑い声は、身の毛がよだつほどの恐ろしさだった。まるで魔女のように、高らかに笑う瀬名。それに畏怖したのは後ろのギャラリーも同じだったのか、コンピューター室は一瞬にして静寂に支配された。にやりとゆがんだ瀬名の唇が、こう告げた。

「ふふっ。小癩な真似をするのですね。小娘」

「こ、小癩なのはどっちよ！」

負けじと言い返す私。だが、私の心はすでに恐怖で一杯だ。できれば前の席でこちらを見つめている他の部員と代わってほしいくらい。

瀬名が言った。

「私に本気を出させるとはいい度胸です。せいぜい散りざままで私を興じさせるがいい」

「...い、いいじゃないの。やってやるわ」

再びコンピューターに向かう私たち。

先にポジションを取ったのは、瀬名だった。今までとは違い、メジャー通貨のUSD/JPYとEUR/USDだ。そして、二つのポジションのうち、EUR/USDは含み損になった。瀬名が試合において初めて含み損を出したことに、後ろのギャラリーがざわめいた。瀬名はすぐにそのポジションを損切りすると、しばらくしてまた別のポジションを取得した。損失は出しながらも、着実に利益を積み上げていく瀬名。

他人から売買の情報を受け取らなくても利益を出せるほどの力を、瀬名は備えていたらしい。

これほどまでに瀬名の能力が高かったことは想定外だ。だが、負けるわけにはいかない。マウスを握り直した私は、複数の通貨ペアのチャートを比較した。すると、USD/JPYとAUD/USDが下落の様相を呈していることが分かった。このうち、先に資料から求めた長期の趨勢に合致しているのはAUD/USDだけ。私は保有できる最大のポジションをAUD/USDにつぎ込んだ。

みるみる増加していく私の評価利益。そして、私とそのポジションを決済した時点では、瀬名との確定利益の差は約三百円になっていた。だが、瀬名は攻撃の手を緩めることなく、さらに利益を拡大。試合終了二十分前には、確定利益の差が千円に達しようとしていた。焦る私の表情から劣勢を悟ったのか、投資部の部員と会長が不安そうな表情でこちらを見つめていた。

瀬名はペースを落とすことなく、精密機械のように淡々と利益を積み上げていく。そういえば、会長は瀬名が一学年に三人しかいない創立者記念特待生の一人だと言っていた。学業成績とFXの能力に直接の関係はないが、少なくとも舐めていい相手ではなかった。瀬名の能力を甘く見すぎていたと、今更ながら後悔した私。拡大を続ける獲得利益の差を前に、諦めかけた私の耳には突然、思いもよらぬ声が聞こえてきた。「がんばれ篠崎！」「不正を働くやつに負けるな！」

次々と放たれる私への声援。振り返ってみれば、この前の試合で篠崎に敗北した男子生徒をはじめ、多くの生徒たちが声を上げていた。その一方、「それでも俺は美少女瀬名を応援する」「為替の天使瀬名！」などの声援も上がっていた。それぞれの観衆が思い思いの声援を上げる中、私の頭に浮かんできたのは、カジノで聞いた未来の言葉。

「未来のことは誰にもわからない。すべてが不確実なこの世界で唯一『未来のことは誰にもわからない』ということだけが正しい」

おぼろげだけれども、確か未来はそう言っていた気がする。私は自嘲気味な笑みを浮かべた。私としたことが、すっかり忘れていたなんて。確かに未来のことは分からない。この世には不確実な要素が多すぎるのだ。だからこそ、私の敗北も瀬名の勝利もまだ決まったわけではない。

改めてチャートを見返す私。下落しそうな様相を呈していたのは、EUR/USDとGBP/JPY。残り時間は三分。間違った判断をする余裕はない。私はもう一度、外国為替注文書を確認した。EUR/USDは買いポジションが現在の価格付近に集中し、右側が左側に比べ大きく飛び出た形になっていた。下落の余地は十分にある。一方で、GBP/JPYは売りと買いのポジションの量が拮抗していて、明確な方向性が感じられなかった。

私はEUR/USDの売りポジションに全額をつぎ込んだ。すると、ほぼ同じタイミングで瀬名もGBP/JPYのポジションを同じ数だけ取得してきた。現時点での獲得利益の差は約二千円。

瀬名と私とともに利益を出すならば、この勝負は私の敗北に終わるだろう。だが次の瞬間、私の評価損益が一気にプラスに動き、一方で瀬名の評価損益は大きくマイナスになった。すぐにポジションをクローズする瀬名。瀬名の獲得利益は一瞬にして千円減少した。私が評価損益が千円に達したところで決済すると、獲得利益は瀬名をわずかに九円上回っていた。

またも観衆から歓声が上がる。高まる熱気の中、私は瀬名の動向に注意を払っていた。瀬名がこのまま利益を上げられなければ、私は勝ち逃げすることができる。

だが、果たして瀬名がそのようなことを許すだろうか。私の鼓動は高鳴り、今にも気を失いそうだ。だが、朦朧とする意識の中、それでも瀬名が逆転したときのために、すぐに取得できるようなポジションを探す私。

残り時間が一分を切ったところで、瀬名は全額をUSD/JPYにつぎ込んだ。ぎりぎりの時間で勝負に出たのは、私が瀬名の逆転を確認してから反撃に出ることを避けるためだろう。だから、この時点で私が

とりうる選択は、瀬名が逆転しないと考えるか、瀬名が逆転すると考えるか、新たなポジションを取ることのいずれかだ。

刻一刻と近づいてくる残り時間。瀬名の評価損益は七円になっていた。あと三円プラスの方向にレートが動いたら、私は負けてしまう。新たなポジションを取ろうと、マウスを動かす私。だが、ポインタを発注ボタンの上に載せた私は、そこで思いとどまった。

思えば、FXは損失を取り戻そうと思えば思うほど損失が拡大する死のゲーム。土壇場での逆転がいかに難しいかは、カジノで豪富と張り合い、一時莫大な損失を出した私がよく知っている。それは瀬名の頭脳がいかに優れていようとも、変えようのない真実だ。ならば、私がここでとるべき最善の選択は何もしないこと。

私はマウスから手を離した。

残り時間は約十秒。瀬名の評価損益は八円になった。だが、突然五円まで下がったかと思うと、次の瞬間にはマイナス十一円になった。そして、損失はさらに拡大していき、そのまま元の値に戻ることなく試合が終了した。

私を応援していた観衆から歓喜の声が上がる。

「やったあ！」

私は思わず立ち上がり、叫んでいた。投資部の部員たちが駆け寄ってきて、口々に「おめでとう」と言った。

観衆の一部は落胆する瀬名の肩を叩いて励ましていた。瀬名はそれが一段落すると、立ち上がり私に向き直った。そして、鞆から取り出した封筒を、私に差し出した。

ん？ 何だろう。賭けていたのは二百万円だから、現金ならこんなに薄いはずがないんだけど…。まさか、爆破物が仕込まれていて、開けると爆発するなんてことはないよね？

封筒を受け取った私は、おそろおそろ開けてみた。すると、そこには何枚かの紙が入っていた。えっ、紙？

だが、取り出してみると、それは収入印紙だった。

「札束だとかさばるから」

と瀬名。

合計が二百万円分あることを確認した私が言った。

「確かに受け取ったわ」

それを聞くと、瀬名は鞆を持ち上げ、いまだに興奮さめやらぬコンピューター室を颯爽と去って行った。残された私のところには、見物をしていた男子生徒たちが次々と「素晴らしい勝負だった。付き合っほしい」「小遣いを運用してほしい」などと集まってきた。

なるほど。勝負の後、瀬名がいつもすぐに姿を消していたのはこういうわけだったのか。言い寄ってくる男子生徒たちをかき分けながらコンピューター室を出た私は、投資部の部員たちとともに部室に戻った。

緊張から解き放たれたせいか、どっと疲れが押し寄せてきた私は鞆を置くなり、椅子に座ってデスクに上半身を横たわらせた。すると、会長が寄ってきて、私が外し忘れていたイヤホンを外してくれた。

私は机に突っ伏したまま会長に顔を向けると、

「ありがとうございます。会長の協力のおかげで、勝利することができました」

「いいのよ。私も負けたお金の一部を取り返したかったから」

九条が言った。

「とりあえず、賞金を山分けするとするか」

瀬名から獲得した印紙は九条、豪富、未来、会長、私の五人で均等に分配された。

そして、九条に七十万円の借金を負っていた私は、受け取った四十万円の印紙に、昨日瀬名のクラスの男子生徒からもらった小遣いの五万円を足して九条に渡した。

私が言った。

「ふう。これで残りの借金は二十五万円よね。数日以内に何とかするから」

本位ではないが、保有する豪ドルのポジションの一部を決済すれば捻出できるだろう。

だが、九条はまったく気にしていなさそうに、

「ああ。残りなら返さなくていいよ」

「えっ。いいの？」

「もちろん。今回の瀬名に対する勝利は、君のおかげだからね」

それはありがたい。さすが大金持ちの息子は違うね。というか、これほどまでにあっさりと残りのお金を免除してくれるなんて、もしかしたら私が印紙に加えて五万円を返す必要はなかったのかもしれない。そう考えると、昨夕の私のホテルでの労働がまったくの無意味に思われてならなかった。

九条が言った。

「今日はお祝いにみんなで例のカジノに行かないか？ 盛大におごるよ。もちろん、先輩もお誘いします」

うなずく私以外の全員。私は瀬名との勝負の疲労と過払いの落胆とでデスクに突っ伏したまま顔を上げられなかった。

夕方。

私、美乃原綾優は投資部の部員と会長とともに、九条のカジノへとやってきた。会長はここへ来るのが初めてらしく、賭博に興じる人々を興味津々と眺めていた。

まずは夕飯を食べようということで、食事用のテーブルに着いた私たち。私の隣に未来、紭富が座り、向かいには会長と篠崎、九条が座った。料理の注文を終えた会長は、ちょっと賭博の様子を見に行ってくると言い残して、賭博ゾーンの雑踏へと消えていった。

残された私たちが今日の篠崎の健闘をたたえつつ、注文した料理が届くのを待っていると、人混みの中から会長が戻ってくるのが見えた。

あれ？ すべてのテーブルを見て回ったにしてはやけに早いような...

不思議に思っていると、向かって来る会長は誰かの手を引いているようだった。その顔は会長の陰に隠れてよく見えない。だが、その腰のあたりまである白金の髪に、驚くほどか細い肢体は間違いなく瀬名のものだ。

会長が私たちのテーブルまで連れてきたのは、やはり瀬名だった。会長は驚く私たちを前に、「連れてきちゃった」

いや。連れてきちゃったって...

啞然とする私たちをよそに、会長は着席すると瀬名にも座るよう促した。すると、瀬名は黙って会長と私の間に座った。

間近で見る瀬名の肌は絹のように艶やかで、喉はとても白かった。私が見つめていることに気づいたのか、瀬名もこちらを見た。その瞳はとても澄んでいて、見ていると吸い込まれそうになってしまう。だが、吸い込まれてしまう前に、私は会長の言葉で我に返った。

「九条君たちとカジノで戦ったことがあるとは聞いていたけれど、まさか今日も来ているとは思わなかったわね」

「会長お、どうしてそんなの連れてきたんですか？」

あからさまに不満そうな顔をする篠崎。まあ瀬名とあれだけの死闘をしたのだから無理もないか。

「どうしてもこうしても気になるじゃない？ 赤坂さんがどういう人なのか。私は同じクラスだけど、留学してたせいもあってあまり話したことがないのよね。 というわけで、赤坂さん。あなた何者？」

瀬名は困った顔をして、

「何者と言われましても...」

そりゃそうだろう。

ここは私が助け船を出さないと。やはり何者なのかという漠然とした質問よりも、もっと答えやすいことを訊かないと。

私が言った。

「男子から『為替の天使』と言われていることについて、どう思いますか？」

沈黙に包まれる会長と他の部員たち。

あれ。まずいことを訊いた？

しばらくして瀬名が口を開いた。

「よくそのように言われるのですが、私は天使ではなく人間です」

その直截な答え方が面白かったのか、紭富は片手を口元に当ててくすりと笑った。

素富が言った。

「どうしてカジノや学校で他人とFXの勝負をしているのですか？ 協力者の逆の取引をするあなたの手法を使えば、通常のFXの取引でも莫大な利益を上げることができると思うのですが」

首を横に振る瀬名。

「私はFXの口座を持っていないからです」

静まりかえるテーブル。

数秒にわたって続いた沈黙を破ったのは、会長だった。

「持ってない!? だから人とやってお金を集めていたわけ？」

こくと頷く瀬名。

会長はあきれた様子で、

「...そ、そうだったの。確かに未成年だと口座作れないものね」

「皆さんは持っているのですか？」

「私は父の名義のを使ってるけれど、厳密には犯罪収益移転防止法違反なのよね」

と会長。

九条が言った。

「僕たちの投資部なら専用の法人口座があるよ。FXや株の取引をする部活で、利益に応じて部員に配当が支払われるんだ。もしよかったら君も投資部に入らない？ きっと活躍できると思うよ」

「ええ～。やめてくださいよう。部長。こんな怖い人入れたらだめですよ」

と篠崎。

篠崎は瀬名が嫌いらしい。確かに美人なだけに、怒ったときの顔は怖いかもかもしれない。

「まあいいじゃないか。部全体の利益が増えれば、部員への配当も増えるんだからさ」

よしよしと篠崎の頭をなでる九条。

「よろしいのですか？ 入っても」

「しょうがないわね。ただし、私のことはちゃんと先輩って呼びなさいよね」

と篠崎。

いや。篠崎に決める権限はないでしょう。それに、一応瀬名は篠崎より上級生なんだけど...

九条が言った。

「よし。じゃあ決定だ。正式な入部届は明日出してもらおうとして、今日は瀬名さんの歓迎会にしよう」

そのとき、ちょうど料理が運ばれてきた。まだ注文をしていなかった瀬名には、多めに注文していた会長が一部を分けてやった。全員での乾杯が終わった後、素富が瀬名に言った。

「どうしてそんなにお金を集めていたのですか？ もっともお金はいくらあっても邪魔になりませんから、稼げるうちに稼いでおいた方がよいと思います。ですが、瀬名さんはずいぶんと熱心に賭博の相手を探していたような印象を受けましたが...」

それもそうだ。この前私たちがFXの勝負をしようとしたときに飛び入り参加してきたり、学校の生徒に勝負を持ちかけたりと、ずいぶん精力的にやっているような気がする。

「ある目的のためです」

と瀬名。

そういう瀬名の口調は暗く、表情も曇っていた。その顔は、何か思い出したくない事柄に触れている様子にさえ見えた。私がこれ以上この件に深入りしない方がいいのではないかと思ったとき、篠崎が言った。

「どういう目的なの？」

まったく配慮がない。

「それは…」

言いよどむ瀬名。

私が言った。

「待って。言いたくないなら別にいいのよ。誰にだってあるでしょう？ 思い出したくないことって、ね？」

みんなに同意を求める私。

「そうですね。おかしなことを訊いてすみませんでした」

と奈富。

瀬名が言った。

「いえ、いいんです。あまり考えたくなかったのですが、私がお金を集めているのは病床の妹のためなんです。妹は幼いころから難病をわずらい、余命いくばくもないと言われていました。そんな妹の病気を治す唯一の手段が、医療先進国アメリカでの手術。私にはそのためのお金が必要なんです」

「そうだったの。それは大変だね」

賭博という強引な手法で金を集めていたのは、そういった理由があったからなのか。

私が言った。

「そういえば、勝負の時に瀬名さんに売買のタイミングを知らせてた人って誰なの？」

「そうね。それは私も気になってたのよ」

と篠崎。

瀬名が言った。

「あれはうちの学校の女子生徒です。『必ず予想と逆にレートが動く』『何度やっても勝てない』と友人たちにこぼしていたのを見て、これは使えると思い、獲得賞金の一部を渡すことを条件に協力してもらっていたのです」

「そうだったんだ。だけど、すごいよね。その人の言うとおりに取引したら百発百中じゃない」

「私も不思議でなりません。十回中二、三回しか勝てないならまだしも、彼女の場合、百回やっても一度も勝てないのでから」

「…そ、それって驚異的な確率よね？ そんなことってあり得るの？」

未来の方を見ていった私。

未来が言った。

「レートが上がるも下がるも常に二分の一の確率であるとするならば、そのような出来事が起こる確率はきわめて低いわ。だけど、実際のレートはランダムに動いているのではなく、あくまで市場参加者の心理によって動かされているでしょ。つまり、全瞬間において、市場に投入されたマネーのうち最低でも半分が失われるのがFXのルールだから、市場参加者の大部分が上がると思って買いのポジションを取ればレートは下がり、その人たちは損をする。すなわち、FXにおいて自分が損をするということは、自分のとった判断が、そのときの市場参加者の大部分と同じであったということ。皆が同じチャートとニュースを見て売買の判断をする以上、そのようなことが起こるのは別に珍しいことではないと考えられるわ」

「ふ～ん。でも、どうして市場参加者の大部分が買いのポジションを取ると、レートは下がるの？ 普通、ある商品が大量に買われると、その価格は上昇するような気がするけれど…」

「賭博と通常の財市場を一緒にしてはだめよ。FXでは需要曲線と供給曲線の均衡によって価格が決定されるという理論は通用しないもの。これは、胴元が利益を最大化するにはどうすればよいか考えてみるとよく分かるわ。もしも売る人よりも買う人が多くて価格が上がるなら、損する人よりも得する人が多くなってしまふ。つまり、『参加者の利益 - 参加者の損失』の分だけ、胴元が損をするということ。だけど、胴元

は慈善団体ではなく営利企業だから、そんなことは許さない。だから、胴元は同じ状況で逆に価格を下げるの。そうすれば、得をする人より損をする人が多くなるから、『参加者の損失 - 参加者の利益』の分だけ利益が得られることになるわ」

なるほど。そういうことだったのか。

「じゃあ、価格が上がりそうと思ったときに売って、下がりそうと思ったときに買えば、簡単に儲けられるね」

「そうでもないわ。人は利益に対しては許容できる限度はないけれど、損失に対してはあるでしょう？ 利益はいくらあってもいいけれど、損失は十万円までしか耐えられないというように。だから、損失が出ているときには一定額で確定させるけれど、利益が出ているときはいつまでたっても確定させたがらない。だから、一時的に利益が出ているときも、レートが戻ってくるまで放って置いてしまい、損失が出てからはじめて確定させるから、結局損より利益が多くなりがちなの」

ふ～ん。難しいのね。

糸富が言った。

「その点、利益を求めて取引をする人の逆の売買をする瀬名さんの手法は素晴らしいですね。これなら利益も損失も一定額で確定させられますし、何より自分がチャートを見ないので、見る者を破滅に導くチャートの魔力にとられる心配もないです」

その後も、瀬名への質問が飛び交ったり、未来と糸富によるFXについての議論が続いたりした。そして、食事が終わると、私たちは賭博が行われているゾーンに向かった。

そこは、相変わらず熱気に充ち満ちた場所だった。人間の賭博好きにはつくづく驚かされると私が思っていると、糸富が言った。

「瀬名さんは、FX以外で好きなゲームはあるのですか？」

「いえ。私は他のはよくわからないんです」

と瀬名。

糸富が言った。

「やりたいのがあったら何でも言って。今日は入部のお祝いとして、賭場代は僕が負担させてもらうから」

「本当ですか？ ありがとうございます」

うれしそうな顔をする瀬名。

篠崎が言った。

「あっ、ずるい。瀬名ばかり。私にもおごってよ」

「まったく。お前にも初めて来たときおごってやったじゃないか」

「あれ？ そうだったっけ...」

私たちが賭博ゾーンを一巡した後、瀬名は私たちを連れてあるゲームのところにやってきた。テーブルの上には艶やかな木製の盤が置かれ、その上に同じ材質の駒が並べられていた。それは、将棋だった。

さらに、テーブルの向かいに座る紅色のドレスを着た少女が、瀬名を眺めていた。瀬名がそのゲームに興味を持っていると思ったのか、

「お嬢さん。お手合わせしませんか？」

にこやかに頬笑んできた。少女は厚めの化粧と大きめのピアスのせいか、少し大人びて見える。だが、その小柄さからすれば、実際は小学生くらいだろう。創立者記念特待生の座を獲得するほどの頭脳の持ち主である瀬名にとっては、きっと赤子の手をひねるようなものに違いない。

だが、瀬名は口元に手を当てたまま、どうすべきか考えている様子だった。

私が九条に耳打ちした。

「相手はたぶん小学生ですよ。この勝負、瀬名さんの圧勝になるんじゃないですか？」

だが、九条は首を振った。

「そうとは限らないよ。ああ見えて将棋の神童かもしれないし、FXの勝負で瀬名が僕たちにしたように、誰かからの指示を受けて駒を動かすという手を使うかもしれない」

なるほど。その手があったか。

私はこっそり横から近づいて、その少女の耳のあたりを見てみた。だが、瀬名が使っていたようなイヤホンは装着されていなかった。しかし、それ以外にも情報を伝達する手段はあるから、彼女が誰からの援助も受けずに戦うとは断定できない。

瀬名が少女に言った。

「いくら賭けたいのですか？」

「そうね。一千万円でどうかしら？」

うわっ。これは大きく出た。それほどまでに自信があるということか。

「申し訳ないのですが、十万円くらいにしませんか？」

と瀬名。

少女は片手を口に当て、声を上げて笑った。

「あはは。面白いことおっしゃりますのね。そんなはした金を賭けて何が面白いのかしら？」

「あいにく今日は負けてしまって、手持ちがあまりないのです。見たところ先ほどから対戦相手を待ち続けているようですが、このカジノでは将棋はチェスに比べプレイヤーが少ない。このまま待っているより、私と戦った方がよろしいのではないのでしょうか？」

「まあ、いい暇つぶしにはなるかもしれないわね。せいぜい楽しませてちょうだい」

少女に促され、着席する瀬名。すると、近くの係員が立ち会いのためにやってきた。少女は利用料を自分の財布から支払い、瀬名の分は九条が支払った。そして、立会人によって各人の残り時間を計るタイマーのスイッチが押され、試合が始まった。

瀬名は大駒で敵の進軍を阻みつつ守りを固める戦法をとったらしく、すぐに王を片隅に寄せ、他の駒でかくまう鉄壁の防御を完成させた。一方の少女は、慎重に自らの駒を敵陣へと近づけていった。

序盤のうち、二人の勢力が拮抗していた。だが、中盤に入ると、少女側の計算されつくした駒の展開により、瀬名の築いた陣形が徐々に崩されていった。さらに、劣勢に立たされた瀬名の残り時間は徐々に削られていき、少女の三分の一ほどにまで減少してしまった。

瀬名の白い顔が、さらに青白くなっているように見えた。一方の少女は余裕そうな顔で、時折頬杖をついたまま駒を動かしていた。

遠巻きに勝負を眺めていた九条が、隣の会長に言った。

「この勝負、どうぞ覧になります？」

「少女の思考時間が短すぎます」

と会長。

そういえばそうだ。瀬名はじっくり考えてから駒を動かしているのに、対する少女は瀬名が駒を動かしてから十秒後にはもう駒を動かしている。実力の差といえばそれまでだが、毎回同じく短時間で駒を動かすことが可能だろうか？

もし仮に実力以外でこのようなことが可能であるとすれば、それはコンピューターの将棋ソフトによるものだろう。だが、彼女はそのようなものを利用できるパソコンやスマートフォンを操作しているようにも見えない。だとすれば、一体どうやって？ 近くにいる協力者が彼女の代わりに将棋ソフトに情報を入力し、結果を伝えている可能性も考えたが、盤上が見えると思われる範囲に不審な人物は存在しなかった。

私が不思議に思っていると、未来が私に耳打ちしてきた。

「右耳のピアスと腕時計が怪しい。たぶんピアスが骨伝導式イヤホンで、腕時計が映像の送信機。確証はないけど」

言われてみれば、確かに彼女は瀬名が駒を動かしてから自分が駒を動かすまで、腕時計をしている右腕で頬杖をつくことが多い。この動きは腕時計のカメラで盤上を撮影するとともに、ピアスからの音声を聞き取るためのものであると考えるならば、納得がいく。

早く試合をやめさせないと。

対局中の二人のところに向かおうとした私。だが、未来が腕を掴んで引き留めた。

「待って。もし間違いだったらどうするの？ 試合を妨害したって怒られるわ」

「そ、それはそうだけど…」

私たちの話し声が聞こえたのか、会長と九条がこちらを見た。私は二人に未来の言ったことを説明した。

すると、会長が言った。

「なるほど。あり得るわね」

いぶかしそうなまなざしで、少女の挙動を見つめている会長。

「どうすればいいと思いますか？」

と私。

会長は少し考えてから、

「あの大きさの送信機と受信機なら、協力者の存在する範囲は限られるわ。おそらく少女から半径十メートルくらいが限度でしょう。その範囲内で、彼女の送信する映像を見て、将棋ソフトに瀬名の駒の動きを入力し、少女にその情報を伝えている人間を探せばいいわ。ただし、周囲に怪しまれることのないように、自分の声で情報を伝えているのではなく、合成音声か何かを使っている可能性もあるから、必ずしも口が動いているとは限らないわ」

さすが会長。頼りになります。

私たちは手分けして少女の協力者を探すことになった。将棋のテーブルから半径十メートルの範囲を、辺りを見回しながら歩いて行く私。すると、しばらくしてボードゲームと反対側のスロットマシンのコーナーに、一方の手でレバーを操作しながら、もう一方の手でタブレット端末を使っている男の人を発見した。スロットマシンがコインを排出しても目をくれることなく、視線は常に手元のタブレット端末に集中させていた。

むっ。怪しい。

私は会長たちを呼んできた。そして、背の高い会長が後ろから画面を盗み見ることになった。

抜き足差し足で、ゆっくりと近づいていく会長。男はタブレット端末の操作に没頭しているのか、会長の接近に気づく気配がない。男のすぐ後ろまで近づいた会長は、肩越しにタブレット端末の画面をのぞき込んだ。そして、また忍び足で戻ってきた。

「間違いはないわ。瀬名さんの映像と将棋ソフトが映ってる」

九条が近くの係員にイカサマの事実を伝えると、数分後には黒スーツの男たちが集まってきて、タブレット端末を操作している男を連行していった。会長たちとともに瀬名のところに戻ってみると、対戦相手の少女がいなくなっていた。

将棋の駒を初期位置に並べ直している瀬名に、私が言った。

「あれ、あの子は？」

「不正をしていたようで、どこかへ連れて行かれました」

駒を並べ終えた瀬名は、立ち上がって私たちに向き直った。

「不正に気づいて告発したのは、あなた方ですか？」

と瀬名。

会長が言った。

「そうよ。まあ手口に気づいたのが未来さんで、協力者を発見したのが綾優さんだけだね」

「ありがとうございます。危うく負けるところでした」

頭を下げる瀬名。

「いいのよ。最近の将棋ソフトは優れているから、なかなか人間じゃかなわないわよね。プロの棋士でも勝てないって言うし」

「さて気を取り直して、別のゲームをしに行こうよ」

と九条。

私たちはその場を後にし、他のゲームが行われているところを回ってみた。すると、篠崎があるゲームの前で足を止めた。

「あっ、あれにしない？ あれならみんなで一緒にできるよ」

篠崎の指さす先にあったのは、いわゆるコインゲームだった。先端が左右に動くレールの一端からコインを投入し、前後にスライドする一段目の板に落とす。そして、そのコインによって押し出されたコインが一段目から落ち、さらにそのコインが別のコインを谷に落とせば、そのコインが機械から出てくるというルールだ。同時にプレイできる人数はちょうど私たちと同じ七人で、先客はいなかった。

機械に貼られている紙には、「コインは交換所にて、一枚千円と交換できます」と書かれていた。

ふむ。一コイン千円なら私にもできない額ではない。それにこのゲームならゲームセンターでやったことがあるので、コツは知っている。

紊富は機械の中をのぞきながら、

「これはどういうゲームなのですか？」

「あら。紊富ったら知らないの？ コインを中に入れて、他のコインを押し出して手前に落とせばいいのよ。簡単でしょ？」

と篠崎。

「コインの他にボールのようなものもありますが…」

機械の中を指さす紊富。

「ああ。あれを落とすとボーナスで十枚くらいくれるの」

「そうなのですか」

と紊富。

会長が言った。

「面白そうじゃないの。だけど、せっかくみんなでプレイするなら、こういうルールはどうかしら？ 各人が十枚のコインでプレイして、一時間経過するか、全員がそれ以上のプレイをやめた時点で、一番を多くのコインを獲得していた者が勝ち。そして、敗者は一万円のうち負けた割合の金額を勝者に払う。つまり、勝者が二十枚獲得したら、十枚の敗者は五千円の支払いよ」

「いいわね。みんなはどう？」

と篠崎。

負けても最大で二万円の損失なら、あまりお金のない私にもできそうだ。

会長の提案に全員が同意し、近くのコイン交換所で一人一万円分のコインを購入した。そして、終了時間の取り決めがなされ、戦いの火ぶたが切って落とされた。

私はたくさんのコインが二段目に乗っている有利な場所を見つけ、そこを選んだ。そして、私の両隣を

会長と篠崎が選んだ。

ふふふ。篠崎はともかく、察富や会長は初めてらしい。さらに、普段ゲームセンターに行かない未来もこのゲームはやったことがないはずだ。今までは他人の勝負を見てばかりだったけれど、今日こそは私が輝く日になるだろう。

賞金のことを考えただけでうれしくなってしまった私。だが油断は禁物。気を取り直すために、ゆっくりと深呼吸をした。

さて、未来じゃないけれど、このゲームの本質について考えてみよう。このゲームにおいてプレイヤーが操作できる要素はたったの二つ。一つはコインを投入するレールの位置。そして、もう一つはコインを投入するタイミングよ。投入したコインで他のコインを押し出すというシンプルなゲームでありながら、この二つの要素をどうするかが問われる非常に奥深いゲームなの。

まず、レールの位置はあまり動かさないようになっているけれど、通常は投入されたコインが奥の壁の中央に当たるように設定するのがいいと思う。なぜなら、最終的にコインを落とすべき位置は手前の谷の真ん中であり、あまり端っこに落とすと機械に回収されてしまうからね。

私はレールをゆっくりと動かし、レールの先端がちょうど壁の真ん中あたりに来るようにした。あとはコインを入れながら、適宜調整をしていけばいいだろう。

一枚のコインを手取る私。

次に問題となるのが、コインを入れるタイミング。一般には、スライドする一段目が機械の置くに引っ込んだときに投入するのがいいとされているわ。そうすれば、レールの上をコインが転がっていく間に一段目が戻ってきて、コインが置かれていない部分に新たなコインを置くことができるからね。早すぎたり遅すぎたりすると、すでにコインが置かれている部分に二重に置くことになってしまい、他のコインが押し出されなくなってしまうから、注意しないと。

私はコインを投入口に近づけ、前後に動く一段目をじっと見つめた。そして、ここぞという絶好のタイミングでコインから手を離れた。

よし。すでに二段目にはコインがあふれているし、これで最初のコインを獲得よ。心の中でガッツポーズをする私。

だが次の瞬間、私の予期していないことが起こってしまった。

投入されたコインがシューという空気の音とともに、勢いよくレールの上を進んでいった。それは重力だけで転がって行くにはあまりにも速い速度だった。そして、奥の壁にぶつかったコインは、まだ手前に戻りきっていない一段目のコインに重なるように落ちてしまった。

あれ？

隣の会長に目を向けると、やはり投入されたコインが勢いよく進んでいくのが見えた。

そうか。このカジノでは投入されたコインが空気圧で射出されるのか。変わった仕組みだけれど、慣れるしかない。

開始早々一枚のコインを失った私は、気を取り直して二枚目のコインの投入にとりかかった。じっくりとタイミングを見て、一段目が少し戻ってきたところで手を離す。すると、今度はコインがぴったりのタイミングで奥の壁にぶつかり、二段目の何も乗っていないところに落ちた。そして、そのコインに押し出されたコインが二段目から落ち、さらにそのコインに押し出されたいくつかのコインが手間への谷へと落ちていった。

「やった！」

思わず声を上げる私。

最初から多くのコインが二段目に乗っていた場所を選んだのがよかったのか、コインの排出口からは三

枚ものコインが出てきた。

手持ちのコインは十二枚。これ以上プレイを続けるべきか、それとも何もせず試合の終了を待つべきか判断するために、私は他のプレイヤーの様子を見に行っただ。

未来、素富、九条、瀬名はこのゲームが苦手なのか、すでにコインを五枚以下にまで減らしていた。そして、意外にも初めての会長が十二枚と善戦し、篠崎は何と十四枚だった。

まずい。一枚負けてる。

元の場所に戻った私は、じっと一段目の動きを見つめてから、もう一枚のコインを投入した。すると、コインは絶妙の場所に落ちた。だが、先ほどだいぶコインが落ちたせいで、二段目の手前はがら空きだった。このため、奥のコインが少し迫り出てきただけで、落ちてくることはなかった。

腕時計に目をやる私。残り時間は約四十分。まだ余裕はあるのだから、ゆっくり焦らずにやろう。

深呼吸をしてから、もう一枚投入する私。すると、一枚のコインが戻ってきた。だが、一枚入れて一枚出てきたのでは意味がない。

私がさらにもう一枚コインを投入しようとしていると、隣からジャラジャラという音が聞こえてきた。

えっ？ もしかして大量に出てる？

篠崎のところを見てみると、ボールを落とすことに成功したのか手持ちのコインが二十枚くらいに増えていた。勝ち誇った笑みを浮かべる篠崎。

うわ。やられた。

篠崎はおそらくここでプレイをやめるだろう。私が挽回するには、同じくボールを落とすしかない。私が二段目を見てみると、ボールは三つあった。だが、そのどれもが奥の方に位置していた。

しまった。場所を選ぶときにコインの配置に気をとられ、ボールのことを考えていなかった。

だが、プレイできる場所はすべて埋まっているので、今更移動することはできない。私は最も手前にある一番左のボールを落とすべく、レールの角度を微調整した。そして、タイミングを見計らって、コインを投入した。

勢いよく壁に当たったコインは、一段目のコインを押し出した。そして、押し出されたコインがさらに他のコインにぶつかり、ボールは少しだけ手前に移動した。

私はそれからさらに九枚のコインを連続して投入した。すると、二枚のコインが落ちてきて、ボールはあと少しで落ちるといところまで移動したが、残りのコインが四枚にまで減ってしまった。

まずい。もしこの四枚でボールを落とせなければ、私は負けてしまう。コインを握る手に、汗が滲む。

一方の篠崎はというと、もう勝ち逃げすることを決めたらしく、他のプレイヤーの獲得枚数を確認するためにコインゲームの周囲を回っていた。

焦ってはいけない。私もコインを置き、落ち着くために篠崎と同じく他人の様子を探ってみた。

すると、瀬名はすでにコインが尽きて敗退しており、九条、未来、会長は残り三枚を切っていた。そして、盛り返した素富が九枚にまで達していた。素富はボールでも落とすのだろうか。

機械の周囲を一周して自分の場所に戻った私は、コインを片手に取ると、一度深く呼吸をした。そして、ゆっくりと前後に動く段の動きをみつめ、コインを投入した。

コインは空気圧によって、瞬時にレールの中を移動していく。そして、レールの先端から飛び出たコインは壁にぶつかり、少し左の方に転がった後、勢いを失って倒れた。

ふむ。落下位置は悪くない。

次に、一段目が後ろに下がり、あふれたコインが一枚落下する。そして、そのコインが出てきた一段目に押され、他のコインを圧迫する。ボールは少しだけ進んだが、落ちてきたのは一枚のコインだけだった。

ふう。コインが減らなくてよかった。

私はもう一枚のコインを手に取り、投入口に近づけた。そして、一段目が戻り始めたときに、手を離す。空気圧で吸い込まれたコインが放たれ、壁に当たる。コインはやはり左側に進み、倒れた。そして、壁に当たり、一段目の端のコインが二段目に落ちる。

よし。ここまではうまくいっている。

戻ってきた一段目が落ちたコインに当たり、その他のコインを圧迫する。だが、今回はボールもコインも落ちてこなかった。どうやらボールにぶつかったコインが押しのけられてしまい、左右の回収口に吸収されてしまったらしい。

困ったな。手持ちのコインを確認する私。残りのコインは三枚。これを失えば、私は敗退してしまう。

ふと後ろを見ると、こちらの様子をうかがっている篠崎がいた。私の逆転を警戒しているらしい。

見ている篠崎。絶対に逆転してやるんだから。

私は深く呼吸をしてから、もう一枚のコインを取り、投入した。だが、またもやボールもコインも落ちてこなかった。今回もボールに当たったコインが横に押しのけられ、回収されてしまったようだ。

むむ。端に寄りすぎたボールを狙っていたことに後悔する私。だが、その他のボールは谷からはるかかなたにある。残りのコイン数に鑑みれば、今更ターゲットを変更するわけにはいかない。

私はもう一枚のコインを手に取り、投入した。ボールはわずかに動いたが、近くのコインに少し端を押さえられているせいか、落ちてこない。代わりに落ちてきたのは、一枚のコインだった。

私はそのコインをもう一度投入した。しかし、何も起こらない。私は最後の一枚を手にとった。

投入前、私は手の中のコインを見つめた。この一枚が、勝負を決する一枚。負けるわけにはいかない。どうか勝たせてくださいと、コインを握りしめた。

今まで以上にじっと一段目の動きを見据え、ここぞというときにコインを入れた私。放たれたコインは壁に当たって大きく跳ね返り、あろうことが一段目の他のコインの上に乗ってしまった。

うわっ。やってしまった。最後の一枚がこんなにあっけない終わり方なんて...

うなだれる私の肩を、篠崎が叩いた。

「ふふふ。これで私の勝ちね」

勝ち誇ったように笑う篠崎。

私が言った。

「まだ分からないよ。他の人たちが逆転するかもよ？」

私が勝てなかった以上、せめて他の人には勝ってほしいと思う。

篠崎は首を振った。

「それはないわね。このゲームはF Xと同じく、あがけばあがくほど深みにはまる性質のものよ。一度大幅に枚数が減ったらもうおしまい。地獄からの生還は不可能よ」

「でも素富さんはどう？ さっき九枚にまで回復してたよ」

「それでも私には勝てないわ。私のコインは二十三枚。敵うはずないんだって」

篠崎を連れ、私は素富のところに行った。すると、素富の手元にあったコインの山を見て、篠崎は思わず目を丸くした。

「信じられない...」

と篠崎。その口は言葉を発した後もふさがっていなかった。

私は素富の邪魔にならないよう、後ろからこっそり近寄って枚数を数えてみた。すると、少なめに見ても二十枚はあることが分かった。

篠崎のところに戻った私が言った。

「あらあら。少なくとも二十枚はありますよ」

「い、一体どういうことなのよ。ありえないわ...」

怒気を含んだ声の篠崎。

私と篠崎は紊富に近づいて、それぞれ両側から紊富のプレーを見てみた。

紊富のやり方はこうだ。紊富はその長い指を器用に用い、プレイヤーの左右につけられた二本のレールから、両手で二枚ずつのコインを間髪を入れずに投入する。すると、勢いよくレールから放たれたコインのうち、最初の二枚が中央でぶつかり、倒れずに一時的にコイン二枚分の厚さの壁をつくる。そして、素早く再調整されたレールから放たれた三枚目のコインが二枚のコインの片側に当たり、壁が倒れないように力を加える。さらに、反対側から放たれた四枚目のコインが三枚目と同時にその壁に当たり、勢いよく跳ね返った四枚目が、一段目を無視して二段目に飛び、ぶつかったボールを一気にたたき落とす。

そのきわめて高度な作戦を前に、篠崎は開いた口がふさがらないといった様子だ。今までに何度もコインゲームで遊んできた私でさえ、これほどまでに高度なプレーをしている人は見たことがない。

そもそも一度に四枚ものコインを消費する曲芸を、よく残りコインが少ない段階でやろうと思ったものだ。

唾然とした表情で見つめていた篠崎に、段上のすべてのボールを落とし終えた紊富が言った。

「どうかしましたか？」

「なっ、何やってんのよ。そ、そんなことってありなの？」

動揺する篠崎を前に、紊富は落ちついた声で、

「あら？ こうするのが正しいやり方ではないのですか？」

「ちがーうっ！」

うん。私も違うと思う。

だけど、紊富のやり方は単に投入口からコインを投入しているだけであって、ルール違反ではない。もっとも、カジノ側にしては完全に想定外だろうけれど。

紊富が枚数を数えると、全部で二十八枚だった。

残り時間はあと五分。私は篠崎がすぐに反撃に出ると思った。だが、あまりの曲芸を見せつけられた篠崎は意気消沈したのか、

「もういいや」

とうなだれていた。

試合終了後、各自が獲得したコインを持って集まった。獲得枚数は紊富が二十八枚、篠崎が二十三枚、未来が三枚、会長が二枚、その他がゼロだった。

あらら。篠崎はいい勝負だけど、その他は完全に紊富の圧勝じゃないか。

私たちは一万円の賭け金のうち、紊富に負けた割合を支払った。ゼロ枚しか獲得していない私の支払いは、賭け金の全額だ。

みんなから賞金を受け取った紊富は、うれしそうというよりむしろ照れくさそうにしていた。普段から株で稼いでいるだけあって、わずかなお金には興味がないのだろう。しかし、株だけではなくコインゲームの才能もあるとはうらやましい。

「あ～あ。やっぱりお金ってお金のあるところにしか集まらないわよね。私のような貧乏人は一生底辺なのか」

篠崎は独りでぶつぶつ言っていた。

結局、コインゲームがその日の最後の遊びとなった。私たちは九条の車でターミナル駅まで送ってもらい、瀬名の歓迎会は終わりとなった。

バイナリ・オプション

それから一ヶ月はきわめて平穏な日々が続いていた。学校は夏休みに入って二週間が過ぎようとしていたが、投資部の活動は夏休みもあるため、私たちは毎日朝九時に部室に集合していた。

私は素富から株を学ぶとともに、九条からはFXの短期投資、篠崎からは長期投資を学び、少しずつ利益が出せるようになってきた。もっともまだ損失を出してしまうこともあるが、ここ数週間の損益はプラスだ。

瀬名は他の部員からFX取引を学びつつ、協力者の逆に取引する手法で部活の資金をみるみる増やしている。

会長は生徒会の用事がある日は学校に来ているらしく、たまに部室を訪れては素富や未来たちと私には理解できない経済の理論について語り合っていた。

ところで、うちの学校では夏休みに活動を行う体育系の部活には、保健体育の教員による「熱中症にならないための対策セミナー」の受講が義務づけられている。私たちの投資部はコンピューター研究部として届け出ているし、屋外での活動などないのだから、本来であればセミナーを受講する必要はないと思うけれど、顧問の先生の「パソコン利用者の体力消費量はアスリート並だ」という主張によって、セミナーへの参加が決定されてしまった。

というわけで、明日のセミナーには部員のうち二名を代表者として送らなければならないことになり、誰がその代表者になるのか話し合いが始まった。

「私は嫌よ。どうせ汗臭い運動系の連中ばかりでしょ。何で空調の効いた部屋でキーボードを叩いているだけの私たちが行かなきゃならないのよ」

と篠崎。

九条が言った。

「まあそう言うな。顧問の判断なんだから。行きたい人いるか？」

挙手を促す九条。だが案の定、手を上げる者はいなかった。

「セミナーを受けておけば、この先熱中症で死亡するリスクが軽減できるかもしれませんよ」

と会長。部員ではない会長は完全に人ごとといった様子で、足を組んで椅子に座ったまま、備品のサイフォンで淹れたコーヒーを飲んでいた。

「もう。部外者は黙っててください」

頬を膨らませる篠崎。

「いえ、篠崎さん。熱中症にならないために行ってはいかがですか？ 運動に青春を燃やす、さわやかな体育会系男子との出会いもあるかもしれませんよ」

と素富。

「なっ、何言ってるのよ。あんたが行きなさい。だいたい私はあんたと違って付き合う男には困ってないの。希望者殺到で私とのデートは一ヶ月待ちなのよ」

両手で開いた手帳を、素富の前に突きつける篠崎。私も横からのぞいてみると、それは見開きが一ヶ月の手帳で、ほとんどどの日にも二~三人分の名前が書かれていた。仮に一日三人とすれば、多少重複があるとしても一ヶ月で九十人くらいと付き合っていることになる。

素富はあきれた様子で、

「一体何人と付き合っているのですか？」

「知らないわ。数えたことないもの」

九条が言った。

「おいおい。あまり大ぴらにやるなよ。見つかったら大変じゃないか」

「大丈夫だって。別に法律を犯しているわけじゃないし、校則でも金銭の授受を伴う生徒間の交際は禁じられていないもの」

いや。そもそも公序良俗に反する時点でアウトだろう。

「それより、素富が行くべきだわ」

と篠崎。

「私は遠慮しておきます」

「じゃあ、瀬名が行きなさい。篠崎先輩の命令よ」

「お断りします」

と瀬名。

なかなか話がまとまらない中、会長の鶴の一声が響いた。

「投資部らしく、為替の勝負で決めたら？」

「あっ、それがいいわ。一時間でどれだけ利益が上げられるか勝負して、最も少なかった二人が出席するの。瀬名はずるしないこと」

びしっと瀬名を指さす篠崎。

九条が言った。

「おいおい。それじゃお前の圧勝だろう。新入部員や一応株が専門の素富に不利だ」

「え〜っ。じゃあどうすればいいのよ？」

会長が言った。

「では、今はやりのバイナリ・オプションで勝負してはいかがでしょう？」

バイナリ・オプションって何だろう？ 聞いたことがない。

それは篠崎も同じだったらしく、

「何それ？」

会長が立ち上がり、説明を始めた。

「バイナリ・オプションとは、特定の通貨について、基準となる時刻から一定時間経過後の為替レートが、基準時よりも上昇しているか下落しているかのいずれかに賭けるゲームです。一般には、基準時と終了時の間は五分など短い間隔に指定されます。そして、当たれば賭け金が二倍になって戻ってきますが、負ければ全額が没収されます。金融商品の名の下に販売されていますが、言うなれば為替レートを元にした半丁賭博です」

「へ〜。おもしろそうじゃない。それにしましょう」

「待て待て。それじゃ結局FXのデイトレードと変わらないんじゃないか？」

会長が言った。

「いいえ。そうでもありませんよ。FXとバイナリ・オプションは、そもそもルールが違います。FXではポジションを取るタイミング及び利益確定と損切りまでの幅は完全にプレイヤーの任意です。しかしながら、バイナリ・オプションではポジションを取るタイミングは一定の時間ごとにしか訪れませんし、終了時刻になるまでに利益確定をしたり損切りをしたりすることもできません。FXが綿密な情報収集と緻密な戦略を要求する戦略的なゲームであるとすれば、バイナリ・オプションは経験と直感がものをいうスポーツのようなゲームではないでしょうか」

「なるほど。まさにスポーツ選手のための熱中症対策セミナーの参加者を決めるのにふさわしいってわけね」

と篠崎。

いや。それは関係ないと思うけれど。

「私はバイナリ・オプションでも結構ですよ」

と紊富。

それに続くように瀬名、未来も賛成を表明したので私も賛成することにした。

こうしてバイナリ・オプションの勝負でセミナーの参加者を決めることになったのだが、困ったことにコンピューター研究部には四台しかパソコンが存在しなかった。そこで六人での同時対戦を諦め、二つの組に分かれてそれぞれの組で一人ずつ敗者を決めることになった。

まずはグーとパーだけのじゃんけんをして、組を決定する。結果、私は篠崎と紊富と同じ組になった。二人ともかなりのやり手であることは疑いもない事実だから、この時点で私の敗北は決定したと言っても過言ではない。また、もう一方の組は未来、九条、瀬名の三人だ。

そして、会長の提案によりルールの詳細が決定した。まず、試合時間は第一組が十時から十時半までの三十分間で、第二組が十一時から十一時半までの三十分間。この間にバイナリ・オプションの取引を行い、最も利益の少なかった者が敗者となる。ベットは五分間隔で受け付けられ、いずれの組も00分から25分までの最大六回がベットのチャンスになる。また、一回に賭けることのできる金額は一万円のみで、それ以上もそれ以下も認められない。なお、今までのFXの勝負とは違い、他人の現在の利益を確認することはできず、また相手の取引画面をのぞき込んでならない。

会長からルールの説明が終わると、まずは九条たちの組から試合を行うことになった。パソコンの前に着席した三名は会長の指示により、バイナリ・オプションのデモ口座を開設した。そして各自チャートなどを見ながら、十時の試合開始に備える。

そして、十時ちょうどに締め切られる取引のベットに間に合うよう、時計の針が十二を指すよりもわずかに早く、会長の「はじめ」の合図で試合が開始された。同時に、何人かがマウスをクリックした。早速誰かがベットをしたらしい。

私は勝負をしている人たちの周りを回り、状況を確認してみた。すると、開始早々ベットをしたのは九条と瀬名だったことが分かった。USD/JPYの上昇に賭ける九条と、下落に賭ける瀬名。二人のベットは相反するものだから、この取引ではどちらかが勝利して、どちらかが敗北する。

五分後、利益を獲得したのは九条だった。チャートを見て、次のベット先を探す九条。

一方、未来のところに行ってみると、未来は十時五分にEUR/AUDの下落にベットしていた。そして、五分後に勝利した。

ここまでは一万円の利益の紊富と未来が一位で、一万円の損失の瀬名が三位だ。

さらに、未来はEUR/GBPの下落にベットし、またもや一万円を獲得した。すると、それ以上は不要とみたのか、もう取引をやめてしまった。

一方の九条は損失を出したのか、損益がプラスマイナスゼロになっていた。また、一度目から損失を出した瀬名は、損失を出すことへの恐れからか、今のところ何もしていなかった。

時刻はやがて十時半を迎え、会長の「やめ」の合図で試合が終了した。結果は二万円の利益を獲得した未来が一位。そして、マイナス二万円の九条が二位。さらに、マイナス三万円の瀬名が最下位だった。こうして瀬名のセミナー行きは決定した。

あらら。やっぱり瀬名は協力者の逆をやらないと弱いよね。

第二回の試合に備え、パソコンの前に着席する私。相手はあの紊富と瀬名だから、正直なところ勝てる気はまったくしない。だが、それでも希望は捨てまいと、いちおうチャートを確認する。

第一回の試合を終えた未来から聞いたところ、バイナリ・オプションは半丁賭博でありながらも、勝つ確

率より負ける確率がやや高く設定されているため、できるかぎり取引しないのが得であるという。未来が二万円の利益を獲得した後に一切の取引をやめたのは、そういう理由だったらしい。

だが、私の相手は素富と篠崎だ。二人は何かにつけて張り合っている節があるから、少し利益を獲得したくらいで取引をやめることはないだろう。つまり、私は相当多くの利益を獲得しなければ、この戦いに勝つことはできないということだ。

やがて十一時か近づき、会長が「はじめ」の合図をした。

早速、私は目をつけていたUSD/JPYの上昇にベットをした。とはいえ、五分後のレートが今より上か下かを予想するなんて、私には到底不可能な芸当だ。だから、私の今のベットはただの勘によるものでしかない。

画面には基準時のレートと現在のレートとの乖離を図示した簡易的なチャートのようなものが表示されている。私は上昇に賭けたため、基準時のレートを示す横線よりも上の部分は赤くなり、下の部分は青くなっている。そして、現在のレートを示す点が、五分後にその線よりも上にあれば私の勝ちで、下にあれば負けとなる。

ベット後間もないというのに、チャートでは現在のレートが基準時よりも少し下のところで推移していた。未来の言うように勝つ確率が負ける確率よりも少し低く設定されているというのは、このことだろう。

そして、それから三分くらい経過したとき、現在のレートが基準時を大きく下回った。

うわ。早速はずしてしまったか。つくづく運がない女だ。

だが、しばらくチャートを見ていると、基準時から大きく下がっていた現在のレートがゆっくりと基準時に向かって上昇してきた。

おっ、よかった。このまま戻ってくれば...

しかし、レートは基準時を一瞬だけ超したかと思うと、すぐにまた下落していった。そして、そのまま終了時が到来し、私の獲得利益はマイナス一万円となった。

心臓に悪いな、これ。

続いてベットをした私はチャートが目に入らないように、まぶたを閉じた。五分後に確認してみると、やはり損失が出ていた。

もうだめだ。私には才能がないんだ。

これ以上やっても損失を出すだけだからと、取引をやめた私。どうせ熱中症予防のセミナーと言っても数時間で終わるだろうから、我慢して行ってこよう。

それから間もなく試合は終了した。そして、各人の利益を確認して回った会長が、結果の発表を行う。

たぶん私が最下位だろう。

だが、そんな私の耳に入ってきた会長の言葉は、驚くべきものだった。

「ええと、一位はマイナス二万円の綾優さんね」

あれ？ マイナスなのに勝ってしまった。ということは、素富と篠崎の損益も同じくマイナスで、私を下回っていたということか。

「二位はマイナス三万円の素富さん。そして、三位はマイナス五万円の篠崎さん」

隣に目をやると、唇をわなわたと震わせている篠崎がいた。宿敵の素富に負けるにとどまらず、最下位になってしまったことが悔しいらしい。

「ああ、あり得ないわ。私が素富に負けるなんて.....」

「まあまあ。言ったじゃないの。FXとバイナリ・オプションは違うゲームだって。あなたのFXの実力が否定されたわけじゃないんだから、そう落ち込まないの」

よしよしと篠崎の頭をなでる会長。

九条が言った。

「というわけで、明日の熱中症予防セミナーの参加者は瀬名と篠崎に決定だな。篠崎、頼んだぞ」

「えーっ、明日は朝からデートの約束が四件も入ってるのに」

と篠崎。

九条が言った。

「おいおい。そんなのはキャンセルしろって」

「しょうがないわね。あーっ、もう。二十万円の損失じゃない」

翌日の部活。昼過ぎにセミナーから帰ってきた篠崎は、鞆置き場に鞆を放り投げるなり、

「大したことないじゃないの。日向での長時間の運動は避け、一時間に一回は水分補給をしましょう。塩分も忘れずに摂りましょう。夜は早く寝ましょう。って、これだけじゃない。正直、これだけのために各部活の代表を集める必要あったのかしら」

九条の隣の椅子に、勢いよく腰を下ろした篠崎。

「お疲れ。瀬名はどうした？ 一緒に出たんだろ？」

と九条。

「ああ。あいつなら水分補給のジュースを買ってくるとか言って、どっかに行っちゃったけど。どうせ私たちはここから一步も出ないで活動するんだから、わざわざ水分補給なんてする必要なんてないのにさ」

篠崎は持ってきた「三日で分かるバイナリ・オプション」という本をうちわのようにパタパタさせている。室内は冷房が効いているとは言え、セミナーが行われた部屋からここまでの道のりはかなり暑かったらしい。というか、その本を持っているということは、篠崎はバイナリ・オプションの勉強を始めたのだろうか。ずいぶんと負けず嫌いのようだ。

「ねえ、素富。今度またバイナリ・オプションで勝負してあげるわ。次は負けないから」

と篠崎。

先ほどから株の取引をしている素富はディスプレイから目を離すことなく、あっさりと言った。

「嫌です」

「はぁ？ 何言ってるのよ。勝ち逃げなんて許すわけじゃない。ちゃんと戦いなさいよ」

だが、素富は篠崎には目もくれず、

「うるさいです。静かにしなさい」

それからしばらく篠崎は素富に話しかけていたが、素富は全くの無視。諦めた篠崎は本を放り投げ、デスクに突っ伏して眠ってしまった。

それからしばらくして、瀬名が帰ってきた。瀬名は両手一杯に、ジュースの缶を抱えていた。

「た、ただいま帰りました」

瀬名は入り口から一番近いデスクの上に、七本のジュースを投げ出した。

「わざわざ悪いな。金は部費から出すよ。ほら、みんなも受け取って」

ジュースの近くに集まってくる部員たち。篠崎も目を覚ましたようだ。

だが、ジュースを手にとった篠崎が言った。

「ちょっと、どうしてコーンポタージュなのよ？」

瀬名をにらみつける篠崎。

よく見てみると、七本ともすべてコーンポタージュだった。しかも、とても熱い。

「水分と塩分です」

と瀬名。

なるほど。セミナーでそう言われたんだっけ。

篠崎は引き返して椅子に座ると、

「まったく。このくそ暑いのにこんなのが飲めるかってのよ」

缶を開け、飲み始めた。

飲んでるじゃない...

缶を受け取った会長は、

「真夏日にエアコンの効いた部屋で熱い飲み物ってのも悪くないわね。実際、アイスクリームの消費量は冬が一番多いっていうし、まったく人はどうしてこうあべこべな贅沢を好むのかしら」

などと独りでぶつぶつ言いながら、満足そうに飲んでいる。

すると、飲み終わった篠崎がふと腕時計を見て、立ち上がった。

「やばっ。行かないと」

「どうした？」

と九条。

「午後からデートの予定が入ってるの。もう帰るね」

と篠崎。

すると、FXの取引をしていた未来が立ち上がり、

「篠崎さん。ちょっと話が...」

「ごめん。明日にして。今日は上得意だから遅れたら大変なのっ」

篠崎は鞆を担ぐと、部室を飛び出した。そして、廊下を走る篠崎の靴の音が遠ざかっていった。

上得意って何だろう？ 付き合っている相手にもいろいろランクがあるのだろうか。

素朴な疑問を抱く私。

それはさておき、未来は篠崎に何の用があるというのだろうか。普段はあまり自分から篠崎に話しかけたりしないのに。

不思議に思った私は、部室の奥でパソコンに向かう未来のところに行ってみた。すると、未来はいつになく神妙な面持ちでディスプレイとにらめっこしていた。

「どうしたの？」

と私。

未来が真剣な眼差しでディスプレイを見つめるのは珍しいことではないが、今の未来の様子は明らかにいつもと違っていた。それほどまでに今日の相場は手強かったのだろうか。

だが、未来をそこまで真剣にさせていたのは、そんなことではなかったらしい。

「スリッページの値が異常」

と未来。

スリッページ？ そういえば、表示されている価格と実際に約定した価格との差だって、前に未来が言っていたっけ。

「スリッページがおかしいの？」

と私。

「そう。数時間前から、注文を出すと20ピップスくらい平気で滑ってしまうわ。売り注文でも買い注文でも同じ。これは異常」

すると、私たちの会話を聞いていたのか、突然糸富が口を開いた。

「FXでもそうなのですか？ 実は、株でもそうなのです。ここ数時間、成行注文を出すと突然誰かが割り

込んで来るみたいで、注文時よりもだいぶ上乘せされた価格で約定されてしまうんです。こんなことは初めてです」

「やはりそうですか」

「と、おっしゃいますと？」

「アメリカの連邦議会にフラッシュオーダーを規制する法案が提出されていたのですが、報道によると、つい先ほど否決されたそうです。数時間前からスリッページが増大しているのは、インサイダー取引に該当するおそれがあるとされていたフラッシュオーダーが法案の否決によって政府のお墨付きを得られたため、際限なく行われるようになったためだと思います」

「そ、そうだったのですか」

と冢富。

コーンポタージュを飲み終えた会長が、私たちのところにやってきた。

「フラッシュオーダー規制法案が否決されたため、スリッページが増大？ どれどれ」

会長はスマートフォンを使い、自分で取引を試してみたようだ。そして、

「あら、本当ね。注文した瞬間、いきなりスプレッドを大幅に超える評価損益が出るわ」

「困ったものです。これではもう株や為替で利益を上げることができません。それどころか通常の商行為にも甚大な影響が及ぶものと思われます」

と冢富。

「そうね。特に通貨の両替の必要な貿易には悪影響よね。株で経済の成長に投資することもできなくなるし」

「どうしてそのフラッシュオーダー規制法案は否決されたの？」

と私。

フラッシュオーダーがそんなに有害なものなら、禁止されるべきだと思うけれど...

未来が言った。

「フラッシュオーダーを行っている企業のほとんどがディズラエリ系だからよ。今やアメリカの金融はディズラエリによって支配されていると言っても過言ではないわ。莫大な財力を有するディズラエリが、ロビイストを雇って議会に圧力を掛けているのよ」

「ロビイスト？」

と私。

会長が言った。

「政府の意思決定に影響を与えるために活動する人たちのことよ。専門でやっている人もいれば、議員から転向する人もいるわ。議員などに接待を行って、クライアントの要望通りの法案を通してもらったり、都合の悪い法案を否決してもらったりするの。彼らによる過剰な接待は Bribe、Banquet、Bronde の頭文字をとって 3 B と言われるほどよ。特にディズラエリのロビイストによるアメリカ政府のコントロールは徹底していて、アメリカに居住するディズラエリ人は全人口の一・七パーセントしかいないのに、アメリカの政治や経済は実質的に彼らの支配下に置かれているという見方もあるわ」

「じゃあ、その人たちがいる限り、フラッシュオーダーは規制されないんですか？」

「その可能性が高いんじゃない？ いくらフラッシュオーダーが市場に悪影響を及ぼすといっても、規制できる権限を持つ人が賄賂に犯されていたんじゃないもの」

冢富が言った。

「何とかする方法はないのでしょうか？ これはあまりにひどすぎます」

「私たちの楽しみが失われたのは残念だけど、諦めるしかないんじゃない？ 私たちがディズラエリ並の財

力を以てアメリカに働きかければ別かもしれないけれど、彼らは現にフラッシュオーダーで莫大な利益を市場から吸い上げているんだから、財力で対抗するなんて不可能でしょう」

と会長。

その言葉を最後に、しばらく沈黙が続いた。このままフラッシュオーダーが野放しにされた状況が続けば、FXや株のトレードは意味をなさず、この部活の存在意義は失われてしまう。誰も言葉を発しないまま、部室にはパソコンのファンの音だけが響いていた。

全員が諦めかけたそのとき、沈黙を破ったのは未来だった。

「フラッシュオーダーのシステムを破壊しましょう」

「破壊!？」

思わず声を上げる私。

「フラッシュオーダーのシステムは通信によるタイムラグを少なくするため、一般に株や為替の取引所に隣接する場所に設置されます。取引所の周辺を調べれば、どこに設置されているか分かるはずですよ」

と未来。

会長が言った。

「ちょっと待って。確かに物理的に破壊してしまえばフラッシュオーダーはできなくなるけど、どうやって破壊するつもりなの？ アメリカはこの世で最もテロに対する警戒が厳しい国の一つよ。システムを破壊するだけでも困難だし、ましてや無事に出国することなんてできないわ」

「それが問題です。何かいい方法はないでしょうか？」

意見を述べる者はおらず、部室はまた沈黙に包まれてしまった。

そりゃそうだろう。天下のアメリカにある企業のシステムに攻撃を仕掛けるなんて、いくら未来や会長の頭がいいからといって、そう簡単にできるわけがない。

未来は懐から取り出したUSBメモリーをパソコンに挿し、キーボードを叩いた。

「この資料を使えないでしょうか」

と未来。

ディスプレイをのぞき込む私たち。そこには、線で描かれた飛行機のようなものが映っていた。

思わずはっと声を上げたのは会長だった。会長はそれが何であるか分かったらしい。

「これは…」

と会長。

未来が言った。

「レイヴィの設計図です」

「レイヴィって？」

と私。

会長が言った。

「一九八〇年代にディズラエリ王国がアメリカからの支援で開発していた戦闘機よ。アメリカから支援の打ち切りで開発が中断されたんだけど、その技術は中国の戦闘機『殲 20』に応用されるなど、現代でも色あせていないとされているわ」

興味深そうに画面を見つめている会長。

茶富が言った。

「一体どこから入手したのですか？ まさか、最近はやりのファイル共有ソフトで流出していたとか…」

「いえ、ディズラエリの諜報機関にいたときに手に入れたものです。祖国脱出の折りに勝手に持ってきてしまいました」

「えっ？ 未来さんってディズラエリから来たの？」

と会長。

そういえば会長にはまだそのことを話していなかったっけ。

「そうです。話せば長いのですが、私はディズラエリを追い出されて日本に来ました」

「へえ、そうだったの。で、このレイヴィを使って祖国ディズラエリの企業に打撃を与えたいというわけね」

あっ、そうか。未来は単にフラッシュオーダーに困っていたのではなく、ディズラエリの資金源を立つことによって、祖国に打撃を与えたかったのか。

無言で頷く未来。

会長はマウスを操作し、設計図を仔細に確認していた。

「ふ～ん。設計図に特段の不備はないわね。機体のすべての作り方が記されてる。技術的にも最新ってわけじゃないし、あとはそれなりに設備のある工場さえあれば作れそうじゃない？」

梶富が言った。

「でも、作ってどうするんですか？ 仮に首尾よく生産できたとしても、それに乗ってアメリカに接近した時点で迎撃されてしまうと思いますが…」

もっともな疑問だ。

未来が言った。

「会長の技術でこれを無線操縦できるように改造できませんか？」

会長は少し考えてから、

「できないこともないわ。あと、迎撃をかいくぐって領空に進入することを考えれば、対空ミサイルの迎撃装置も必要よね。一ヶ月くらいあれば、何とかかなりそうかな」

うわ。なんだか知らないけれど、会長はやる気のような。

「でも、どこで作るんですか？」

と梶富。

会長が言った。

「それは困った問題よね。これを作れるだけの機械があって、なおかつ秘密裏に作ってくれるところを探さないといけない…。誰かいい工場知らない？」

辺りを見回す会長。だが、返事をする者はいなかった。

「それに、滑走路の問題もあります」

と梶富。

「それなら問題ないわ。うちの学校の中庭を使えばいいじゃない」

確かにうちの学校は敷地が長いせいか、中庭もやたらと長い。だが、学校の管理する敷地をそう簡単に使うことができるとは思えない。

「そ、そんなことできるんですか？」

と梶富。

できないだろう。常識的に考えて。

だが、会長はあっさりと、

「生徒会の権限で何とかできるかもしれないわ。去年の秋ごろ、突然休校が宣言されて、一週間キャンパスへの立ち入りが禁止されたことがあったでしょ。あのとき実は校舎に使われていたアスベストの除去工事が行われていたのよ。生徒や保護者に知られると不安がられるから、表向きは断水ってことにしてたけどね。あのときと同じように適当な理由をでっち上げて、キャンパスを借り切ることができるかもしれないわ」

そんなことがあったのか。というか、去年から在籍している私は少しアスベストを吸っていた可能性があるということか。不安だ。

「ですが、離陸した段階で日本のレーダーにとらえられてしまうのではないのでしょうか？ そうなると離陸した場所から、私たちを割り出すことが可能になってしまいます」

「確かにそれは気をつけないといけないわね。だけど、対空レーダーなんて基本的に低空を飛行する物体には無意味だし、何より外からやって来るものは注意深く見張っていても、内側から出て行くものには案外甘いものよ」

「でも、予算はどうします？ これだけのものを造るとなると、それなりにお金がかかるとは思いますけど…」

「それが問題なのよね。みんなはどれくらい出せるのかしら？ 私は百万円くらいかな」

ぼんと百万円を出せるなんて、会長はなんて裕福なんだ。

「株オタクの私から株をとったら何も残りません。株式市場の公平性を取り戻せるのなら、私は五億円まで出しましょう」

と梶富。

さすがはインサイダー嫌いの梶富。上には上がいるものだ。

「私は十億円」

と未来。

ちょっと出し過ぎではないだろうか。その気前の良さで、私に半分くらい譲ってほしい。

会長と梶富、未来は残る私の方を見た。

「えっと、私は三千万…」

と私。

ごめんなさい。これが私に出せる限界です。

「無理しないでいいですよ。費用はすべて私たちが負担しますから」

と梶富。

会長が言った。

「もっとも、システムを破壊する前にあらかじめ下落しそうな株や通貨を空売りしておけば、作戦がうまくいったときに費用が回収できるかもしれないわね。その辺の銘柄の選定は梶富さんと未来さんに任せていいかしら？」

「分かりました」

と梶富と未来。

未来が言った。

「では、残る問題は工場ですね。これはもう少し検討してみることにしましょう」

私たちはさらに議論を続けたが工場については解決策が出ず、その日の話し合いはお開きになった。

さかのぼること一時間。私、篠崎奈々は学校から駅に向かう通りを疾走していた。

まずい。のんきに部室で昼寝なんかしてる場合じゃなかった。

炎天下、駅へと続く約一キロの道路を駆け抜け、中央駅に向かう快速列車に飛び乗った。

「ふう。間に合った」

息を切らせながら、座席に腰を下ろした私。ワイフオンを取り出し、待ち合わせの相手に少し遅くなるかもしれないとメールをした。

今日のお相手は一つ下の後輩。馴れ初めは新学期が始まってすぐの食堂だった。独りで食事をしている彼に私が声をかけ、仲良くなったのだ。彼を選んだのは何となくお金を持っている雰囲気が出たのと、何となく落とせそうな感じがしたから。そして、私の予感は的中し、彼はよっぽど私のことが気に入ったのか、喫茶店でお茶をしたりカラオケに行ったりするだけでお小遣いをくれる都合のいい客となった。

そんな上客中の上客を待たせてはまずいので、電車が時間通りに着くか気がかりだ。我が国の五十五年体制最後の総理大臣となった人物が在任中に語ったところによれば、人から信頼されるには最低でも三つのことを守らねばならないという。それは時間を守ること、お金を借りないこと、ぺらぺらしゃべらないことだそう。つまり、時間を守るとは人間関係において最も基本的なこと。私に対する彼の信頼が傷つくことのないよう、列車が時間通りに着いてくれることを願うばかりだ。

私は車窓から風景を眺めていた。紗倉学院高校は都心から少し離れたところにあるので、見えるのは畑ばかり。だが、夏真っ盛りだというのに、ほとんどの畑には何も植えられていなかった。

税金の対策として畑のままにしてあるのかな。このあたりを開発すればもっと土地が有効活用できそうなのに、もったいないな。

そんなことを考えながら、列車が到着するのを待った。

列車が中央駅に着いたのは、待ち合わせの時刻と同じ午後三時ちょうど

列車がホームに滑り込み、ドアが開くと同時に、私は電車を飛び降りて階段を駆け下りた。改札を出ると、向かいには彼の姿があった。

「ごめん。遅くなって」

息を切らせながら、彼に走り寄った。

彼は気にしてなさそうな様子で、「大丈夫。俺も今来たところだから」と言ってくれた。

彼の名は村木蓮。私より少し背が高く、マイナーな競歩部という部活に入っているそう。正直に言えば、容姿も性格も私の好みではない。

私は彼と一緒に、いつも利用している喫茶店に入った。案内された奥の席に座り、鞆を置いた私。

「さあ。好きなものを注文して」

早速、村木がメニューを渡してくれた。

実際のところ、私と付き合っている男子の大部分は体目当てであり、ここまで優しくしてくれる相手は村木をおいて他にない。だからこそ村木は私にとって、最も都合のいい金ずるでもあった。

私は自分のお金なら絶対に頼まないような、一つ千円以上するパフェやケーキを大量に注文した。それでも村木は私が喜ぶなら構わないのか、うれしそうに私の顔を見つめたまま、何も言おうとしない。

つくづく村木は金があると思う。

注文を終えると、村木は鞆から取り出した袋をテーブルの上に置いた。

「篠崎さんにプレゼント」

と村木は言った。

封を爪で切り、袋の中をのぞいてみると、ブランドものと思われる革製品があった。取り出してみると、ハンドバッグだった。

がーん。私にブランドもののバッグを持ち歩く趣味はない。くれるなら実用的な電波時計とかの方がよかったんだけど...

だが、ここで感情を表に出してはいけない。私は満面の作り笑顔で、

「うれしいわ。ありがとう」

「喜んでもらえてよかった」

いや、本当は喜んでないんだけど...。まあ駅前の質屋で売り払えば一万円くらいにはなるだろうから、何ももらわないよりはましか。

やがて注文したメニューが運ばれてきた。私はまず、この店で一番高い千九百円のいちごチョコレートパフェを食べ始めた。

村木はコーヒーをすすりながら、そんな私を満足そうに眺めていた。私にとって村木は好みのタイプではないから、普段なら「何じろじろ見てんだよ」と言うところだが、私の大切なお客さんである以上、そのようなことは口が裂けても言えない。

私は村木に一部始終を見つめられたまま、パフェを食べ終えた。さらに、私がメロンアイスフロートを食べる時も、村木は常に私を見つめていた。

よく飽きないな。

私は容姿に自信がないわけではないが、穴が空くほど見つめられるとさすがに不思議になる。やはりそれほどまでに惚れられているということなのか。

私はケーキをナイフで小さく切りながら、その様子をじっと見つめている村木に言った。

「あのさ...」

「どうしたの。篠崎さん？」

私の疑問にまったく気づいていない様子の村木。

私はフロートのグラスを片手に、

「ずっと私の顔見てて、飽きない？」

「飽きないよ。篠崎さん以上の美少女は見たことがないからね」

私は危うく口内のメロンソーダをはき出すところだった。容姿に自信があるとはいえ、そんな文句を面と向かって言われたのは初めてだ。これにはさすがの私も赤くなったかもしれない。

村木は何も言わず、そんな私を楽しそうに見つめていた。

「そ、そうなの？」

と私。

村木はあっさりと、

「そうだよ。今年の春、食堂で独り昼食を食べていた俺に声をかけてくれた篠崎さんを見て、俺は天使が舞い降りたのかと思ったんだ。いくら世界が広いとはいえ、これほどの美少女はいない。だから、俺はあのとき一生篠崎さんといたいって思ったんだ」

うわっ。まさかここまで惚れられているとは知らなかった。独り寂しく食事をしているときに声をかけられたのが、そんなにうれしかったのだろうか。私が村木に声をかけたのは、単に複数で歓談している人たちよりも、独りでいる人の方が声をかけやすかったからなのに。

「そ、そうだったの。はは...」

苦笑いする私。

私が注文した品のすべてを食べ終えるまで、村木は飽きることなく私を見つめていた。

さて、お腹も一杯になったことだし、そろそろ席を立つとするか。だが、その前に一つやるべきことがある。

私が言った。

「ところで村木君。お小遣いは？」

村木は封筒から真新しい一万円札を三枚取り出すと、私に差し出した。

「これでいいかな？ 篠崎さん相手じゃ少なすぎるかもしれないけれど」

さんざんおごってもらった上に、三万円の時給。常に鑑賞されるのは気疲れしてしまうが、これだから村木との交際はやめられない。

「いいわ。ありがとう」

私はお金を財布にしまった。

「さて、次はどこに行こうかしら？」

まだお金はあるみたいだから、もう少し続けられそうだ。

「篠崎さんは、どこか行きたいところある？」

「私はどこでもいいわ」

といっても、ここからネズミーランドのような遊園地はかなり遠い。このあたりにある娯楽施設は映画館かカラオケ、ラブホテルくらいなので、そのいずれかに絞られるだろう。実際、過去にもその三つしか利用したことがない。

喫茶店を出た私たちはとりあえず映画館に行ってみたが、私の興味を惹く映画がなかったため、結局カラオケに行くことになった。

だが、これが結構骨の折れる仕事なのだ。村木はいつも私の歌が聴きたいと言って自分はマイクを握らないから、私が二時間連続で歌い続けることになってしまう。

そして案の定、今回も私がずっと歌わされることになってしまった。テレビ画面の前に立ち、時折手拍子をする村木の前で歌い続ける。いうなれば、私による村木のための個人コンサート。途中で休憩を入れてもいいのだけれど、うれしそうに私の歌を聴いている村木を見ていると、休ませてとは言い出せなかった。そして二時間が経過し、終了の電話が来たときには、私の声はすっかり枯れてしまっていた。

カラオケの小遣いとして村木から追加で四万円をもらった私は、次にラブホテルに向かった。部屋に入った私は、まず村木に十万円を請求。こればかりは私の負担が大きいので、いくら相手が村木とはいえ万が一のことがないよう予め受け取っておくことにしている。そして、確かに十万円を受け取った私は、村木と一緒にシャワーを浴びた。

それから約一時間が経った。チェックアウトにはまだ時間があつたので、私と村木はベッドに横たわったままだった。すると、村木は突然こんなことを言い出した。

「俺は君に出会えて本当に幸せだった。もう思い残すことはないよ」

私はその台詞が面白くて、笑いながら、

「あはは。何言ってるの。また遊んでくれるでしょ？」

だが、村木は悲しそうに、

「あいにく俺が君と遊べるのは、今日が最後になりそうだ」

「えっ。どういうこと？」

村木にはいつまでも私の金ずるでいてもらわなければならないのに。まさか他の女でもできたというの

だろうか？ 確かに村木くらい金のある男なら、他の女が接触を図ってきても不思議ではない。だが、村木は私に惚れているはず。なのにどうして...？

だが、私の問いに対する村木の答えは意外なものだった。

「俺の父親の経営する自動車工場が、昨今の円高のせいで急激な経営難に陥ったんだ。技術だけは世界一なんだが、いくらコストを切り詰めても通貨の安い国には敵わないらしい。近いうちに廃業するらしいから、俺はもう君に小遣いをあげることができない」

がーん。せっかくの上客をこんな形で失うとは。

落胆のあまり、私はしばらくかける言葉がなかった。それでもようやく私の口から出てきたのは、次の言葉だった。

「.....そ、そうなんだ。大変だね。でも、いつか村木君がお金持ちになったら、いつでも連絡して。私、待ってるから」

「ありがとう。篠崎さん」

村木は私の髪を愛おしそうになでた。

思えば、喫茶店で私にくれたプレゼントも、村木が残り少ないお金をかき集めて購入したものなのかもしれない。そう思うと、売り払ってしまうのは、あまりに無慈悲であるように思われた。

私の髪をなでる村木の瞳があまりに悲しげだったせいか、私は生まれて初めて自分から相手の唇を求めていた。今までで一番長いキスの後、離れた私はベッドから這い出た。

ホテルを後にした私たちは、中央駅の改札で分かれた。私は振り返って村木の後ろ姿を見ると、小さくなっていくその背中が、私が初めて食堂で村木を見つけたときのように寂しげだった。

驚愕の篠崎

翌日、朝早く部室に集まったのは私、美乃原綾優の他、未来、素富、九条、会長の計五名だった。

会長以外の四人はインターネットを使って、レイヴィの製造を請け負ってくれそうな工場を探していた。一方、会長は持ってきたノートパソコンのキーボードを叩きながら、オリジナルのレイヴィの設計図に変更を加えていた。

会長は片手にコーヒーのカップを持ったまま、

「ねえ、九条君。投資部の予算で高性能パソコンを購入してくれないかしら？ 私のはあまり性能がよくないから、これで物理演算をしていたら何年もかかってしまいそうなのよね。実際に試作機を作ってテストするわけにいかないから、せめて物理シミュレーションだけでも万全にしておきたいじゃない？」

「それは構いませんが、会長の今持っているのもかなり早いのではないですか？」

見たところ、会長の持っているパソコンは今年発売されたばかりの機種のようなのだ。

「ううん。いけると思ったんだけど、やっぱりだめだったわ。費用は年度末までに学校の方から出してもらえるようにするから、その点は安心して」

「そうですか。では、会長の方で注文してください。部活当ての荷物は学校名の後に部の名前と代表者を書いて送ればいいですから」

「わかったわ」

時刻が午前十一時を回ったところで、篠崎が姿を現した。

「あら。こんにちわ。篠崎さん」

と会長。

九条が言った。

「どうしたんだ。今日は遅かったじゃないか？」

篠崎はペットボトルのお茶を飲みながら、

「昨日は遅くまでデートしてたから、起きられなくて」

「まったく。不埒な」

と素富。

篠崎は素富をにらみつけて、

「うるさいわね。純粋な恋愛をしているんですうっ」

「恋愛？ 面白いことを言いますね」

「何言ってるのよ。どうせあんただって大したことしてないでしょ」

「あらあら。そういうあなたこそ、昨日から世界の証券・為替市場が大変なことになっていることを知らないのですか？」

「大変なこと？」

何も知らないという顔の篠崎。パソコンのマウスをクリックして、画面を確認したが、特に問題はないという顔で素富の方を見た。

「ふん。何の問題もないじゃない。私の豪ドルの売りポジションは、あいかわらず二百三十万円もの含み益を出しているわ」

「残念ですが、その含み益はポジションをクローズした瞬間、損失に変わってしまうかもしれません。昨日からスリッページの値が異常ですから」

「はぁ？ そんなことあるわけじゃないじゃない。自分が稼げないからって、焼き餅焼くのも大概にしてよね」

「いいえ。残念ながら、その可能性は大いにあります」

と未来。

尊敬する学者の未来に言われて、少しは考え直したのか。

篠崎が言った。

「えっ。どういうこと？」

「論より証拠です。篠崎さん。まずは適当な通貨でポジションを取ってみてください。必ず損失が出るはず
です。数量が多いと危ないので、千通貨で試してみてください」

「わかったわ」

パソコンを操作する篠崎。すると、すぐに驚きの声を上げた。

「えっ。いきなり三百円の損失？ あり得ないわ...」

そして、篠崎はもう一度操作を行い、ポジションを決済した。

「うそっ!? 七百円も損失が出てる。...ど、どういうことなの？」

血の気の引いた顔で、未来を見つめる篠崎。

「昨日アメリカの議会でフラッシュオーダーを規制する法案が否決されました。これによりフラッシュオー
ダーが無制限に行われるようになり、一般のトレーダーが取引を行おうとすると、瞬時に多量の注文に割
り込まれてしまい、スリッページが大量発生するようになったものと思われます」

「困ったわ。私の豪ドルのポジションが...」

泣きそうな顔で画面を見つめる篠崎。

「だから、私たちはフラッシュオーダーを行っているシステムに攻撃を仕掛けることにしたの」

会長は篠崎に昨日私たちが立てた計画について説明した。

「そうだったんですか」

と篠崎。

「ええ。というわけで篠崎さん。みんなと一緒に、レイヴィの製造を秘密裏に請け負ってくれる工場を探す
のを手伝ってくれないかしら？」

朝からずっと工場探しをしている私たちは、いまだに丁度良さそうな工場を見つけられていない。今更
篠崎さんが加わっても、あまり力にはならないだろうと私が思った矢先、篠崎が言った。

「それなら、ちょうどいい工場を知ってますけど」

「えっ？」

思わず聞き返す私たち。

「私の彼氏の父親が経営する自動車の工場です。円高の影響で工場をたたまざるを得ない状況らしいです
が、技術だけは一流だそうです」

「じゃあ、私たちがその人と会えるよう手配してくれないかしら？」

「わかりました」

ワイフオンで電話をかける篠崎。すると、交渉がうまくいったらしく、明日の午後に中央駅の喫茶店で
篠崎の彼氏の父親と会えることになった。

交渉

次の日の午後、私は篠崎と会長と一緒に、中央駅の喫茶店に行った。すると、篠崎の彼氏という人物と、工場長をしているという父親がいた。会長と私による簡単な自己紹介の後、会長が切り出した。

会長は持ってきたノートパソコンの画面を篠崎の彼氏の父親に見せると、
「実は、このようなものを造っていただきたいのです。もっともこれは現在開発中のものなので、一部詳細が変更される可能性はありますが」

工場長は設計図を一瞥して、
「これは、航空機。…いや、戦闘機か」
「はい。ディズラエリの戦闘機レイヴィに、無線操縦装置と外部燃料タンク、ミサイル迎撃システムを搭載したものです」

「こ、こんなものを造らせて一体何に使うつもりだ？」

「それはお聞きにならない方がよろしいかと思えます」

にこやかに頬笑む会長。
「私たちにとって必要不可欠なものなんです。悪いことには使いませんから、どうかお願いします」
頭を下げる篠崎。

篠崎の彼氏も言った。
「俺からも頼むよ。篠崎さんは天使なんだ。きっと人命救助とか社会貢献に使ってくれるよ」
いや。そこまでいいことに使うと断言できる自信はない。というか、篠崎が天使って何なの？

工場長はコーヒーカップを傾けてから、もう一度設計図に目をやった。
「しかし、これを造るとなると、うちの工場の設備だけでは足りないな。それに、従業員に給料も支払わねばならないし、君たちの小遣い程度ではまかないきれないだろう」

会長が言った。
「現金で十億円を用意しています」
工場長は驚いた様子で、

「ほ、本当か？」
「はい。手付け金としてまず三億円。注文通りの機体が完成すれば、残りの七億円を支払う用意があります。もちろん、いずれも現金で一括払いできます」

篠崎の彼氏が言った。
「なっ？ この金さえあれば、しばらくは工場をたたむ必要もなくなるだろ？ やっぱり篠崎さんは天使なんだ」

だから天使って何なのよ。
「そ、そうだな。だが、少し検討させてくれないか？ なにぶん初めてのことだから、まずは詳しい見積もりを出してみないことには何とも…」

「わかりました」
「この設計図をいただけるかね？」
「構いませんが、くれぐれも内密にお願いします。情報が外部に漏れることがないよう厳重に管理してください。パスワードは」

会長は懐から取り出したUSBメモリーを工場長に渡した。こうして私たちは喫茶店を後にした。

工場長から篠崎に返事があったのは、それから三日後のことだった。部室で工場長からの電話を受けた篠崎は、「請け負ってくれるって」と言った。しかも、金額はこちらの提示した十億円でいいそうだ。

このころにはもう会長によるレイヴィの改造もほぼ終了していた。オリジナルのレイヴィに加えられたのは、部室のコンピューターからの遠隔操縦を可能にする装置と、日本からアメリカまで航行するための追加の燃料タンク二個、それにミサイルによる攻撃を防ぐための迎撃システムだ。

中でもミサイルの迎撃システムは、会長がM I T留学時代に研究していたものらしく、かなりの肝いりだそうだ。勝利を意味するトロフィアという名のそのシステムは、搭載された航空機から半径百メートル以内の空間に進入したすべての熱源を自動発射される弾丸で破壊するらしい。私は会長が新たに購入した高性能コンピューターで、レイヴィが飛来するミサイルを打ち落とす物理シミュレーションを何度も見ていた。

また、私たちの部室はこれまでとは様変わりしていた。デスクの配置は口の字型からコの字型に変更され、コックピットが作られていた。正面のデスクには上下二段で計六台のディスプレイが配置され、さらに側面のデスクにもそれぞれ二台が配置された。さらに、正面のデスクには会長が買ってきたフライトシミュレーター用のスティックと、電車シミュレーター用のマスターコントローラー、そしてキーボードが配置された。そして、無線交信用のヘッドセットも用意されていた。

レイヴィの操縦訓練は私と篠崎が行うことになった。会長は高い洞察力を持つ素富が未来にやってほしかったらしいのだが、設計者よりも機体を熟知している者はいないと二人が辞退し、会長も断ったため、結局私と篠崎がやることになってしまったのだ。

「こ、こういうの苦手なのよね...」

フライトスティックを握り、物理シミュレーターの画面で練習をする私。会長が作成した擬似的な地形の上を航行しているが、さっきから障害物にぶつかりっぱなしだ。時速が千キロを超えている上、早期警戒システムに捕捉されないよう三十メートル以上は上昇できないためだ。その上、曲がるのにいちいち複雑な操作をしないといけないのも、障害物に対する反応が遅くなる原因になっていた。

後ろで見ていた会長が言った。

「大変そうね」

それはもう。

「ちょっと代わって」

と篠崎。

私に代わり操縦席に座った篠崎。意気揚々と操縦桿を握ったのはいいのだが、やはりすぐに障害物にぶつかってしまった。

会長は指を口元に当て、

「まずいわね。実際の地形は高層ビルとかでもっと複雑なのに。事前に調べておくといっても限界があるし...」

「この複雑な操作、何とかならないんですか？」

と篠崎。

レイヴィを横に曲がらせるのは大変だ。まず、マスターコントローラーのレバーを引いて速度を抑える。そして、操縦桿を曲がりたい方向に動かし、機体を傾ける。さらに、キーボードの矢印キーを押して方向舵を動かすと横に曲がるはずなのだが、タイミングが合わなかったり、キーを押しすぎたりすると、そのまま障害物に突っ込むか、墜落してしまう。

「機体の安定化はこれでもだいぶ自動化したんだけど…」

と会長。

すでに十回以上障害物にぶつかっている篠崎が言った。

「じゃあ、せめて操縦桿とマスコンだけで曲がれるようにできませんか？ 曲がるのに三つの機械に触るのは大変です」

「どういうボタンの配置にすればいいかしら？」

「そうですね。これとこれがこっちで…」

新たな配置を提案する篠崎。

会長は篠崎の意見を取り入れ、プログラムを書き直した。今度は曲がるのに操縦桿とマスコンだけの操作ですむようになった。そして、もう一度篠崎が操縦桿を握った。すると、さっきより少しましな飛行になっていた。

篠崎がある程度障害物にぶつからずに飛べるようになった時点で、練習は次のステップに移った。今度は迫り来る戦闘機とパトリオットミサイルを回避しながら、マンハッタンにあるフラッシュオーダーの施設を目指すというものだ。数あるフラッシュオーダーの施設からここを選んだのは、調査の結果、この施設が世界全体のフラッシュオーダーの約四分の三を担っていることが判明したためだった。

右側の画面には、ネットから取り込んだとみられる地図にレイヴィの現在地が表示され、左側には付近の熱源を示すレーダー画面が表示されていた。地図では目的地であるアメリカ東海岸のマンハッタンの場所にピンのようなものが立てられていた。

紗倉学院高校から飛び立ったレイヴィは、低空飛行のまま北太平洋へ出た。警戒の厳しいアメリカ本土を横切るとはせず、メキシコとキューバの領空を侵犯して北大西洋に回り込んだ。この時点で追加の燃料タンクはすべて切り離され、残りの燃料は東海岸にたどり着くのがやっとの量になってしまった。そして、東海岸に近づいていくと、スピーカーから警告音が鳴り響き、レーダー画面には二つの機影が表示された。

見つかってしまったようだ。

これ以降はすでに敵のレーダーに発見されているため、上昇できる高度に制限がなくなる。篠崎はキーボードを操作してアフターバーナーに点火し、機体を上昇させた。

この時、実戦であれば、出撃してきた邀撃機から無線で警告があると予想されるが、対応は英語の得意な会長が行うことになっていた。カナダ空軍の飛行機であるが、訓練中に機体に不具合が発生したため、緊急着陸を求めると言って時間を稼ぐ予定らしい。

邀撃機はさらに距離を詰めてきた。レイヴィは高度を下げると、最大速度まで加速して邀撃機の下を通過した。だが、すれ違った直後、反転した邀撃機から発射されたミサイルと思われる物体が、レーダー画面上に表示された。

会長が言った。

「私たちのレイヴィに搭載されているのは二十ミリバルカン砲だけ。一方、敵の戦闘機にはその他に自動追尾型のミサイルが搭載されているはずよ。レイヴィのミサイル迎撃システム・トロフィアは完全な迎撃を保證するものじゃないし、十発までしか撃てないから、できるだけ自力でよけるように」

「そ、そんなこと言ったって…」

レイヴィは最大速度を出しているというのに、ミサイルはみるみる距離を詰めてきた。篠崎はミサイルを引きつけてからレイヴィを宙返りさせてみたが、効果はなかった。それどころか、追ってくる二機の邀撃機に距離を縮められてしまった。

篠崎は機体のステータスが表示されるディスプレイに目をやり、トロフィアが有効化されていることを確認した。ミサイルが接近すると、迎撃弾が発射された旨が表示され、レーダー上からミサイルが消滅した。

「ふう」

ため息をつく篠崎。

だが、安心したのも束の間。レーダーには本土から発進された邀撃機がさらに五機表示された。篠崎はレイヴィの高度を変えてやり過ごそうとしたが、発射されたミサイルをよけきれず、またもやトロフィアが迎撃した。

そして、迫り来る戦闘機の大群を前に、篠崎はレイヴィをこれ以上本土に接近させることができず、トロフィアを撃ち尽くしたレイヴィは蜂の巣状態になって墜落した。

篠崎は操縦桿から手を離れた。

「敵に弱点はないんでしょうか？」

会長はあっさりと、

「ないわ」

「それじゃだめじゃないですか…」

「だって、迎え撃つ戦闘機はレイヴィより新しい技術で作られたF 35よ。性能はこっちが圧倒的に劣っているんだから、操縦テクニックでカバーしないと」

「はっあ」

ため息をつく篠崎。

会長が言った。

「こっちの唯一の強みと言え、人が乗ってないってところかしら。急旋回・急上昇を繰り返してもパイロットが失神することはないし」

「そうは言っても武器が弱すぎませんか？ レーザービームとか波動砲とかつけてくださいよ」

篠崎が放ったレイヴィ搭載のバルカン砲は、一発たりとも敵に命中することがなかった。

確かに、敵には装備されている追尾型のミサイルがレイヴィには搭載されていないのは不利だ。会長によると、法律上ミサイルの製造に使われる火薬を入手するのが困難なため、やむを得なかったらしい。

会長は口元に人差し指を当て、少し考えてから、

「そうね。その点は検討する必要があるわね」

それから一週間後、シミュレーター上のレイヴィには新たな武器が加わっていた。その名もウェイヴ・サージャー。波動砲をつけてくださいという篠崎の要望を具現化したその武器は、国内でも容易に入手可能な液化石油ガスを詰めた弾丸を射出し、空中で爆発させるというものだった。この武器の最大のメリットは、弾丸自体が敵に当たらなくとも、爆発によって生ずる衝撃波によって付近の航空機を一網打尽にすることができる点である。

「うわぁ。いいですね、これ」

篠崎は画面に向かい、新しい武器のテストをしていた。以前は逃げ回ってばかりだったが、この武器が搭載されてからは敵を迎撃できるようになっていた。

後ろからシミュレーターの画面を眺めていた会長が言った。

「衝撃波の発生地点に飛び込まないように気をつけるのよ。撃ったら速度を落とすか、旋回するように」

「了解ですっ」

篠崎は調子よく迫り来る邀撃機を打ち落としていった。そして、訓練を始めてから初めて東海岸に到達し、本土の上空に進入した。すると、地上からPAC3が次々と発射されてきた。

「うわっ。来た」

機体を旋回させ、ミサイルを躲す篠崎。もうレイヴィの操縦には慣れてきたのか、至近距離から発射される場合を除き、トロフィアに頼らなくてもミサイルを回避できるようになっていた。

レイヴィは本土上空を突き進み、地図上に表示されたマークの地点であるフラッシュオーダーの施設を目指す。ところが、地図上に表示される機体の位置が正確でないため、篠崎は施設に到達することができずにいた。

「おかしいですよ。ずれてます」

と篠崎。

機体の位置を示すマークは目標のマークとほぼ重なっているのに、周囲には山ばかりが広がり、目標らしき施設が見当たらない。

会長が言った。

「敵機の進入が確認されたら、アメリカは自国の人工衛星が提供するGPSの精度を落とすと思うの。実戦ではここまでひどくはないと思うけれど、目視で対象を見つけ出す練習よ」

「わかりました」

篠崎は高度を上げ、上空から地面を見下ろしてみた。すると、複数のビルが建ち並ぶ地域を発見し、そこに向かった。だが、乱立するビルのどれが対象なのか確認することは困難だった。

「地図を衛星写真に切り替えて」

「はい」

篠崎はキーボードを操作し、地図の表示を切り替えた。そして、周囲の特徴的な建物から目標の施設にたどり着こうとした。

フラッシュオーダーが行われているのは、高層ビルである取引所の近くに併設された小さなビルだ。そして、取引所の近くには高い電波塔が建っていた。

篠崎はまず電波塔と取引所を見つけ、レイヴィの現在地と対象の位置を確認した。そして、電波塔を目印に接近すると、取引所に併設されたフラッシュオーダーの施設を視認することができた。

高度を落とし、対象にレイヴィを接近させる篠崎。

部室の全員が固唾を呑んで見守る中、ディスプレイに映る対象の建物が少しずつ大きくなっていく。そして、対象の壁が画面一杯に表示されたかと思うと、画面が真っ暗になった。

ステータス画面には、機体が深刻なダメージを負った旨が表示されていた。

「うん。うまくいったみたいね」

と会長。

対象への攻撃は武器を用いず、レイヴィ本体を直撃させることになっていた。十億円する機体を壊してしまうのはもったいないが、レイヴィを学校まで帰還させるわけにもいかないため、こうするしかないというのが会長の見解だった。

「よくやったわ」

篠崎の頭をよしよしする会長。

続いて私が操縦桿を握り、同様の訓練が始まった。

それから五ヶ月間、私と篠崎はシミュレーターでの訓練に明け暮れていた。授業中は航路を記した地図や衛星写真を頭にたたき込み、放課後になると部室で操縦桿を握った。

会長は生徒会の仕事がない日は毎日工場に通い、技術者と話し合いをしながら、レイヴィの製造過程を確認していた。

一方、素富と未来は攻撃直後、その事実が公になる前に売買しておくべき株や通貨の一覧表を作っていた。その草案を見せてもらったところ、次のような内容だった。

まず、攻撃によってアメリカ全体の景気が一時的に後退すると考えられるため、アメリカの代表的な企業の株価を総合したダウ工業平均のインデックスファンドを空売りしておく。また、有事の際に値上がりしやすいとされる金が上昇すると考えられるため、金も購入しておく。さらに、破壊対象となる施設を運営する証券会社の株とその保険会社、そして同様の事業を行っている証券会社の株を空売りしておく。また、報復攻撃により軍事的な需要が増加するとの見方が生じると予想されるため、軍需企業の株を購入しておく。その上、アメリカドルが下落すると考えられるので、ドルを売って安全資産とされるスイスフランと円を買っておく。 などなど。

素富と未来によると、攻撃が成功した暁には百億円程度の利益を見込んでいるという。

作戦決行！

レイヴィが完成したという連絡が入ったのは、十二月の末のことだった。攻撃当日について、会長は次のような計画を立てた。

まず、会長は生徒会の権限により、冬休みの一日を勝手に「地球環境を保護する日」に指定。温室効果ガスの発生を抑止するとともに、環境を大切にすることを育むという適当な理由をつけ、その日の部活動を全面的に禁止し、キャンパスを借り切ることにした。

そして、主翼と本体に分かれたレイヴィを工場からトラックで運び込み、キャンパス内で最終的な組み立てを行う。そして、給油を行ってから、滑走路となる中庭の端に移動させ、離陸させる。後は訓練通りの航路を飛行させ、対象に直撃させるというわけだ。

なお、攻撃成功後には、フラッシュオーダーを行っている他の企業にも同じく攻撃を加えるという声明をインターネットで公開し、自粛を促すらしい。

そして、作戦を決行する日がとうとうやってきた。

朝八時に学校に集合した私たちは、まずキャンパス内をくまなく歩き回り、他の生徒が登校していないか確認した。そして、誰もいないことを確認すると、今度は滑走路となる中庭の清掃を始めた。会長によると、中庭はレイヴィが離陸するのに必要な長さぎりぎりのため、わずかでも障害物があって減速してしまうと致命的らしい。私たちは中庭にあった見つけうる限りの小石をどけ、落ち葉やゴミも可能な限り除去した。

十時になり、二枚の主翼と胴体に分かれたレイヴィを乗せた三台のトラックが到着した。そして、工場の従業員たちが、胴体に主翼をつけ、レイヴィを完成させた。

初めて見るレイヴィは真っ黒に塗装されており、その流線的な形状は鳥の王様である鷹を思わせた。機体の両側には大きな外部燃料タンクが二つ取り付けられていた。両翼には機関銃のようなウェイヴ・サージャーがあり、さらに機体の上下にはそれぞれトロフィアの弾丸射出装置が取り付けられていた。

特別に手配されたタンクローリーからの給油がなされる中、レイヴィの圧倒的な存在感に思わず言葉を失った私に会長が言った。

「私が開発したステルス性の高い塗料を塗ってあるの。レーダーにはとらえられにくいはずよ」

給油が終わると、工場の従業員たちはレイヴィを動かすための通信装置を部室棟の屋上に設置した。会長と篠崎は通信に問題がないか確認するため、部室に行った。私を含む残りの部員は、再度滑走路の様子を確認し始めた。

確認が終わった私は、携帯電話で会長に連絡した。すると会長は、レイヴィを動かすから、機体に近づかないようにと言った。

私たちが中庭の近くにある草むらに入ると、遠くでレイヴィの機体がゆっくりと動き、滑走路の端に移動するのが見えた。

会長が電話で言った。

「ちゃんと滑走路の真ん中に乗れてる？ 何か問題はない？」

「はい。大丈夫です」

「じゃあ、離陸させるから部室に来て」

「わかりました」

私たちが部室に入ると、コックピットの画面には見慣れた中庭の風景が映っていた。いつも通っている中庭の映像をレイヴィのカメラ越しに見るなんて、なんか新鮮だ。

会長はディスプレイに表示される計器の状態を逐一確認してから、
「うん。問題ないわね。……では、篠崎さん。準備はいいかしら？ いつでも発進していいわよ」
「はい」

篠崎は深呼吸をしてから、ゆっくりと操縦桿を握った。まずはキーボードを操作し、ジェットエンジンを始動させた。ディスプレイに表示される出力のゲージが次第に上がっていくのが見えた。キーンというジェットエンジンの音が、レイヴィから離れたところにあるこの部室棟にまで聞こえていた。

出力が一定値を超えると、篠崎はジェット燃料の噴射を開始させた。途端、レイヴィは急発進し、画面に映る景色がみるみる変わっていった。両側に建ち並ぶ校舎の間を駆け抜け、さらに速度を上げていった。

レイヴィは今や中庭の端にある部室棟に接近しており、室内にはジェットエンジンの轟音が響き渡っていた。窓ガラスはガタガタと揺れ、今にも割れそうな勢いだ。私は思わず両手で耳をふさいだ。

なんて近所迷惑なんだ。後で問題にならないといいけど...

レイヴィが中庭の三分の二を走りきった時点で、篠崎はアフターバーナーに点火。同時にフラップを上げ、機首を上げた。すると、レイヴィの機体が浮かび上がり、表示される景色が空に変わった。

そして、レイヴィが一定の高度に達すると、篠崎はフラップを動かし、機体の角度を調整した。さらに、最も燃料を消費せず飛行できる程度にエンジンの出力を落とし、太平洋に向けて機体を旋回させた。

レイヴィが水平飛行に入ってからしばらくして、会長が言った。

「まずは離陸できたわね。これで第一の関門は突破よ。次は、無事に太平洋に出られるかね」

学校を出発してからはしばらくは障害物がなかった。だが、十分ほど飛行を続けると、前方に高層ビル群が出現した。しかし、事前にこの地域の衛星写真と地図を読み込んでいた篠崎は臆することなく、ビルの谷間を縫うようにレイヴィを飛行させ、難なく突破した。

さらに、高層マンションの建ち並ぶ臨海地帯も同様に突破し、レイヴィは海上に出た。そこで、私が篠崎と操縦を代わった。

障害物のない海上の飛行は地上の飛行に比べて楽だ。私は早期警戒システムに捉えられたり海に墜落したりすることのないよう、高度を一定に保つよう注意しながら飛行を続けた。

そして、メキシコの防空識別圏が接近したところで、再度篠崎と操縦を代わった。この後はメキシコとキューバの上を通過して北大西洋に出るはずだった。

だが、ここで予期せぬ事態が起こってしまった。メキシコの領空を抜け、メキシコ湾からキューバに近づいた直後、突然レーダー上に向かってくる三つの機影が現れた。会長は進行速度からそれらが邀撃機であると判断した。空軍力の高くないキューバなら接近しても気づかれないと思っていたそうだが、誤算だったようだ。

外部燃料タンクはすでに切り離されており、本体に残る燃料はあとわずか。ここで予定外の戦闘をしたり、遠回りしたりする余裕はない。

会長は無線交信用のヘッドセットをつけ、邀撃機からの呼びかけに備えた。するとしばらくして、キューバの領空に接近しているため、引き返すよう邀撃機側から警告があった。会長は当機はカナダ空軍の練習機であり、キューバに対する敵意はないため、上空を通過させてほしいと言ったが、拒否されてしまった。

会長がその旨を篠崎に伝えると、篠崎は焦った様子で、
「上昇しますか？」

会長は渋い表情で、

「いや、それだとアメリカの早期警戒システムに引っかかるわ。でも、このままだと...」

レーダーに映る三機の邀撃機は、レイヴィとの距離をみるみる詰めていた。篠崎の血の気が引いていくのが、後ろから見ている私にも分かるほどだった。

会長が言った。

「いいわ。上昇して」

その声と同時に、篠崎はアフターバーナーに点火。機体を一気に上昇させ、戦闘態勢に入った。

「敵のミサイルに大した追尾性能はないはずよ。トロフィアを使わずに躲して」

「了解っ！」

接近してきた邀撃機のうち一機からミサイルが放たれた。篠崎は即座に機体を宙返りさせてやりすごした。そして、機体が再び水平になるや否や、ウェイヴ・サージャーを発射。二機の邀撃機を撃墜した。すれ違った一機の邀撃機は反転し、レイヴィの後を追ってきた。

戦闘機にとって敵機に後ろをとられることは致命的だ。篠崎はもう一度機体を宙返りさせ相手の後ろをとろうとしたが、相手もほぼ同じタイミングで宙返りしたため、両者の位置関係に変化はなかった。

操縦桿を握る篠崎の手に汗が滲む。

篠崎はエンジンの出力を上げて振り切ろうとしたが、敵機はぴったりとレイヴィの後についてきた。そこで、篠崎は機体を急上昇させて上下を逆さにし、今度は横方向に百八十度回転させることによって、進行方向を変えた。これによって敵機との距離を引き離すことに成功した。そして、さらに旋回して機首を敵機に向けると、同じく旋回してきた敵機めがけて、ウェイヴ・サージャーを発射し、撃墜した。

こうして篠崎の機体は無事キューバ上空を抜け、北大西洋に入った。

「ふう」

額の汗をぬぐう篠崎。

「今の戦闘でアメリカ空軍に気づかれたわ。邀撃機が出てくるのは、シミュレーションよりも早いと」

会長が言い終わるのも待たず、レーダーには北西方向から接近する二つの機影が表示された。

会長の顔に焦りが浮かぶ。

「まずいわね。燃料も少ないのに」

残り燃料の表示は三パーセントを切っていた。

会長はヘッドセットを使い、接近してきた邀撃機からの無線を受けた。そして、予定通りカナダ空軍の機体であると言い、アメリカの空港への着陸を求めた。だが、そもそもレイヴィは敵と味方の識別に使われるIFFシグナルを発信していないなど正規の軍機としては不自然な点があるせいか、帰ってきたのは返答ではなく、二機のミサイルだった。

瞬時にウェイヴ・サージャーを撃った篠崎。だが、敵機はいとも簡単にそれを躲すと、レイヴィとの距離を詰めてきた。篠崎は機体を旋回させてミサイルを躲そうとしたが、失敗し、トロフィアが発動した。ミサイルは二機とも迎撃されたが、爆風によって機体に損傷が生じてしまったようだ。

篠崎はさらなる攻撃を避けるため、機体を限界上昇高度まで急上昇させた。そして、下から追ってきた一機に向かいバルカン砲を連射し、撃墜した。だが、その時はすでに、もう一機から発射されたミサイルがレイヴィに接近してきていた。回避が間に合わないとみた篠崎は、トロフィアに迎撃させた。表示される映像が激しく揺れ、機体が爆風による衝撃を受けていることが分かった。

レーダーには本土から現れたさらなる機影が七つ表示されていた。

「あらあら。大群のお出ましね」

青ざめた顔の会長。

トロフィアの残り弾数は七つ。邀撃機一機あたり二機のミサイルが搭載されていると考えれば、すべてを迎撃することは不可能だ。

すると、今までずっと静観していた梶富が口を開いた。

「篠崎さん。ここで負けたら完全にあなたのせいです。死んで詫びてください」

うわっ。こんな時に容赦のないことを言う。

「う、うるさいわねっ。ビッチは黙ってなさいっ！」

そして、篠崎は巧みな操縦桿裁きで、迫り来る三機のミサイルを同時に躲してしまった。

どうやら篠崎は梶富とやり合っているときの方が気合いが入るらしい。梶富が篠崎を煽ったのは、そのことを知っていたことだったのだろうか。

続けて、篠崎はもう三機のミサイルをトロフィアを使わずに回避した。地図を見ると、篠崎の機体はすでに本土の上空に達していた。

あと少しじゃない。

だが、私がそう思ったのも束の間、地上からは雨あられのようなPAC3による攻撃が待っていた。まるで火の絨毯が敷かれているのかと思うほどに、地上にはミサイル発射の火花が広がっていた。篠崎はトロフィアの残り弾数を一にまで減らしながらそれらをすべて回避し、目印のタワーに近づいていった。そして、対象を視界に捉えた瞬間、突然現れた一機のミサイルが最後のトロフィアを奪ってしまった。自らを守る盾を失ったレイヴィは今更引き返すこともできず、対象に向かって一直線に進んでいった。だが、あと数キロで対象に衝突するというところで、後ろをとった邀撃機からの機銃の掃射がレイヴィを直撃した。

ステータス画面には、エンジンが火災により停止した旨が表示されていた。そして、機体の速度が急激に低下していった。

まずい。落ちる。

部室にいた誰もがそう思ったことだろう。だが、篠崎は落ち着いてフラップを調整し、機体を滑空させていた。みるみる縮まっていく対象との距離。

そして、画面は対象の壁を捉えたのを最後に、ぷつりと消えてしまった。ステータス画面には、応答なしと表示されていた。

誰もが声を失っていた中、最初に声を上げたのは会長だった。

「作戦成功っ！」

その声で我に返った梶富と未来が、取引用に用意されていたパソコンに向かってキーボードを叩き始める。

未来が言った。

「スリッページがほぼ以前の水準に戻っています」

「やっぱりシステムは破壊されたのね。よくやったわ」

会長は緊張から解き放たれ放心状態になっている篠崎の頭をなでると、自分のノートパソコンを使い、声明文をアップロードする作業に入った。

やることのない私は後ろからその様子を眺めていた。会長は送信元が特定されないよう通信経路を隠蔽するシステムを使って、複数の政府や報道機関に各国語の声明文を送信していた。その内容は次の通り。

私たちは、市場から公平性と透明性を奪う悪の企業に正義の鉄槌を下しました。フラッシュオーダーは限定された者のみが常に利益を上げられる不公正な取引であるため、市場から消滅しなければなりません。今後も同様の行為を行う企業に対しては同様の裁きが下されます。

声明文のアップロードが終了すると、会長はアメリカのニュースサイトで今回の事件についての報道がないか確認した。すると、東海岸に謎の飛行機が飛来し、墜落した模様という記事があった。

「まだ詳細は判明していないみたいね。まあ、これ以上分かると思えないけれど…」

ウィンドウをスクロールさせ、すべてのヘッドラインを確認した会長。

続いて、私は未来と梶富のところに行ってみた。すると、二人はすでに計画通り株と為替の売買を終えていたそうで、会長と同じニュースサイトを見ながら、チャートを眺めていた。

未来によると、市場には早くも反応があったという。まず、レイヴィが米国の領空を侵した時点でいち早く金価格が上昇。そして、レイヴィが目標に突っ込んだ時点でさらに上昇し、それに続くようにスイスフランと日本円も上昇。そして、第一報が出された時点では、すでに軍需企業の株価が軒並み上昇しており、一部はストップ高に達していたという。

多くの指標が未来と梶富の予想通りに動く中、下落を予想していたインデックスファンドにはあまり変化がなかったという。この理由を未来は、攻撃によって市場に不安が広がったものの、米ドルが対円で大幅に下落したことから、輸出が有利になると考えられ、むしろ買われる株があったためと推測した。そこで、空売りしてあったインデックスファンドはすぐに買い戻したという。

また、梶富と未来は、近くアメリカが今回の攻撃に対する報復攻撃を宣言するが、犯人が特定できないため実際に攻撃は行われず、やがて軍需企業の株価は元の水準に戻ると予想していた。そこで、購入していた軍需企業の株をすべて売却し、およそ三十億円の利益を獲得した。一方、安全資産とされる金やスイスフラン、円はまだ上昇しそうな勢いがあったため、継続して保有することにしたという。

そして、アメリカ政府が今回の攻撃に対し公式声明を発表したのは、攻撃から二時間後のことだった。大統領は遊説先からの中継で、「合衆国が何らかの攻撃を受けたが、危難は去った」と述べ、国民に慌てて株を売り、犯人を利することがないように呼びかけた。そして、私たちの出した犯行声明に言及した後、「犯人には正義が下されるべきだ」と述べた。

このころにはアメリカや日本のメディアを始め、世界中のメディアが今回の事件と私たちの声明文を取り上げていた。市場の効率性を損なうフラッシュオーダーを否定した私たちを正義の味方と賞賛する者もいれば、国際社会を恐怖に陥れた悪質なテロリストと非難する者もいた。大部分の意見は私たちに否定的なものだったが、その理由を未来はディズラエリの資本が世界中のメディアを支配しているためだと言っていた。

そして、大統領の演説が終わってから数分後、梶富と未来は上昇の勢いが鈍ってきたスイスフランと円を売却し、およそ八十億円の利益を獲得した。攻撃からわずか数時間の間に、二人の獲得した利益は百十億円に達していた。

私たちは手を取り合って、作戦成功の喜びを分かち合った。そして、投資部を後にした私たちは、みんなで九条のカジノに行き、祝杯を挙げた。

エピローグ

私たちがフラッシュオーダーの施設を攻撃する作戦を遂行してから、一ヶ月が経った。このころには株も為替もスリッページはほぼ夏休み前の水準に戻っていた。正体不明の敵に狙われるという恐怖から、ゆくゆくは残りのフラッシュオーダーの施設も消滅するだろうと会長は言っていた。また、アメリカは施設攻撃の犯人を特定することができなかつたらしく、事件に関する報道は今や下火になっていた。私たちはまた株や為替のトレードができるようになり、いままで通りの部活動を取り戻すことができた。

事件によって獲得した利益のうち、一部はレイヴィを作ってくれた工場への代金の支払いに充てられ、残りの百億円は投資部と会長で山分けされた。九条と会長の交渉により、レイヴィの改造を担当した会長が四十億円を受け取り、残りの六十億円を投資部が受け取った。篠崎は会長の取り分が多すぎると最後まで文句を言っていたが、今回の成功は会長の協力なしにはなしえなかったことだし、そもそも投資部の部員と違って株や為替オタクではない会長が協力してくれたのは、最初からそのお金が目当てだったからなのかもしれない。

投資部の獲得したお金の一部は部の資産としてさらに運用することになり、残りは各部員に分配されることになった。お金を受け取った瀬名は、妹に手術を受けさせるためアメリカに飛んだ。

ところで、最近では未来の祖国であるディズラエリが他国の侵略を受けて滅んだというニュースが盛んに報じられていた。未来によると、フラッシュオーダーが行えなくなったことにより、ディズラエリがアメリカへの金銭的支配を継続できず、アメリカから支援を得られなくなると見た複数の隣国が宣戦布告したのだという。そして、一週間に渡る激戦の末、ディズラエリはこの地球から消滅してしまったそうだ。

うれしそうにニュースを見ていた未来を見て、私はあることに気づいてしまった。そいえば、未来は最初から仇である自分の兄が治めるディズラエリをなくすことを目論んでいたのかな。まったく。本当に抜けない妹だ。